

博 多 104

— 博多遺跡群第144次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第850集

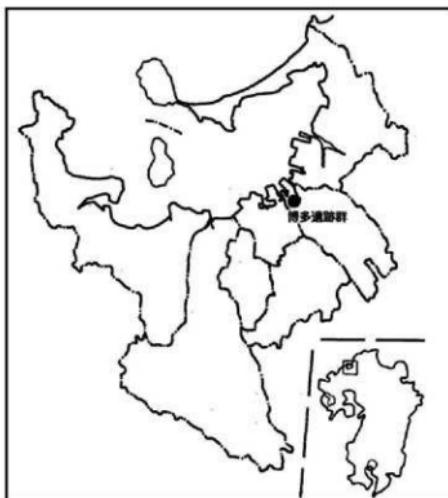
2005

福岡市教育委員会

博 多 104

— 博多遺跡群第144次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第850集



遺跡略号 調査番号
HKT-144 0334

2005

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成15年度に実施した共同住宅ビル建設に伴う博多遺跡群第144次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、ご協力を頂いた株式会社田園興産の皆様および、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が博多区網場町117番1～3、118番1～4、119番1・2におけるビル建設に伴い、発掘調査を実施した博多遺跡群第144次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
0334	HKT-144	400m ²	2003.7.28～11.28

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、中村桂子が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は星野、名取さつき、遠藤茜、長家伸が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は星野が行った。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は松村道博が行った。
7. 本書に掲載した挿図の作成は山口朱美、副田則子、安野良、木本恵利子、星野が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。
9. 遺構の呼称は井戸をSE、土坑・石積遺構をSK、溝をSD、埋葬関連遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
10. 挿図中の遺物番号に付した数字は包含層の層位を示し、アルファベットについてはFig.4に記すグリッド記号である。
11. 本書で記述する輸入陶磁器、国産陶器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編一』(太宰府市の文化財第49集) 2000年
乗岡実『備前焼標鉢の縦年について』第3回中近世備前焼研究会資料 2000年
12. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
13. 出土銅鏡は付論に一括して掲載している。
14. 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
15. 本書の執筆は付論を除いて星野が行った。
16. 付論として九州大学大学院比較社会文化研究院 中嶋孝博教授による人骨に関する分析、同センター 片多雅樹による銅鏡の調査、並びに大規模事業等担当 屋山洋による獸骨の報告を掲載している。
17. 本書の鋳造関連遺物・金属器・ガラスの保存科学的分析は同センター 比佐陽一郎が行った。
18. 本書の編集は星野が行った。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 調査の方法と経過	4
2. 調査の概要と基本層序	4
3. 遺構と遺物	12
1) 井戸	12
2) 土坑	59
3) 溝	81
4) その他の遺構	85
5) その他の遺物	86
IV.まとめ	94
〈付 論〉	
1. 福岡市博多遺跡群第144次調査出土の獣骨について (大規模事業等担当 屋山 洋)	94
2. 福岡市博多遺跡群第144次調査出土の中世人骨 (九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋 孝博)	95
3. 博多遺跡群第144次調査出土錢について (福岡市埋蔵文化財センター 片多 雅樹)	96

挿図目次

Fig. 1 博多遺跡群発掘調査地域図 (1/10,000)	2
Fig. 2 調査地点の位置 (1/2,000)	3
Fig. 3 調査区中央土層実測図 (1/40)	5
Fig. 4 第1・2面全体図 (1/100)	7
Fig. 5 第3面全体図 (1/100)	8
Fig. 6 第4面全体図 (1/100)	9
Fig. 7 第5面全体図 (1/100)	11
Fig. 8 SE01実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 9 SE02実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 10 SE07実測図 (1/40) 土層図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 11 SE08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig. 12 SE202実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig. 13 SE205実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig. 14 SE207実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	18

Fig. 15 SE216実測図 (1/40)	19
Fig. 16 SE216出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig. 17 SE241実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	21
Fig. 18 SE301実測図 (1/40)	22
Fig. 19 SE301出土遺物実測図① (1/3)	23
Fig. 20 SE301出土遺物実測図② (1/3)	24
Fig. 21 SE302実測図 (1/40)	25
Fig. 22 SE302出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig. 23 SE303実測図 (1/40)	27
Fig. 24 SE303出土遺物実測図① (1/3)	28
Fig. 25 SE303出土遺物実測図② (1/3)	29
Fig. 26 SE304・305実測図 (1/40) 土層図 (1/60) および出土遺物実測図① (1/3)	30
Fig. 27 SE304・305出土遺物実測図② (1/3)	31
Fig. 28 SE316実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig. 29 SE319実測図 (1/40)	33
Fig. 30 SE319出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig. 31 SE350実測図 (1/40)	35
Fig. 32 SE350出土遺物実測図 (1/3)	36
Fig. 33 SE357・361実測図 (1/40)	37
Fig. 34 SE357出土遺物実測図 (1/3・1/2)	38
Fig. 35 SE361出土遺物実測図 (1/3)	38
Fig. 36 SE367実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	39
Fig. 37 SE376実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	40
Fig. 38 SE380実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	41
Fig. 39 SE385実測図 (1/40)	41
Fig. 40 SE385出土遺物実測図 (1/3)	42
Fig. 41 SE394実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	43
Fig. 42 SE395実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	44
Fig. 43 SE396実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	45
Fig. 44 SK398・SE399実測図・土層図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	46
Fig. 45 SE3167実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	47
Fig. 46 SE3173実測図 (1/40)	48
Fig. 47 SE3173出土遺物実測図 (1/3)	49
Fig. 48 SE3178実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	50
Fig. 49 SE3181実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	51
Fig. 50 SE3188実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	52
Fig. 51 SE3189実測図 (1/40)	53
Fig. 52 SE3189出土遺物実測図 (1/3)	54
Fig. 53 SE3200実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	55
Fig. 54 SE3203実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	56
Fig. 55 SE3205実測図・土層図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	57
Fig. 56 SE587実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	58

Fig. 57 SE588実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	59
Fig. 58 SK101実測図 (1/40)	60
Fig. 59 SK108実測図 (1/40)	61
Fig. 60 SK116実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	62
Fig. 61 SK119実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	63
Fig. 62 SK123実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	64
Fig. 63 SK124実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	64
Fig. 64 SK125実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	65
Fig. 65 SK131実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	65
Fig. 66 SK136実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	65
Fig. 67 SK225実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	66
Fig. 68 SK240・244・246・247・248・384実測図 (1/30)	67
Fig. 69 SK240・244・246・247・248・384出土遺物実測図 (1/3)	68
Fig. 70 SK250実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	69
Fig. 71 SK251実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	70
Fig. 72 SK315最上層出土遺物実測図 (1/3)	71
Fig. 73 SK315上層遺物出土状況実測図 (1/30) および上層出土遺物実測図① (1/3)	72
Fig. 74 SK315上層②・中層出土遺物実測図 (1/3・1/4)	73
Fig. 75 SK315下層・最下層出土遺物実測図 (1/3)	74
Fig. 76 SK323実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	75
Fig. 77 SK379実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	75
Fig. 78 SK3124実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)	76
Fig. 79 SK3180出土遺物実測図 (1/3・1/4)	77
Fig. 80 SK3193実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	78
Fig. 81 SD3194・4105・4111・4116出土遺物実測図 (1/3・1/4)	79
Fig. 82 SX364・3154・435実測図 (1/20)	80
Fig. 83 SX364・366・3154・435出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/4)	81
Fig. 84 その他の出土遺物実測図① (土師器・須恵器・国産陶器) (1/3)	82
Fig. 85 その他の出土遺物実測図② (黒色土器A類) (1/3)	83
Fig. 86 その他の出土遺物実測図③ (楕円型黒色土器B類) (1/3)	84
Fig. 87 その他の出土遺物実測図④ (黒色土器B類) (1/3)	85
Fig. 88 その他の出土遺物実測図⑤ (縦内型瓦器) (1/3)	86
Fig. 89 その他の出土遺物実測図⑥ (瓦器) (1/3)	87
Fig. 90 その他の出土遺物実測図⑦ (中国白磁) (1/3)	88
Fig. 91 その他の出土遺物実測図⑧ (中国青磁) (1/3)	89
Fig. 92 その他の出土遺物実測図⑨ (中国・ベトナム陶磁器) (1/3)	90
Fig. 93 その他の出土遺物実測図⑩ (高麗・朝鮮陶磁器) (1/3)	91
Fig. 94 その他の出土遺物実測図⑪ (铸造関連遺物・銅製品・鉄製品・土製品・骨角器) (1/2・1/3)	92
Fig. 95 その他の出土遺物実測図⑫ (石製品) (1/3)	93
Fig. 96 出土銅錢 1	97
Fig. 97 出土銅錢 2	98
Fig. 98 研ぎ出し工程	100

表目次

Tab. 1 出土「銅錢」一覧表	96
Tab. 2 遺構別「銅錢」一覧表	96

図版目次

Ph. 1 H鋼設置	4	Ph.36 SE350(東から)	35	Ph. 71 SK131(北から)	65
Ph. 2 調査区中央土層(北東から)5	Ph.37 SE357(南から)	37	Ph. 72 SK225土層(南から)	66	
Ph. 3 1・2面全景(南東から)6	Ph.38 SE357-361(東から)	37	Ph. 73 SK240-244-247-248(東から)	68	
Ph. 4 南側中央部分全景(南西から)6	Ph.39 SE387(南から)	39	Ph. 74 SK240-244-247-248(南から)	68	
Ph. 5 2面全景(南東から)6	Ph.40 SE376(南から)	40	Ph. 75 SK246(北から)	69	
Ph. 6 2面北西側(南東から)6	Ph.41 SE385(南から)	41	Ph. 76 SK250(南から)	69	
Ph. 7 調査区西側3面全景(北東から)10	Ph.42 SE385出土遺物	41	Ph. 77 SK384(北から)	69	
Ph. 8 調査区東側3面全景(南東から)10	Ph.43 SE394(南から)	43	Ph. 78 SK240光査状況(西から)	69	
Ph. 9 調査区西側4面全景(南西から)10	Ph.44 SE395(南から)	44	Ph. 79 SK251(北から)	71	
Ph.10 調査区東側4面全景(南東から)10	Ph.45 SE395出土遺物	44	Ph. 80 SK251(北から)	71	
Ph.11 調査区西側5面全景(北東から)10	Ph.46 SE396(東から)	45	Ph. 81 SK251(西から)	71	
Ph.12 調査区東側5面全景(南東から)10	Ph.47 SE399(南から)	46	Ph. 82 SK251出土遺物	71	
Ph.13 SE01(北西から)	Ph.48 SE3167(西から)	47	Ph. 83 SK315遺物出土状況(北東から)	72	
Ph.14 SE01出土遺物	Ph.49 SE3167出土遺物	47	Ph. 84 SK315出土遺物	74	
Ph.15 SE02(南西から)	Ph.50 SE3173(東から)	48	Ph. 85 SK323(北から)	75	
Ph.16 SE07(南西から)	Ph.51 SE3178(西から)	50	Ph. 86 SK379(西から)	75	
Ph.17 SE07土層(南東から)	Ph.52 SE3181(北から)	51	Ph. 87 SK3124(東から)	76	
Ph.18 SE07・08(西から)	Ph.53 SE3181井側遺物状況(東から)	51	Ph. 88 SK3180(東から)	77	
Ph.19 SE202(南西から)	Ph.54 SE3189(北から)SE3189出土遺物	53	Ph. 89 SX364(西から)	80	
Ph.20 SE202出土遺物	Ph.55 SE3200(東から)	55	Ph. 90 SX364(北から)	80	
Ph.21 SE205(南西から)	Ph.56 SE3203(東から)	56	Ph. 91 SX364脛骨後面状況(西から)	80	
Ph.22 SE205・216出土遺物	Ph.57 SE3203(東から)	56	Ph. 92 SX435(東から)	80	
Ph.23 SE207(南西から)	Ph.58 SE3205(南から)	57	Ph. 93 SX3154(南から)	81	
Ph.24 SE216(西から)	Ph.59 SE587(南東から)	58	Ph. 94 SX3154脛蓋骨後面状況(東から)	81	
Ph.25 SE216石積状況(西から)	Ph.60 SE588(北から)	59	Ph. 95 SX366出土遺物	81	
Ph.26 SE241(東から)	Ph.61 SK101出土遺物	60	Ph. 96 包含層出土黒色土層A層・二彩大鉢	83	
Ph.27 SE301(南から)	Ph.62 SU15地盤500ASU15出土遺物	61	Ph. 97 ピット・包含層出土施釉黑褐色土器群	84	
Ph.28 SE302(北から)	Ph.63 SK116(東から)	62	Ph. 98 ピット・包含層出土施釉黑褐色土器群	86	
Ph.29 SE302出土遺物	Ph.64 SK116(北から)	62	Ph. 99 ピット・包含層出土陶磁器	90	
Ph.30 SE303(北から)	Ph.65 SK119(南から)	63	Ph.100 包含層出土埴燒	92	
Ph.31 SE303出土遺物	Ph.66 SK119出土遺物	63			
Ph.32 SE304・305(東から)	Ph.67 SK123(南から)	64			
Ph.33 SE304・305出土遺物	Ph.68 SK124(西から)	64			
Ph.34 SE316(北から)	Ph.69 SK125(北から)	65			
Ph.35 SE319(南から)	Ph.70 SK136(南から)	65			

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2002年11月1日、株式会社田園興産より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に博多区鋼場町117番・118番他（面積:1249m²）におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋蔵文化財課では、2002年11月19日に試掘調査を行う予定であったが、建物の基礎が残っていたため、掘削できなかった。事業主側による基礎の除去・破碎工事終了後、2003年1月23日に再度試掘を行った。現地表面から約2.4m下で遺構を確認した。両者で協議を行った結果、建物建築部分の400m²を対象として記録保存のための発掘調査を実施することになった。博多遺跡群第144次調査は2003年7月28日から11月28日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社田園興産

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男（前任）山口謙治（現任）

同課調査第2係長 田中壽夫（前任）池崎謙二（現任）

調査庶務：文化財整備課 御手洗清

事前審査：同課事前審査係長 池崎謙二（前任）濱石哲也（現任）

同係主任文化財主事 米倉秀紀（前任）吉留秀敏（現任）

同係文化財主事 田上勇一郎（前任）久住猛雄（現任）

調査担当：同課調査第2係文化財主事 星野恵美

調査作業：石橋テル子 近藤澄江 澄川アキヨ 中村フミ子 村田敦子 岩本三重子

越智信孝 藤野トシ子 清伸英 長野嘉一 本郷満子 関哲也 専田綱代

宗像正勝 宮川ヤエ子 中村サツエ 藤野幾志 前田勉 中村桂子

西川シズ子 徳山孝恵 宮崎幸子 富永美樹 速山薰 原勝輝 坂本久幸

川下信弘 松本修一 片岡博 富田歓生 桑野孝子 三浦まり子

原口善吾 中島道夫 大村順一 古賀淨太郎 広瀬つぐみ 芹川淳子

奥野正人 下澤聰 藤本佳孝（以上九州大学学生）

整理作業：馬場イツ子 加集和子 山本良子 樋口三恵子 西島信枝 松尾真澄

木本恵利子

調査・整理協力：埋蔵文化財センター 比佐陽一郎 片多雅樹

発掘調査から報告書作成に至るまで株式会社田園興産をはじめとして福屋建設株式会社、多数の関係者の皆様には多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

また、出土遺物については森本朝子氏、田中克子氏から多大なるご教示を賜りました。記して感謝いたします。

II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は地理的にみると、博多湾に面した砂丘列の上に立地している。西を博多川、東を石堂川に、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地理的にも独立した一角をなしていた。この砂丘は繩文海進以降に形成されたもので、3つの砂丘列からなり、内陸側の2つの砂丘は「博多濱」、博多湾側の砂丘は「息濱」と呼ばれている。今回の調査地点はこの「息濱」と「博多濱」との境をなす旧湾部にかけて傾斜する「息濱」の南斜面上に位置する。

博多は古来より対外交渉の拠点として発展してきた町である。その中心は海岸線の後退や人工的な干拓によって、「博多濱」から「息濱」へと抜がっていったことが、発掘調査等により確認されてい



Fig. 1 博多遺跡群発掘調査地域図 (1/10,000)

る。「博多演」では夜白式土器が包含層から出土しており、この頃から人々の痕跡がうかがえる。弥生時代中期になると竪穴式住居や甕棺墓などが營まれ、古墳時代前期には方形周溝墓、中期には前方後円墳も造られている。しかし、これらの時期のものは「息濱」では確認されていない。「息濱」で確認されている遺構は古く遡っても11世紀である。鎌倉時代の13世紀後半、2度にわたる元寇で、博多の街は焼かれ、「息濱」には元寇防星が築かれる。発掘調査では焼土層が多く見られ、その一つとして1333年の鎮西探題襲撃が挙げられる。この乱の鎮圧の恩賞として大友貞宗が建武政権から「息濱」を与えられている。その後、1348年、室町幕府は博多を官領所在に指定し九州の在地勢力を抑え、1371年、今川了俊が鎮西探題として赴任する。しかし、1395年、了俊は解任され、渋川満頼、義俊父子が探題となる。父子は1420年朝鮮使節を迎えるにあたって、市街整備を行い、博多の道路を整備する。しかし、鎮西探題も長続きせず、1429年までに、「息濱」は再び大友氏の支配となる。大友氏は「息濱」を拠点に、朝鮮との貿易を積極的に繋り広げ、莫大な利益を得るが、博多の入港公事に関する権利は筑前守護台の大内氏が持っていた。そのためこの権利を巡って、大友氏と大内氏は度々対立し、1532年、戦火を交え、大内氏が「息濱」を奪っている。「息濱」は勘合貿易によって大きな利潤を産み出す地域であったため、戦国時代になると諸大名の争奪の的となる。当時の博多は商人達による自治都市が形成され、繁栄を極めていたと伝えられる。しかし、度重なる戦火の末、1586年立花城を攻めあぐねた島津氏が博多の町を焼き払ってしまう。この博多の町が復興するのは翌年の豊臣秀吉による九州制圧後である。博多商人の神屋宗満、島井宗室らの手によって新しい町割りが作られる。17世紀初めには、「息濱」と「博多演」を隔てていた湿地が埋め立てられ、博多は近世都市として誕生する。

今回の調査地点は、この「息濱」の南西端に位置し、地形は北側から南側へ傾斜していく部分にある。



Fig. 2 調査地点の位置 (1/2,000)

III. 調査の記録

1. 調査の方法と経過

調査に先行して、事業主による矢板設置と同時に表土の鋤取りを行った。表土鋤取りによる堆土は場外搬出を行っている。現地表面は標高約5.2mを測る。試掘調査結果、および隣接する60次調査成果から、現代の整地層、搅乱層を重機で除去した。



Ph. 1 H鋼設置

現地表面から北側で約1.7m、南側で2.5mの盛土

を除去した結果、遺構面は標高約3.5～2.7mと南西方向に傾斜した。そのため、標高の高い北東側を第1面として調査を行い、次に南西側の標高2.7mに高さを揃えて第2面を行う予定であった。しかし、時間的な制約と第3面までの土層に明確な整地層が確認できなかったこと、第1面・第2面ともに近世の面であり大きな時期差を認められなかったことから、第2面は南西側のみ調査し、北東側は、標高約2.2mの第3面まで掘削した。第4面は標高約2m、第5面は標高約1.4mを測る。

人力による掘削はまず大きく搅乱を受けていた南側中央部分から開始した。この面は、標高1.3mを測り、第5面に相当する。ほぼ基盤となる砂層で調査を行い、その後廃土置き場とした。次に北側の第1面、南側の第2面の調査を行った。第3面からは土砂の場外搬出を最小限にして欲しいという事業主側の要望もあり、北東側の調査を第5面まで終了させた。その後、南西側を第3面から第5面まで調査し、調査終了した北東側を廃土置き場とした。調査対象面積は400m²であったが、矢板設置に伴う掘削や法面掘削のため、実際の調査面積は320m²であった。

2. 調査の概要と基本層序

本調査地点は博多遺跡群を構成する3列の砂丘のうち、最も海側にある「息濱」上に位置し、「息濱」が内陸側に落ち込む傾斜面にあたる。

本調査区は南側中央部の搅乱以外は、良好な状況で遺存していた。第3回の土層図は南中央擾乱部分を調査した際のものである。第2面から基盤の砂層までのもので、上層の現地表面から第2面までは矢板の設置を行った関係から土層図の作成は行えなかった。また、第1面は「1. 調査の方法と経過」で前述したように標高の高い北東側を第1面と設定したため土層図には表れていない。試掘調査や鋤取り時の状況から、概ね現地表面のアスファルトの下1.5m付近まではコンクリートや現代の盛土、その下40cmは暗褐色砂質土と黃灰色砂の近代末の層があり、暗褐色～暗灰黄色シルトの近代層、その下に暗灰黄色砂質土～暗褐色砂質土の中世の層に到達する。

調査を行った第2面の層は22層のオリーブ灰色土～灰色土の層である。炭化物を多く含む層で、多くの遺構が切り込んでいる。北東側の第1面は標高約3.1～3.5mを測る。第2面は2.5～3.1mを測る。とともに南西側に向かって傾斜するが、これは人為的な削平に伴うものである。第1面では16世紀から近世にかけての石積み遺構3基、土坑を検出した。第2面では近世の井戸5基、16世紀から近世にかけての石積み遺構6基、土坑を検出した。第3面は標高約2.2mを測る5層の黄褐色砂質土で設定した。第1面から第2面にかけて傾斜があった面は第3面ではほぼ水平となった。検出した遺構は11世紀から16世紀の井戸27基、石積み遺構1基、土坑、溝を検出した。多数のピットの中には根石の置かれたピットも検出した。振り込みを確認できなかったが、足を屈曲させた人骨とその直下に火葬骨、包含層掘削中に人骨が出土した。全て12世紀代のものである。第4面は標高約2mを測り

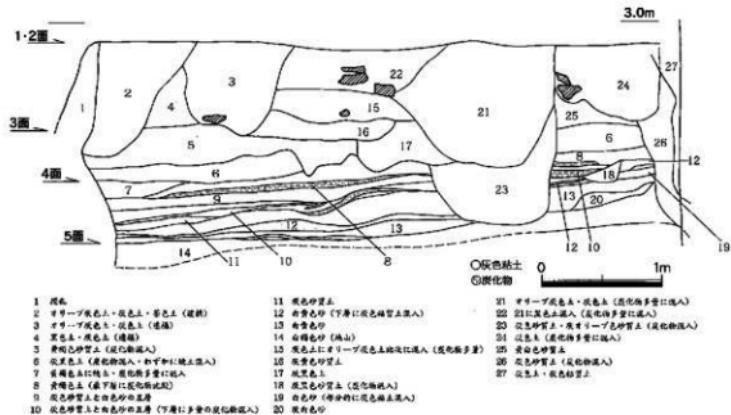


Fig. 3 調査区中央土層実測図 (1/40)

北西側から南東側にかけて緩やかに傾斜する。調査区は第3面で検出した井戸に削平されており、CD-EH-L区にしか遺存せず、ほぼ半分の面積に縮小する。南側にはぼく跡を描えて12世紀の溝3条、12世紀の人骨を検出した。他は大半がピットである。7層の焼土層と8層の黄褐色土の上面を造構面とした。8層は下の方に多く炭化物が混入する。部分的に焼土が詰まるが、5cm程の薄い堆積であった。第5面は白褐色砂の基盤層を造構面とした。第4面から第5面にかけては明確に分層できるが、時間の制約もあり、細かく掘削することはできなかった。第5面は第4面同様、北西側から南東側にかけて緩やかに傾斜する。これは調査区が内陸側に落ち込む緩斜面にあたるためである。第5面では南側で12世紀代の井戸2基とピットを検出した。

調査時の造構番号については南側中央攪乱部分を01から始まる2桁の数字を、また1~5面に関しては頭に面の数字を記した3桁~4桁の番号を用いた。第1~2面は各々101~201から始まる3桁の番号を、第3面は301~399~3100への4桁の番号を記した。第4~5面は第3面と同様である。この番号は造構の種別に関わらず、面毎の通し番号とした。包含層の遺物は調査区に打ち込まれている地中葉に沿ってA~Lのグリッドを設定し、取り上げた (Fig. 4)。

次に包含層遺物についてであるが、量的なものは層の厚さにも起因すると考えられるため、大きな傾向としてつかみたい。まず、国産陶磁器と輸入陶磁器において、最上層の1面は国産の陶磁器（肥前系陶磁器、備前焼、瀬戸・美濃焼）が3箱、中国・朝鮮陶磁器が1箱と圧倒的に国産が多く、特に肥前系陶磁器の割合が高い。1~2面では国産陶磁器（2箱）の割合は減少し、輸入陶磁器（4箱）の割合が高くなる。国産陶器では備前の割合が増え、輸入陶磁器では明代の龍泉窯系青磁が増加する。2~3面では上層と同じ傾向が続く。国産陶磁器（2箱）は肥前系の割合が減り、輸入陶磁器（5箱）では同安窯系青磁が現れ、龍泉窯系青磁の中でも巡糞が増加していく。3~4面では全体の陶磁器の出



Ph. 2 調査区中央土層（北東側）

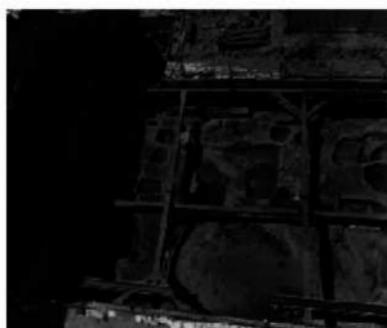
土量が減少する。肥前系の陶磁器は1点も見られず、国産陶器でも備前焼が10点にもみたない。輸入陶磁器（1箱）は青磁の出土量が減少し、その中では越州窯系青磁の割合が高くなる。朝鮮・高麗陶磁もほとんど見られなくなる。4～5面では国産陶磁器は出土しない。上層と同じく、輸入陶磁器（1箱）は白磁の割合が高く、青磁は少量であるが、越州窯系とごくわずかに同安窯系・龍泉窯系が出土する。次に土師器であるが、最上層～3面までは大半が回転糸切り底である。3～4面になるとヘラ切り底の割合が増える。4～5面では糸切り底はごく僅かで、丸底杯が出土し始め、須恵器の割合も多くなる。最後に黒色土器と瓦器であるが、最上層～3面までは量的に少ない。黒色土器A・B類、瓦器が在地型、楠葉型を問わず、まんべんなく入る。3～4面ではやや在地型が多い。楠葉型の大半は瓦器椀であるが、4～5面になると黒色土器B類の割合が高くなる。また黒色土器A類も増加し、逆に在地型の瓦器椀がほとんど見られない。5面では瓦器は出土せず、黒色土器A類の割合が高く、在地の黒色土器B類、少量の楠葉型が入る。



Ph.3 1・2面全景 (南東から)



Ph.4 南側中央部分全景 (南西から)



Ph.5 2面全景 (南東から)



Ph.6 2面北西側 (南東から)

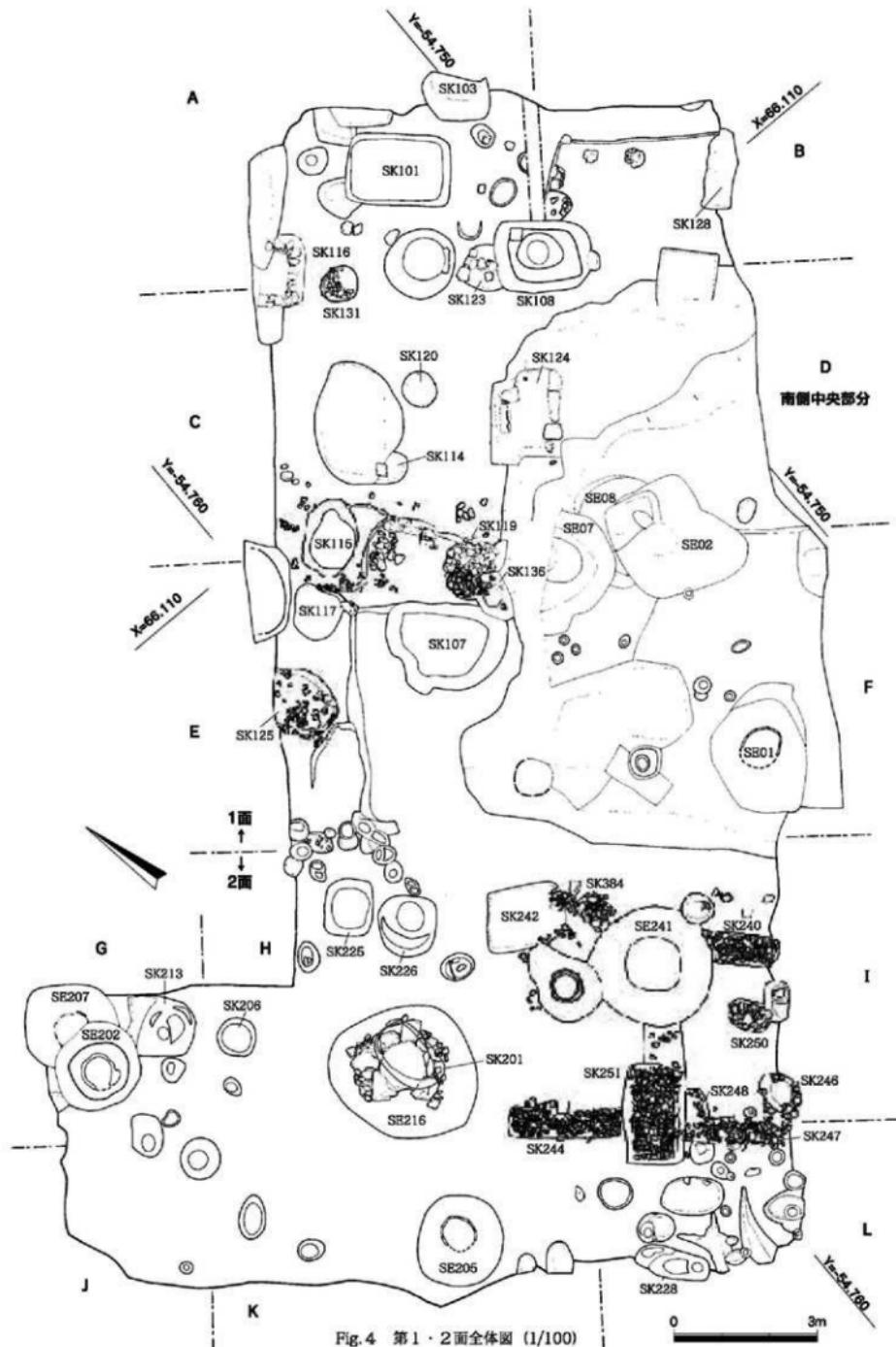


Fig. 4 第1・2面全体図 (1/100)

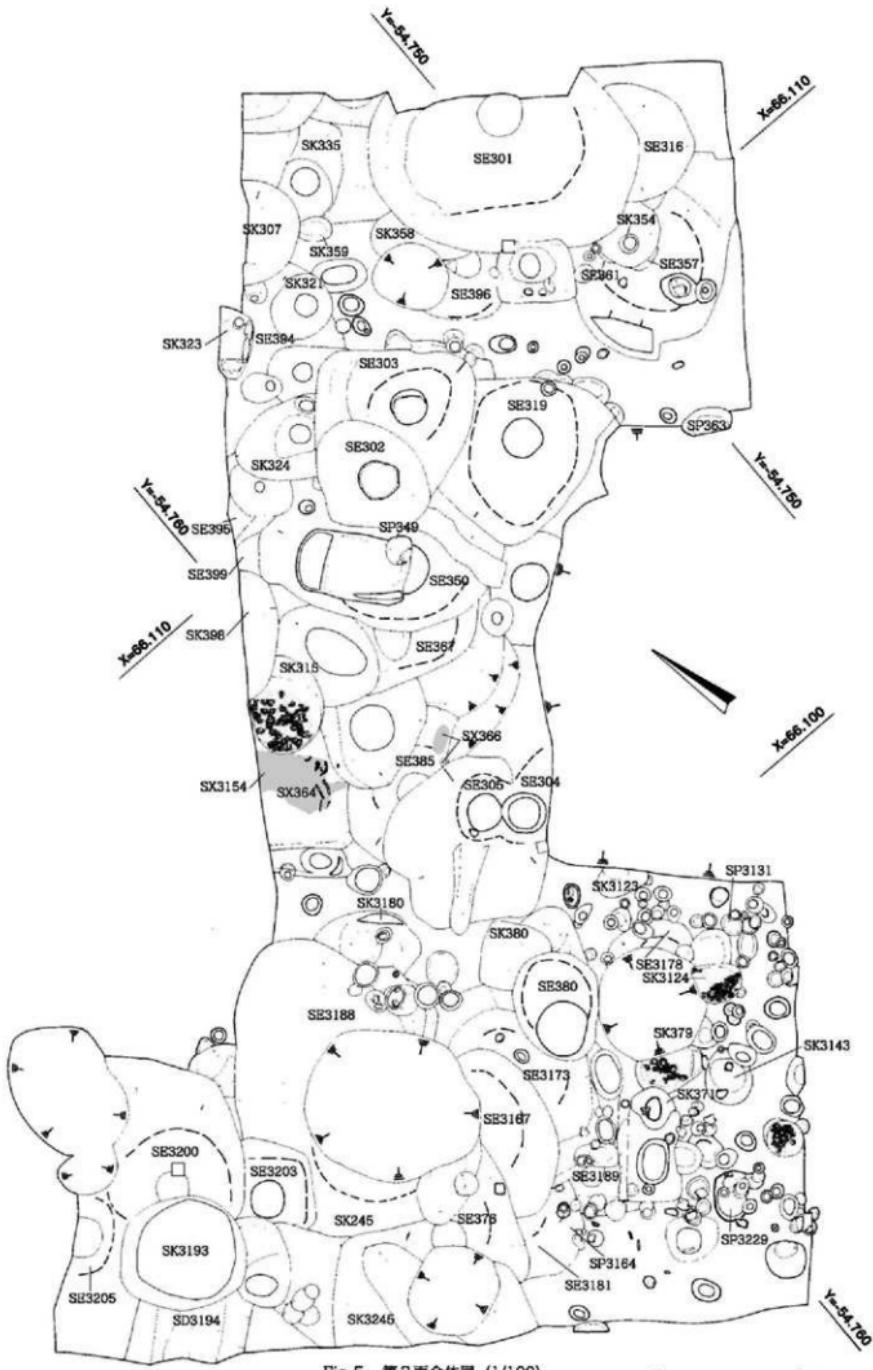


Fig. 5 第3面全体図 (1/100)

0

3m

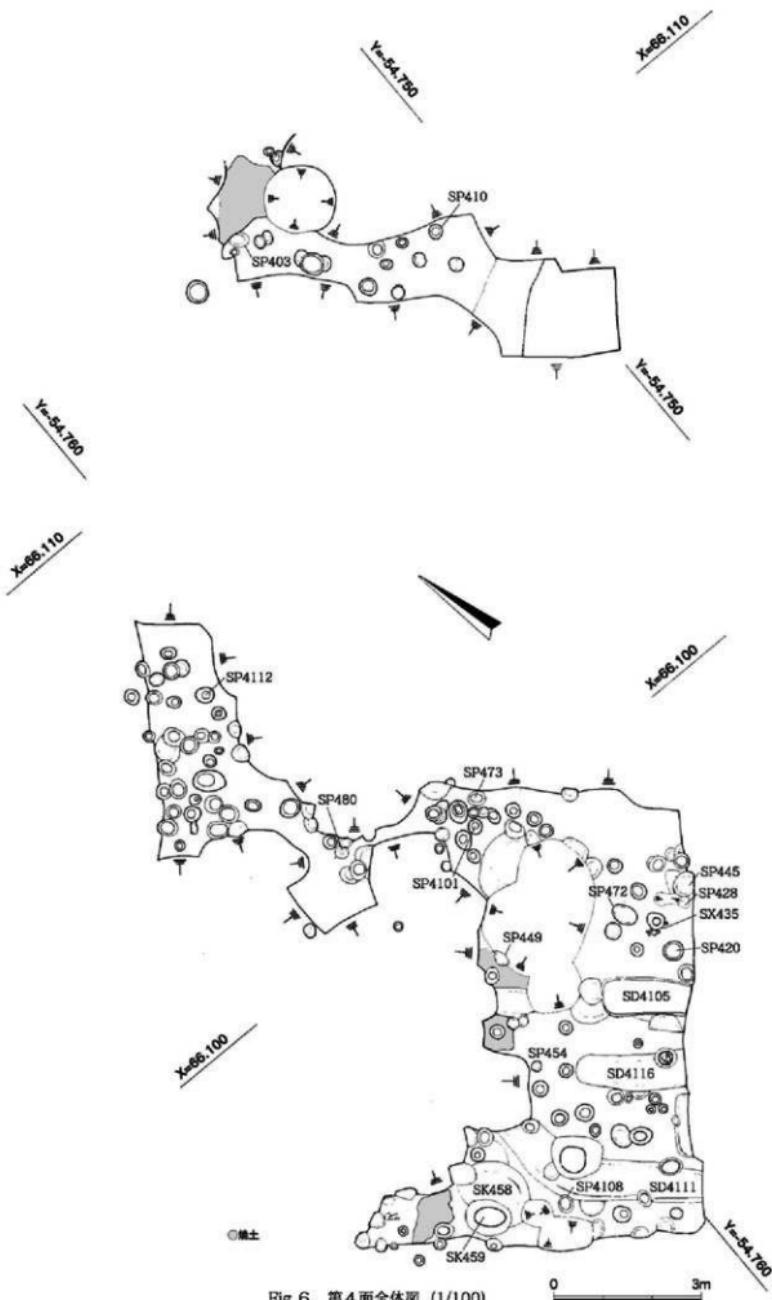


Fig. 6 第4面全体図 (1/100)



Ph. 7 調査区西側3面全景（北東から）



Ph. 8 調査区東側3面全景（南東から）



Ph. 9 調査区西側4面全景（南西から）



Ph. 10 調査区東側4面全景（南東から）



Ph. 11 調査区西側5面全景（北東から）



Ph. 12 調査区東側5面全景（南東から）

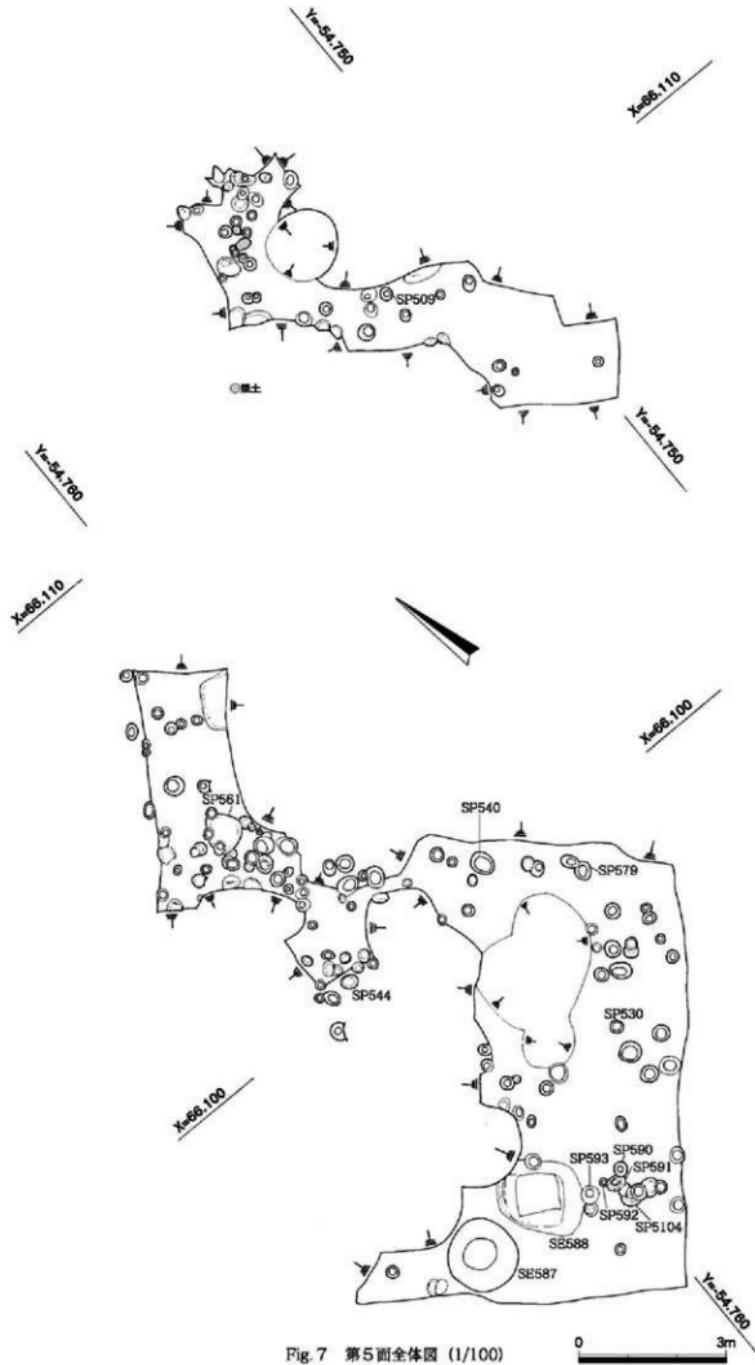


Fig. 7 第5面全体図 (1/100)

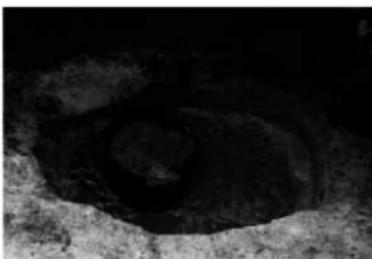
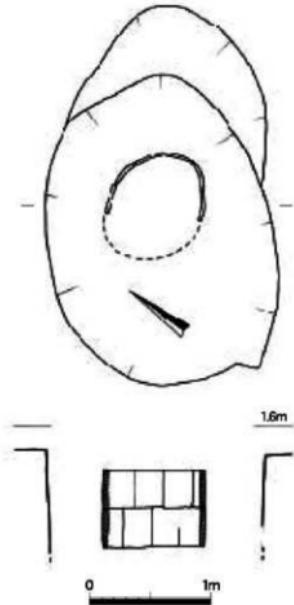
3. 遺構と遺物

1) 井戸

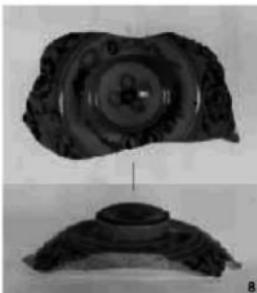
井戸は11世紀から近世に至るまでの38基を検出した。井側には瓦組、石組、木桶、板組等がある。標高0.6m付近で湧水し壁面が崩落するため、これ以上深く掘削することができなかった。

SE01 (Fig.8 Ph.13) 南側中央部分F区で検出した。掘方は東西方向にやや長い径1.85～2.5mの横円形を呈する。井側は瓦組で、東側の2段が残存し、直径0.7～0.9mの1段11枚で構成されたと考えられる。使用された井戸瓦は長さ30cm、幅24cm、厚さ3.3cmを測る。

出土遺物 (Fig.8 Ph.14) 1～5は回転糸切り底の土師器で、1～4は小皿、5は壺である。6は玉縁の口縁部をもつ壠前の甕である。7は内外面に鶴連弁をもつ明代の青磁である。8は肥前系



Ph.13 SE01 (北西から)



Ph.14 SE01出土遺物

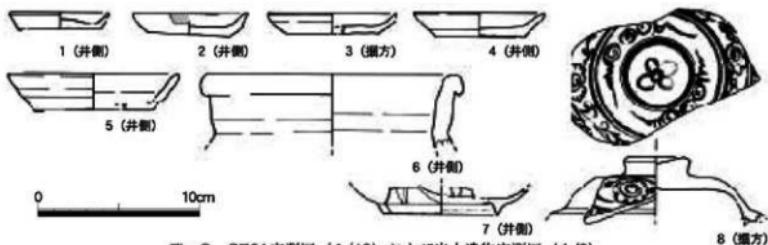


Fig.8 SE01実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (1/3)

の染付の蓋か。他に備前焼の擂鉢、磁窯の盤、明代の端反の白磁、高麗陶器、朝鮮軟質白磁が出土する。時期は遺物から17世紀後半と考えられる。

SE02 (Fig.9 Ph.15) F区で検出し、掘方は2.5~3.1mの梢円形を呈する。標高1.2m付近で直径約70cmの井側と考えられる暗灰色のやや粘性のある砂質土を掘方のほぼ中央に確認した。しかし

0.4m付近で湧水のため崩落し、それ以上掘削できなかった。木質等は遺存しない。

出土遺物 (Fig.9) 9~11は回転糸切り底の土器類の小皿である。12・13は黒色土器B類の碗で13は桶葉型である。14~16は瓦器類で14・15は柿葉型である。17・18は白磁、17は碗XI-4類で外面には陽刻鋸連弁文を有する。18は碗IV類である。19は越州窯系青磁碗の底部片である。20は中国施釉陶器の壺の口縁部片である。井側内からは他に同安窯青磁の小片が出土する。また、井戸廃棄後の上層から龍泉窯系青磁I-5類(錦連弁文)が出土することから井戸の時期は12世紀中頃から後半と思われる。



Fig. 9 SE02実測図 (1/40) および出土物実測図 (1/3)

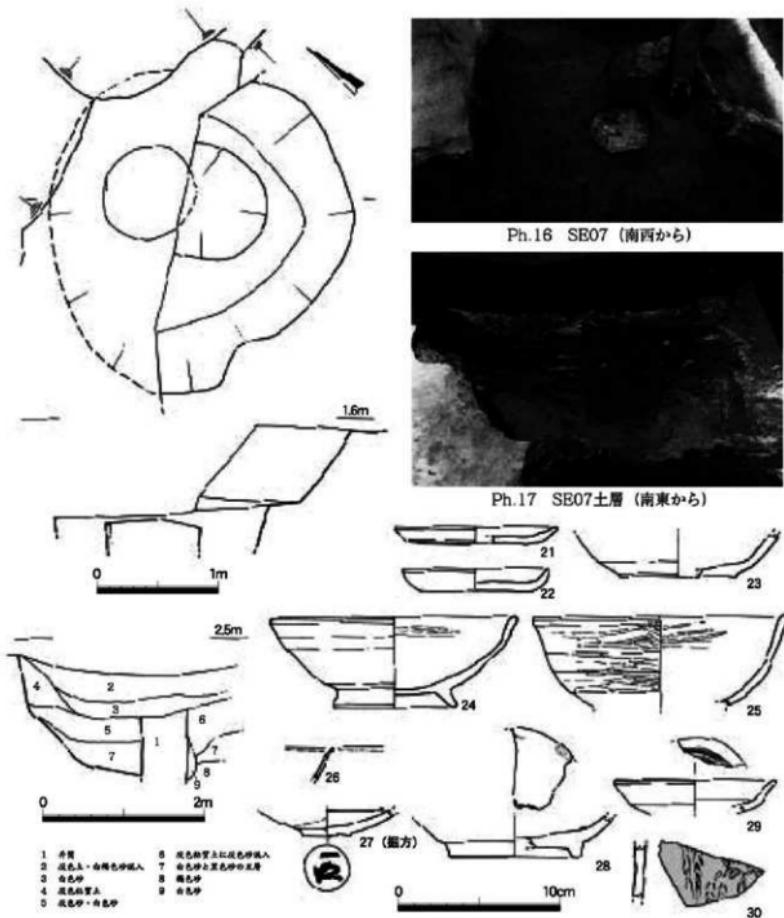


Fig.10 SE07実測図 (1/40) 土層図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

SE07 (Fig.10 Ph.16・17) 井戸の半分が南側搅乱部分F区に位置したため、その部分を先行して掘削し、残りの北側部分は3面の調査時に掘削を行った。そのため、図面上で一致させることができなかった。掘方は直径約2.5mを測る。検出面からの深さ約60cmにやや平坦面を作り、直径約76cmの井側を据える。井側上部には幅1~1.5cmを測る木質が長さ5cm程遺存し、井側には木桶が使われたと考えられる。標高0.5mまで掘削したが、それ以上は湧水のため断念した。

出土遺物 (Fig.10) 21・22は土師器の小皿で、21は回転ヘラ切り底、22は回転糸切り底で、21は板状圧痕を有する。23は回転糸切り底をもつ土師器の壊である。24は土師器の楕で、丸みをも

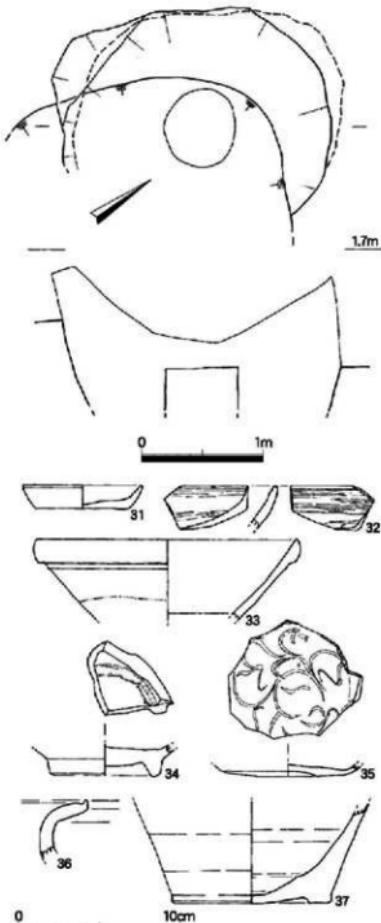


Fig.11 SE08実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



Ph.18 SE07・08 (西から)

つ体部からそのまま口縁部に至る。高台径は7.4cmを測り、やや外側に開く。体部内面上半には研磨の痕跡が残る。25は黒色土器B類の椀である。口縁部はわずかに外反し、体部内外面にヘラ研磨を施す。26・27は白磁で26は碗IV類、27は皿VI-1-a類である。外底部には墨書きを有する。28は越州窯系青磁碗I-2-a類の底片である。高台疊付の軸は削られ、底部内面と疊付部分に目跡を有する。29は龍泉窯系青磁皿I-2-c類で、内面見込みには片彫りと櫛目により花文を施す。30は朝鮮時代の梅瓶で、黒色土と白色土で象嵌を施す。井側内からは遺物は出土しなかった。掘方から12世紀前半を示す遺物が出土し、上層には14世紀に至るまでの遺物が混入する。切り合い等から13世紀後半から14世紀初頭と考えられる。

SE08 (Fig.11 Ph.18) 南側中央部分D区で検出した。東側をSE02、西側をSE07に切られる。掘方は南北方向に約2.4mを測り、壁面はややオーバーハングしている。標高0.7m付近で直径約60cmの井側痕跡を掘方のほぼ中央に確認した。しかし0.4m付近で溝水のため崩落したためそれ以上掘削できなかった。木質等は遺存しない。

出土遺物 (Fig.11) 31は回転糸切り底の土師器の小皿である。32は楕円型瓦器椀の口縁部片である。口縁部は丸くおさめ、内面には浅い沈線が巡る。内外面の研磨はやや不明瞭である。33～35は白磁で33は碗IV類、34は碗VII類、35は皿VI-2-b類である。36・37は中国陶器の壺である。36は褐釉四耳壺の口縁部片である。胎土は白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。口縁部は頸部から大きく外反し、端部は上方へ摘み上げている。37は底部片で灰オリーブ色の釉が外面から疊付中央部分にまで施される。胎土は白色砂粒を含み、内面は灰色、底部外面は淡赤色を呈する。井側からは遺物が出土していない。上層の遺物と切り合い等から井戸の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

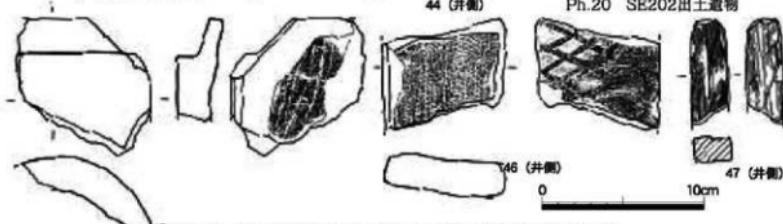
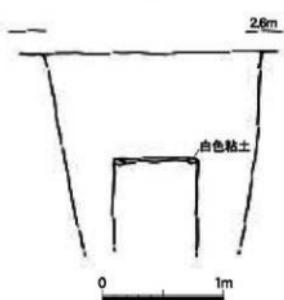
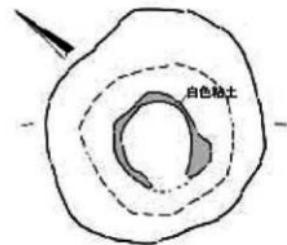
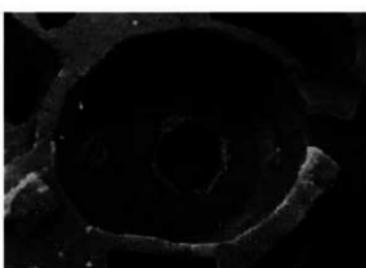


Fig.12 SE202実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

- 16 -

SE202 (Fig.12 Ph.19) 第2面G区に位置する。掘方は約1.8mを測り、壁面は緩やかに落ちていく。標高1.5mの深さで、白色粘土を検出した。白色粘土は直径55~65cmの円形に巡っていた。軸は最も厚い部分で15cm、厚さは約5cmを測る。他の井戸から瓦組の井側内に粘土を検出することから、SE202は井側に瓦を用いていたと考えられる。

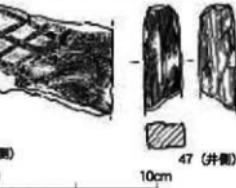
出土遺物 (Fig.12 Ph.20) 38~40は土師器である。38は京都系土師器皿の模倣品で、回転ヨコナマで調整を施す。胎土には金雲母、赤褐色粒を多く含み、橙色を呈する。39・40は回転糸切り底で39は小皿、40は壺である。41・42は肥前系陶器の碗である。41は褐釉の小碗で、赤色から赤灰色の均一な胎土をもち、釉が高台付近まで厚く掛かる。42は内面に濃緑色を呈する釉薬がかかり、内面見込み部分の釉を輪状に搔きとる。外面にはやや緑色を帯びた透明の釉薬がかかること。胎土は粘性の少ない灰白色を呈する。43は土師質土器の火舍で、菊

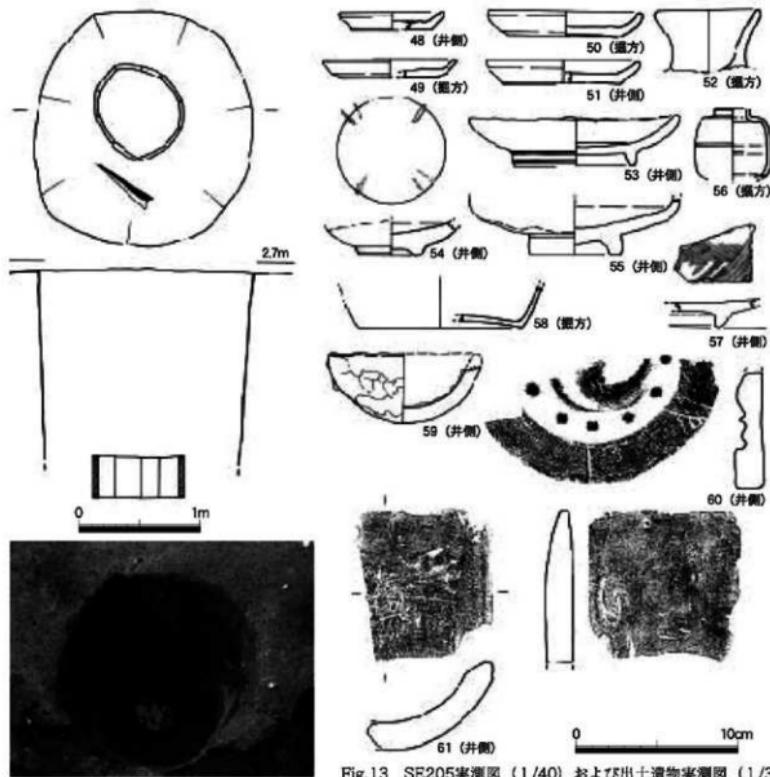


Ph.19 SE202 (南西から)

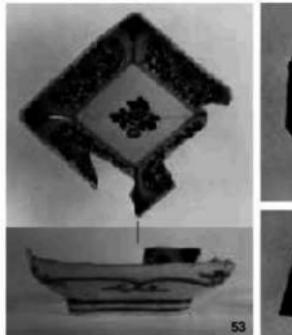


Ph.20 SE202出土遺物





Ph.21 SE205 (南西から)



Ph.22 SE205・216出土遺物

Fig.13 SE205実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

花文のスタンプを印刻する。44はペトナム陶磁の無釉陶器の壺である。胎土は内面がにぶい褐色、外面は灰黒色を呈し、精良で、粘性が強い。色調は内面が明褐色、外面はにぶい褐色を呈する。締まった頸部から口縁部が長く上方に伸びる。口縁部は内面に丸みをもって突出し、上端部は平坦な面をもつ。口縁部外面には「コ」字状の深い沈線を2条巡らせ、体部上部と中央部分には細い沈線を巡らせる。45は丸瓦で凹面には布目が残り、凸面にはヘラナテを施す。46は平瓦で凹面には布目が認められ、凸面には大きな斜格子目のタタキの後、ナ

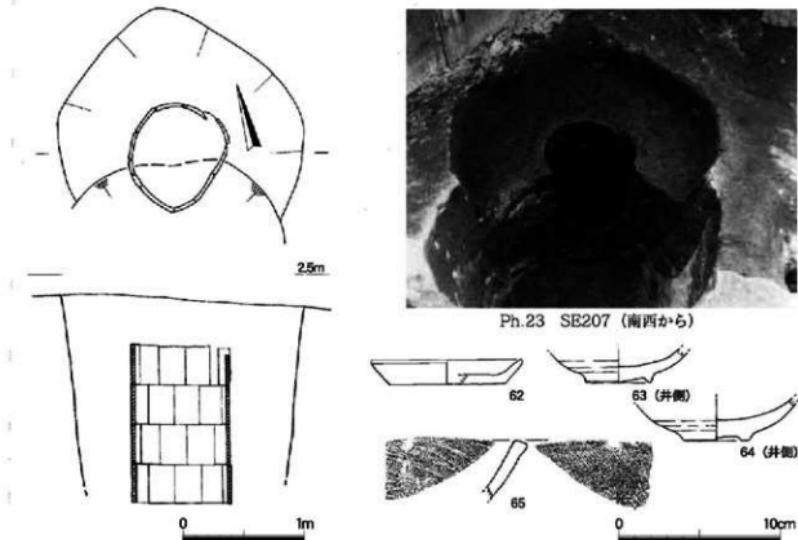


Fig.14 SE207実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

デを加えている。47は細粒砂岩製の砥石である。以上の出土遺物から17世紀後半と考えられる。

SE205 (Fig.13 Ph.21) 第2面K区で検出した。掘方は約1.8~1.9mの円形を呈する。井側は瓦組で、直径0.65~0.7mの1段10枚で構成される。使用された井戸瓦は長さ34cm、幅24cm、厚さ3.5cmを測る。井戸瓦の最下面是標高約0.55mである。

出土遺物 (Fig.13 Ph.22) 48~51は回転糸切り底の土師器の小皿である。52~55は肥前系陶磁器で、52は受皿のつく灯明皿であるが、受皿部分は欠損する。胎土は金雲母を多く含み、暗褐色を呈する。内面には多く煤が付着する。53は方形の染付皿で、口縁部は波状を呈する。高台内には二重方形枠に「福」銘が記される。54・55は陶器の碗で、いずれも底部片である。54は灰色の粘性を帯びた胎土で、灰白色の釉が施され、体部外表面下部は露胎である。内面見込には細長い胎土目が対峙して認められる。55は砂粒を含んだ灰色の胎土で、露胎部分は明褐色を呈する。内面と外表面下部に白濁色の釉が厚くかかる。56は備前焼の茶入である。口縁部は直立し、端部はわずかに外反する。復元口径2.2cm、復元高は4.4cmを測り、体部中位に1条の浅い沈線が巡る。胎土は黒色粒を含み灰黒色、外表面の色調は暗褐色を呈する。57は中国の染付である。胎土は明褐色を呈し、全面に化粧土が施される。墨付には砂目が付着する。58は朝鮮陶器の底部片である。器壁は3mmと薄く、上げ底を呈する。59は坩堝片である。銅滓および溶解した銅が内面から口縁部外表面にかけて厚く付着する。

「EDX分析」からは「縁上の茶褐色付着部分では鉄が強く現れるほかに銅、鉛、錫を検出」、「WDX分析」からは「内面は銅、鉛が強く、他にヒ素、亜鉛が微弱なピークで見られる」。60は三巴文の軒丸瓦で、巴頭部が大きく、圓線は認められない。61は平瓦で凹面にはわずかに布目が見られ、凸面には強いナデを加えている。井筒からは肥前系の角皿等が出土。以上の出土遺物から井戸の時期は18世紀前半と考えられる。

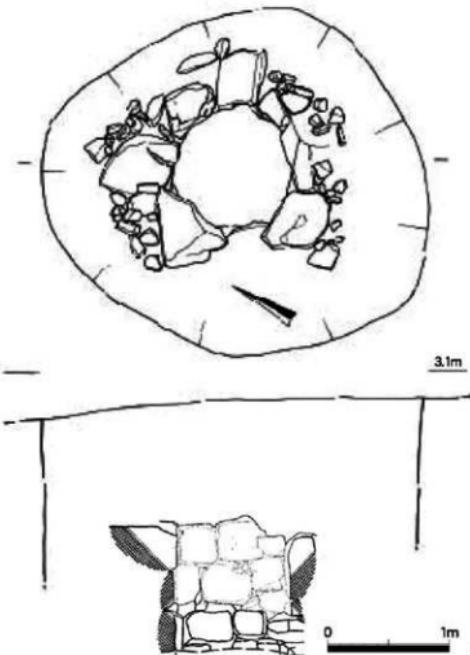
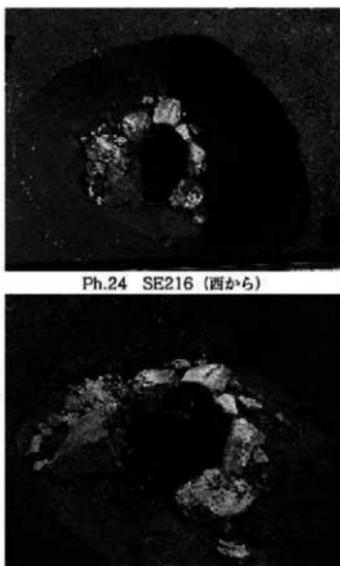


Fig. 15 SE216 実測図 (1/40)



Ph.24 SE216 (西から)

Ph.25 SE216 石積状況 (西から)

SE207 (Fig. 14 Ph.23) 第2面
G区で検出したSE202に切られた井戸
である。掘方は約2.0mの円形を呈する。

井側は瓦組で、直径0.7~0.75mの1段10枚で構成される。使用された井戸瓦は長さ30cm、幅24cm、厚さ2.5cmを測る。井戸瓦の最下面是標高約0.65mである。

出土遺物 (Fig.14) 62は回転糸切り底の土師器の小皿である。63・64は肥前系陶器の碗である。63は白色砂粒を含んだ灰色の胎土に濃緑色の釉がかかっている。外面下半は露胎で、露胎部分は褐色を呈する。64は二次加熱を受けており、わずかに黄緑色の釉がうかがえる。とともに高台外底部はへそ状に削っている。65は瓦質土器の鉢である。外面は刷毛目調整の後、部分的にナアを行っている。出土遺物から井戸の時期は16世紀末と考えられる。

SE216 (Fig.15 Ph.24・25) 第2面H区で検出した井戸である。掘方2.9~3.1mの南北にやや長い梢円形を呈する。井側は石組みで、直径1.0mの筒を作る。標高0.8m付近まで石を確認したが、それ以下は湧水のため掘削していない。木質は検出できなかった。比較的大きな石で面を作り、裏込めには拳大の石を用いる。

出土遺物 (Fig.16 Ph.22) 66~69は回転糸切底の土師器である。66~68は小皿で、口径6.8~8.2cm、器高は1.0~1.5cmを測る。67は口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと思われる。69は杯で口径10.6cm、器高2.5cmを測る。70は肥前系陶磁の染付碗である。71は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗で、体部は直線的に開き、口縁部との境で屈折し、端部はやや外反する。胎土は砂粒を含んだ橙色、灰色を呈し、釉は明茶褐色である。72は東播系の須恵質土器の鉢である。73は土

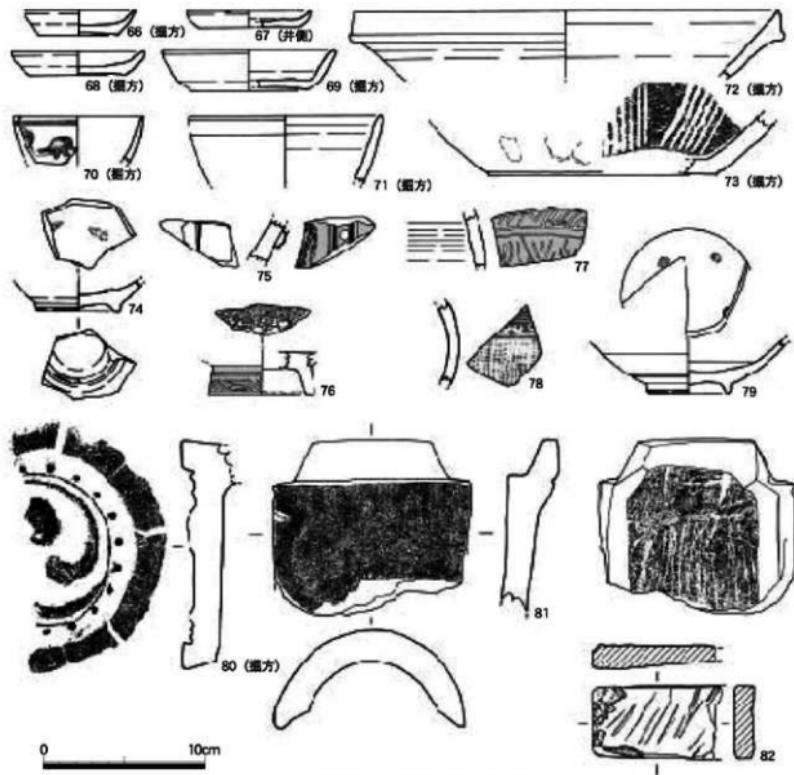
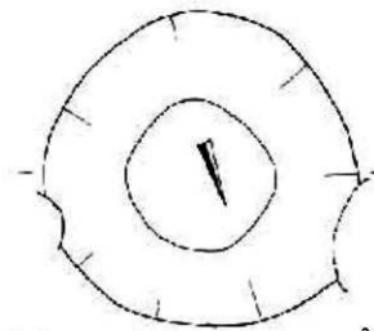
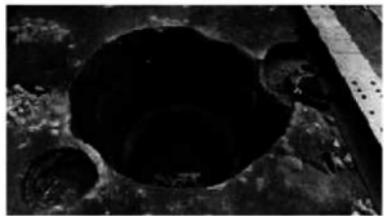


Fig. 16 SE216出土遺物実測図 (1/3)

師質土器の擂鉢で、幅の太い5条のすり目が見込の際まで施される。74~79は高麗・朝鮮時代の磁器である。74は高麗青磁の碗の底部片で、疊付の釉は搔き取る。見込部分と疊付には白灰色耐火土目が認められる。75は高麗時代の象嵌青磁である。器形は大きく口が開く鉢と思われる。西側の隣地で調査を行った143次地点で同一個体と思われる口縁部の破片が出土する。口縁部外面は2本の白色象嵌の間に黒色象嵌を配置した3本1組で区画を作り、その間には柱状の粘土を貼り付け、切れ目を入れる。区画には花文や柳の木が描かれている。内面には外面の区画と同じ位置に細いヘラにより沈線を入れて区画を作っている。本調査地点では、3本の区画の象嵌と貼り付け部分、柳の文様部分が出土する。胎土は中心が淡茶色、外側と内側が灰色の層状となる。76は粉青沙器の碗の底部片で、高い高台をもち、疊付部分の釉は搔きとる。高台外面と見込みには白土による象嵌が施される。77・78は粉青沙器の瓶の肩部片で、ともに白土による象嵌が施される。77は内側が茶色、外側が灰色の胎土で、内面は粗い削りで調整される。78は内側が白灰色、外側が灰色の胎土で、内外面共に丁寧なナナド仕上げである。79は硬質白磁である。高台付近まで釉がかかり、露胎部分は明橙色である。



3.1m SE241 (Fig.17 Ph.26) 第2面Ⅰ区で検出した井戸である。掘り方は約2.6mの円形を測る。中央には直径約1.2mの黄褐色土の井側を検出したが、木質等は見られなかった。



Ph.26 SE241 (東から)

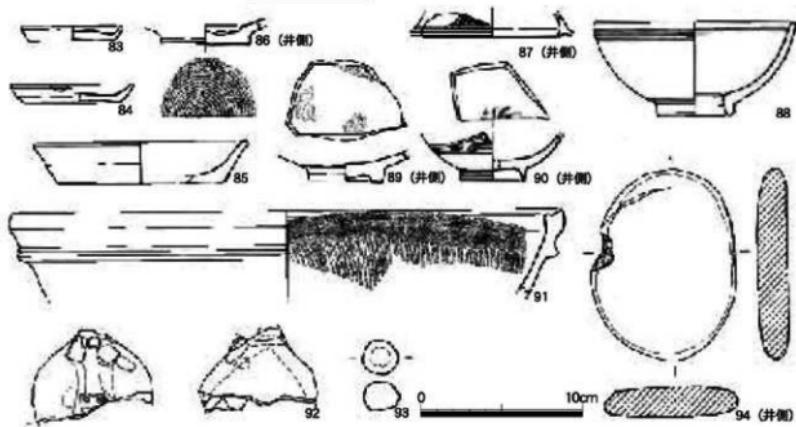


Fig.17 SE241実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

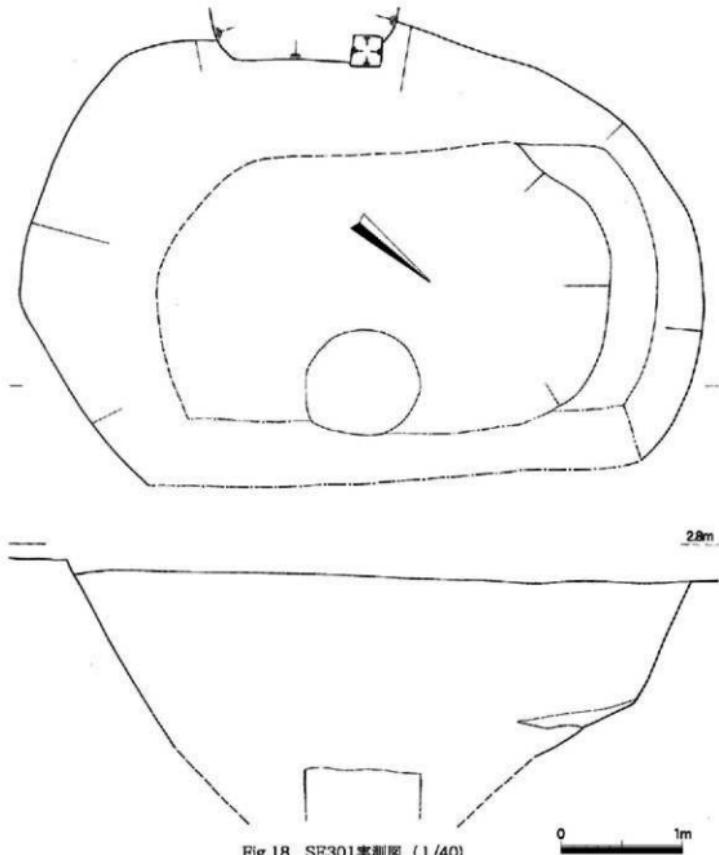
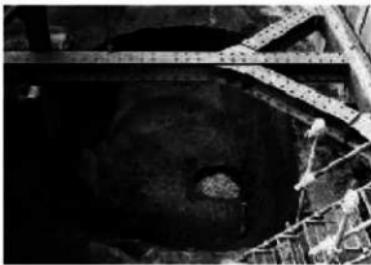


Fig.18 SE301実測図 (1/40)



Ph.27 SE301 (南から)

出土遺物 (Fig.17) 83~85は回転糸切底の土解器である。83・84は小皿で、口径6.2cm、7.5cm、器高0.9cm、1.1cmを測り、84は口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと思われる。85は壊で、口径13.2cm、器高は2.5cmを測る。86は東播系の須恵器の椀で、底部は平高台である。見込には窪みがある。87~91は肥前系陶磁器である。87は色絵蓋で、赤で絵付けされている。88は染付碗で、白濁色の釉が厚くかかる。89は陶器碗で、見込には3箇所の砂目が残る。胎土は明橙色の砂

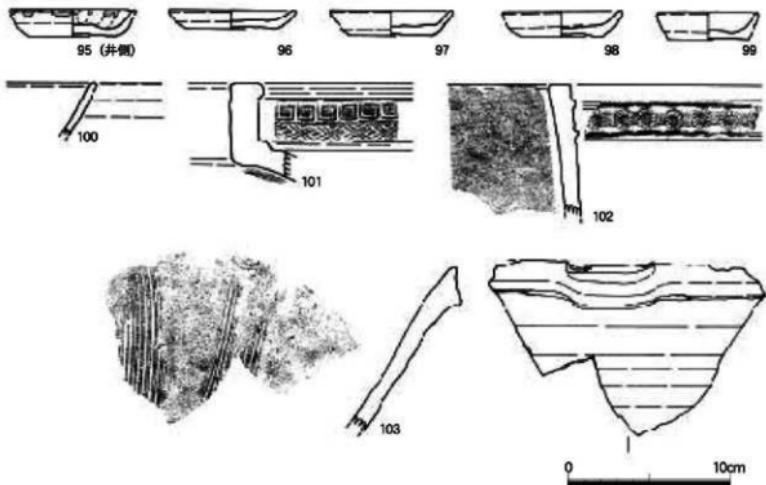


Fig.19 SE301出土遺物実測図① (1/3)

質を帯び、枇杷色の釉薺がかかる。90は色絵碗の底部片で、見込と外面には赤・黄・緑で唐草文様を描く。91は陶器の擂鉢で、隙間なく全面にすり目が施される。92・93は土鈴と鳴玉である。土鈴は動物の顔を模して作られている。鼻の部分は遺存するが、耳は半分欠損し、目は残っていない。93の鳴玉は長径2.0cm、短径1.8cmの梢円形を呈する。94は花崗岩で石鍤として利用されたと思われる。一方の抉りは明確だが、もう一方は敲打の痕跡はあるが不明瞭である。長さ11.6cm、幅8.8cm、厚さ1.8cm、重さ271.81gである。他に銅鏡「大口通寶」が上層より出土した。出土遺物から時期は17世紀後半と考えられる。

SE301 (Fig.18 Ph.27) 第3面AB区で検出した井戸で、東側は調査区外に延びる。掘り方は長軸方向が5.6mの梢円形を呈する。壁は緩やかに落ちるが、北西側の壁は中位程でやや傾斜を変えて落ちていく。標高1m付近で中央に直径約0.9mの井戸の痕跡を検出した。井戸の壁面にはわずかな木質を確認した。

出土遺物 (Fig.19・20) 95～99は回転糸切底の土器部の小皿で、口径6.2～7.8cm、器高1.2～1.7cmを測る。95は口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと思われる。100は東播系須恵器の鏡である。101・102は瓦質土器の火舟である。101は外面に雷文と菱形文、102は菊花文のスタンプを印刻する。ともに外面はヘラ研磨調整を行い、内面は刷毛目とナデを施す。103は備前焼の片口の擂鉢である。中世5期のもので、すり目は8条施され、口縁部の色調は赤褐色、体部付近はにぶい灰褐色を呈する。104～106は白磁である。104は明代の碗で、口縁部は緩やかに外反する。105は明代の皿で、口縁端部は面取りされ、高台外底部には巴文の墨書きが記される。106は碗IV類の底部片で、高台外底部には墨書きが残る。107・108は龍泉窯系青磁である。107は壊III-5-a類で、見込には花文、外底部には墨書きが記される。108は壊IV類で、見込は4分割され、「金玉」という文字が見られる。109・110は中国陶器である。109は天目茶碗の底部片で、胎土は粘性を帶びた灰色を呈し、黒褐色釉が厚く溜まる。110は無釉陶器で、体部には強い回転ナデが残る。胎土は精良で、

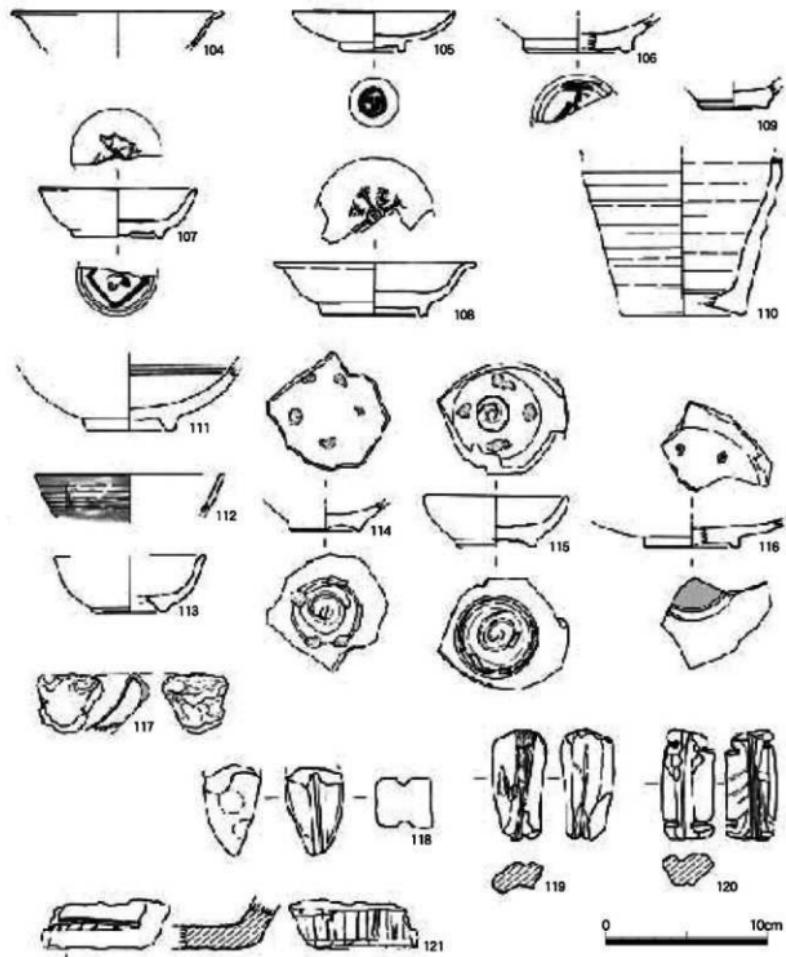


Fig. 20 SE301出土遺物実測図② (1/3)

赤橙色から灰色を呈する。111～115は朝鮮時代の陶磁器である。111・112は粉青沙器の碗で、111は体部内面に3条の白土による象嵌が施される。また、疊付から外底部の釉は掻き取っている。112は体部外面に刷毛で白化粧土を施す。113は軟質白磁で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。胎土は粗く、脆いやや黄みを帯びた白色を呈する。見込には胎土目が残る。114・115は灰青陶器の皿である。114は見込みと疊付に5か所の砂目がある。115は見込みに4か所の砂目があり、内面は二次加熱を受けている。116はベトナム産の白磁である。高台脇まで波線がかった

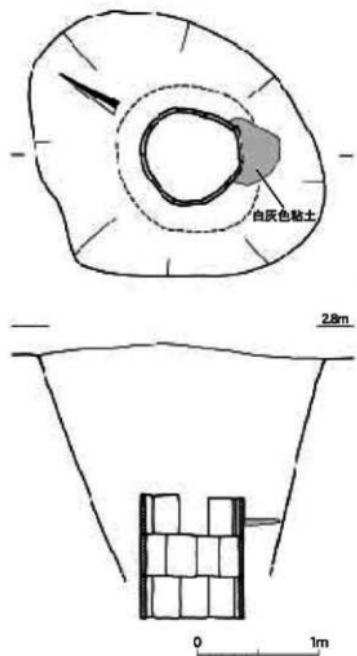


Fig.21 SE302実測図 (1/40)



Ph.28 SE302 (北から)

土師質土器の壺の口縁部片である。口縁部は上方に摘み上げ、丸くおさめている。口縁部内面下には1条の沈線が巡る。胎土は砂粒を多く含み、白灰色を呈する。外面には煤の付着が見られる。127は土師質土器の擂鉢である。6条一単位のすり目が入る。外面はナテと指押さえで調整する。128は肥前系の赤・黄・青の三色を用いた五彩の皿である。口縁部付近には四方棒文を巡らせ、その下には花文を描く。赤で輪郭線を描き、花と圓線は赤、葉は黄、口縁部内外面の圓線上部を青で塗っている。

透明釉がかかり、見込みには三角形の目跡が残る。高台内には鉄錆釉がわずかに残る。117は埴燒片である。銅津および溶解した銅が内面に付着し、綠青をふいている。「EDX分析」からは黒光りする部分では「鉄が強く現れ、綠青部分では銅、船の他ヒ素を検出」、「WDX分析」からは「内面は銅が強く、他に船、亜鉛、ヒ素、錫が見られる」。118は土盤で、上端部を欠損する。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一条巡る。重さは現存で68.58gを量る。119・120は石鍤である。滑石製で、石鍤の軽用品である。119は長めの抉りを入れて紐かけ用の溝を一本配している。長さ6.8cm、幅3.3cm、厚さ2.0cm、重さ54.82gである。120は紐用の溝を二面に縱方向に一条巡らし、さらに長軸方向の両端に水平方向に巡る溝を片面に施す。長さ6.7cm、幅3.2cm、厚さ2.0cm、重さ59.77gである。121は滑石製の鍋である。底部片で、のみの痕跡が多く残る。119・120のような石鍤はこの部分を利用して作られたと思われる。重さは103.93gを量る。井筒からは12世紀代の白磁小片が2点出土するが、切り合いから時期を示すとは考えられない。他に銅錢が5枚出土する。時期は16世紀代と考えられる。

SE302 (Fig.21 Ph.28) 第2面C区で検出した井戸である。掘方は約2.6~2.2mのややいびつな円形を呈する。井側は瓦組で、直径0.75mの1段10枚で構成される。使用された井戸瓦は長さ32~33cm、幅24cm、厚さ3.5cmを測る。井戸瓦の最下面は標高約0.4mである。標高1.2m付近の南側で厚さ3cm程の白灰色粘土を検出した。瓦を充填した粘土と思われる。

出土遺物 (Fig.22 Ph.29) 122~125は回転糸切り底の土師器である。122~124は小皿で、口径6.8~10.2cm、器高1.5~1.9cmを測る。123は口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用されたと思われる。

125は回転糸切り底の平高台の底部片である。126は

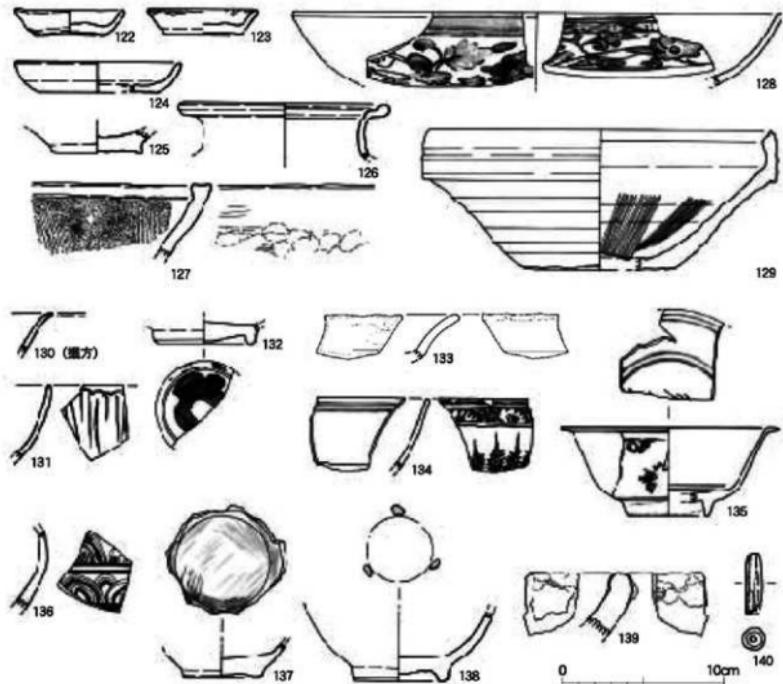
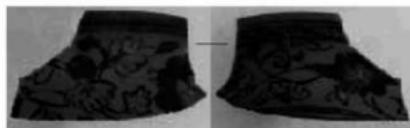


Fig.22 SE302出土遺物実測図 (1/3)



Ph.29 SE302出土遺物

黄の部分には釉が溜まる。胎土は黒色粒を少量含み、灰色を呈する。129は備前焼の揃鉢である。近世1期のもので、すり目が11条施され、見込み内にも一部のびている。色調はにぶい暗褐色を呈する。底部外面をわずかに削って高台状に作り出す。130は

明代の端反白磁碗の口縁部片である。131～133は龍泉窯系青磁である。131は部外面に細連弁文を描く碗である。132は底部片で、内面は二次加熱を受けている。外底面と疊付には、墨が残る。133は稜花皿である。腰部に稜をもち、口縁部は外反する。内面には花卉唐草文を描く。134・135は明代の染付である。134は碗C群、135は碗B群である。136～138は高麗時代から朝鮮時代のものである。136は象嵌技法が施された梅瓶である。白土と黒土で刺先連弁文と雨天文がなされる。137は粉青沙器の碗の底部片である。見込みに刷毛で白化粧土を施す。二次加熱を受ける。138は軟質白磁の碗の底部片である。胎土は粗く、黒いや黄みを帯びた白色を呈する。釉はやや青みを帯び、厚くかかる。見込には胎土目が3ヶ所残る。139は取瓶片である。鋼滓および溶解した鋼が内面から口縁部にかけて付着し、赤褐色のガラス化した付着物もみられる。この赤褐色部分は「EDX分析」で

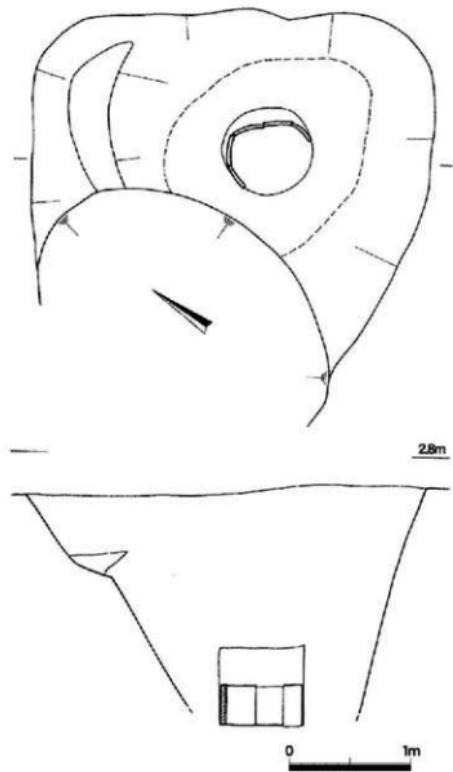
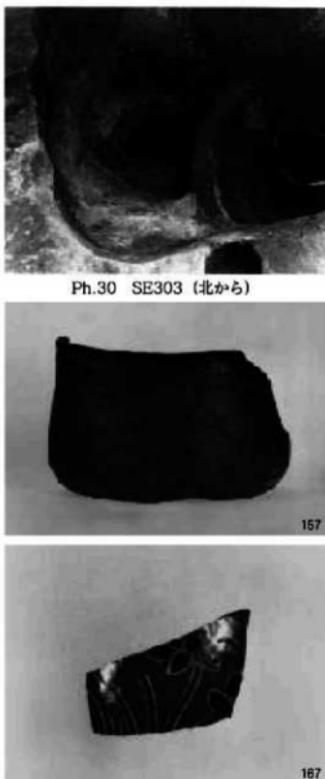


Fig.23 SE303実測図 (1/40)

は銅が占めていた。「WDX分析」からは「口縁内面は鉛が最も強く、次いで銅、他にビスマス、銀が特徴的に表れた」。140は土壁で、端部を欠損する。環状で細身の円筒状を呈する。長さ3.6cm、重量は2.4gである。井側から遺物は出土していない。切り合いや出土遺物から17世紀後半と考えられる。他に銅鏡が3枚出土する。

SE303 (Fig.23 Ph.30) 第3面C区で検出した、SE302に切られた井戸である。掘方は約3.3mのややいびつな兩丸方形を呈し、北西には狭い段がつく。井側は瓦組で、直径0.55~0.65mの1段9枚で構成される。使用された井戸瓦は長さ33cm、幅24cm、厚さ3cmを測る。井戸瓦の最下面は標高約0.58mである。瓦の間には白色粘土が充填され、標高1.25m付近では井側を取り巻くように幅10~20cmの黒色砂質土を検出した。

出土遺物 (Fig.24・25 Ph.31) 141~150は土師器である。147はヘラ切り底、それ以外は回転糸切り底をもつ。141~148は小皿で、口径6.8~9.2cm、器高1.4~1.6cmを測る。149・150は壺で、口径10.4cm、9.8cm、器高1.4cm、2.4cmを測る。141・142は煤が付着している。151~



Ph.31 SE303出土遺物

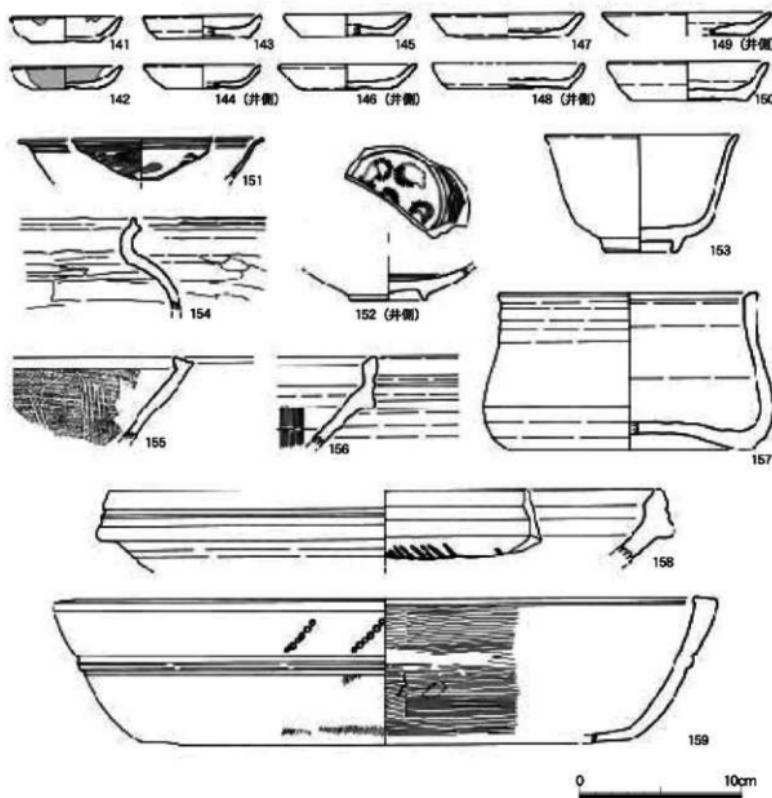


Fig.24 SE303出土遺物実測図① (1/3)

153は肥前系陶磁器である。151は赤・緑の二色が残っている五影の碗の口縁部片である。内外面ともに2条の圓線の下に草花文を描いている。葉は緑、それ以外は赤を使用し、緑には釉が溜まる。胎土は砂粒を少量含み、白色を呈する。152は褐釉印花文皿で、見込には菊花文が印花され、体部内面には柳目を残す。153は白磁碗で、直線的な体部に外反する口縁部がつく。高台外側は斜方向に内側に削られ、疊付には砂が融着する。胎土は微砂粒を含んだ精良な胎土で、白色を呈する。154は土師質土器の壺の口縁部片である。155は瓦質土器の擂鉢である。8条以上のすり目が入る。外面はナテと押さえで調整する。156～158は備前焼である。156は中世6期の擂鉢で、8条以上のすり目が施される。口縁部外面にはぶい褐色、体部内面と外面は灰色を呈する。158は近世2期の擂鉢で、8条以上のすり目が施される。156と較べ口縁帶が狭くなる。色調は明褐色を呈する。157は健水である。底部は上げ底で、体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。色調は明褐色を呈し、口縁部付近は光沢をもつ。159は陶質土器の火舟である。体部中位に1条の突帯が巡り、上半に

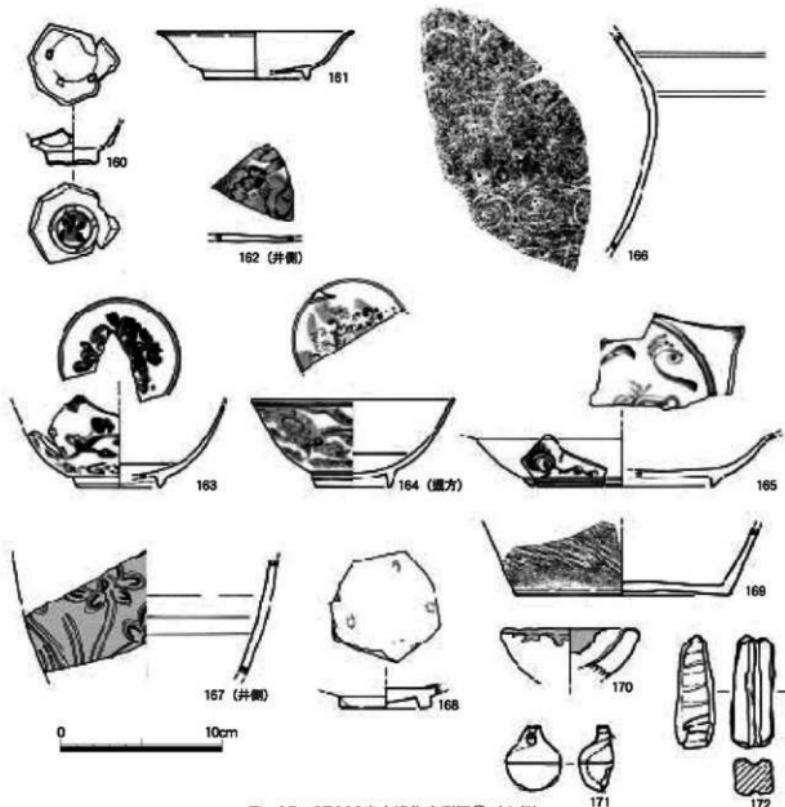


Fig.25 SE303出土遺物実測図② (1/3)

は斜方向に刺突文が施される。外面下半は縱方向の刷毛目ののち、横方向のナデ、内面は横方向の刷毛目で調整する。160・161は明代の白磁である。160は多角壺の底部片で、高台には4ヶ所弧状に抉りを入れる。見込にも重ね焼きの目跡が残る。高台外底面には墨書きが記される。161は端反の白磁皿で、疊付付近以外は施釉される。162～165は明代の染付である。162は底部片で、胎土は橙色を呈する。163は碗C群V類、164は碗C群I類、165は皿B群である。166是中国陶器の壺の胴部片である。胴部上位には2条の沈線を巡らし、内面にはタタキが残る。砂粒を多く含んだ暗褐色の胎土に緑褐釉がまだらにかかる。167～169は高麗時代から朝鮮時代の陶磁器である。167は白土と黒土で草花を象嵌した青磁の瓶の胴部片である。168は軟質白磁で、高台脇にまで釉薬がかかる。見込には4ヶ所の砂目がある。169は陶器の底部片である。灰色の粘質を帯びた胎土に暗褐色の釉を施す。外面にはタタキの痕跡がある。170は埴堀片である。錫滓および溶解した錫が内面から口縁部にかけて付着し、赤褐色のガラス化した付着物もみられる。この赤褐色部分は「EDX分析」では「錫、鉛を中心とした亜鉛、ヒ素、錫が微弱ながら見られ、緑青部分では錫、鉛を中心とした錫、銀、ヒ素が見られる」。

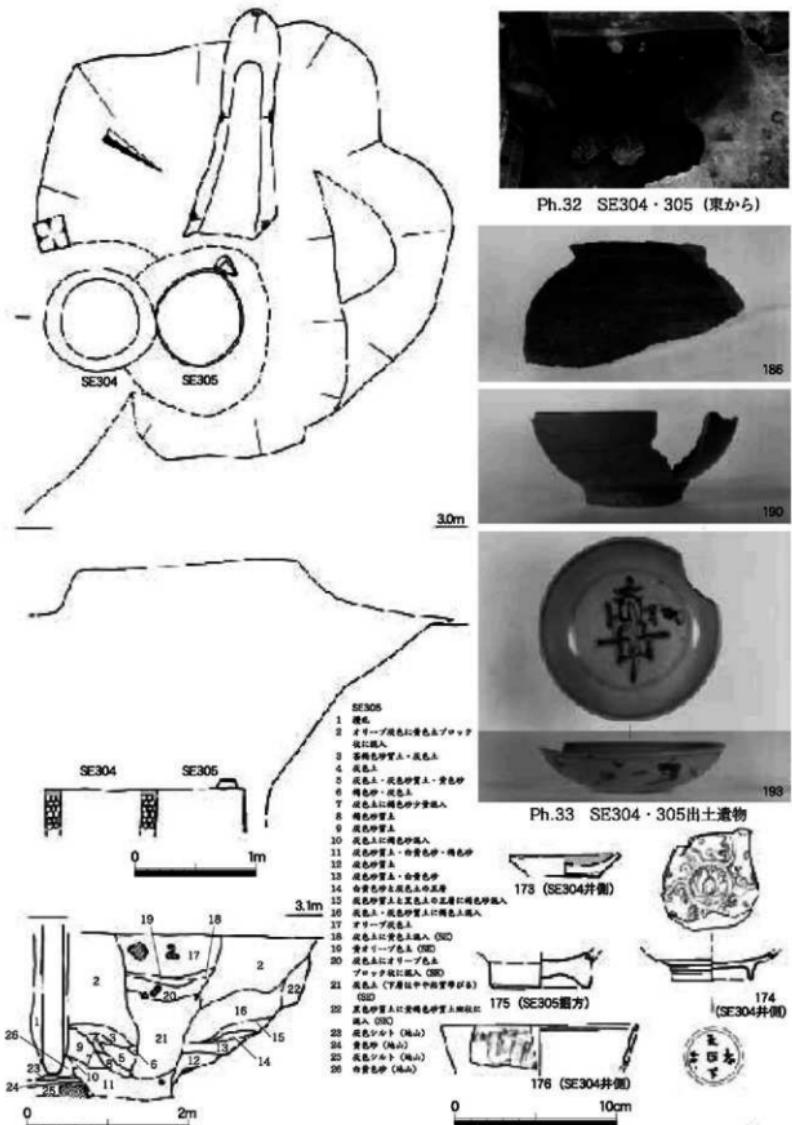


Fig.26 SE304・305実測図 (1/40) 土層図 (1/60) および出土遺物実測図① (1/3)

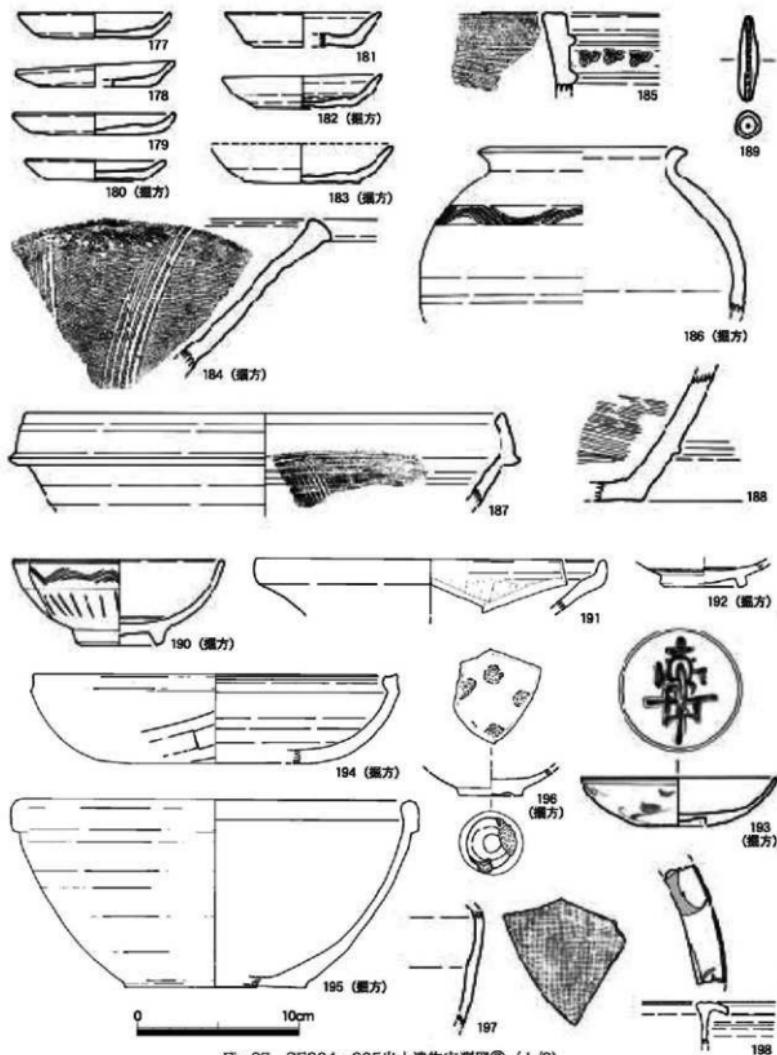
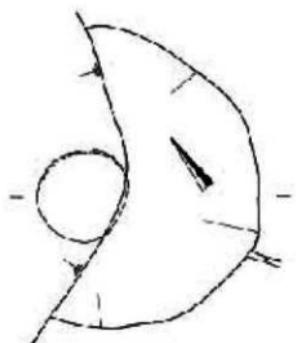


Fig. 27 SE304 · 305出土遺物実測図② (1/3)

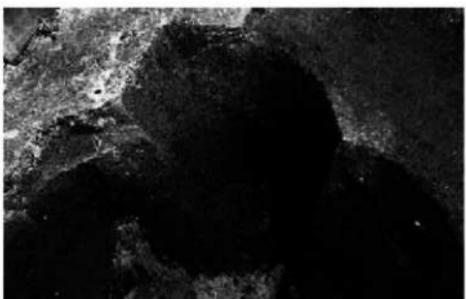
内面の「WDX分析」では「鉛が最も強く、他に銅、錫が明瞭に現れ、更に亜鉛、ヒ素、銀も存在する」。171は土鈴である。半分の遺存で体部中位には1条の沈線が巡る。172は滑石製の紐である。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一条巡る。長さ6cm、幅1.9cm、厚さ1.4cm。



重さ68.42gである。出土遺物から17世紀後半と考えられる。

SE304・SE305 (Fig.26 Ph.33) 第3面E区で検出した井戸で、SE304の南東側は一部南側中央部分で先行して掘削を行った。遺構検出時には2基あるとは確認できず、井戸付近で確認した。そのため上層の遺物は混同している。SE304がSE305を切る。SE304の井側は瓦組で、直径0.67mの1段11枚で構成される。使用された井戸瓦は長さ30.5cm、幅20cm、厚さ3cmを測る。井戸瓦の最下面は標高約0.6mである。標高0.8m付近で井戸瓦の周囲には白色粘土が充填され、その下には玉砂利が入れられる。SE305は直径0.75mの井側の痕跡が残る。木質はわずかに見られる。

出土遺物 (Fig.26・27 Ph.33) 173・174・176はSE304の井側内から出土した。173は回転糸切り底の灯明皿である。174は明代の染付碗E群である。176は肥前系



Ph.34 SE316 (北から)

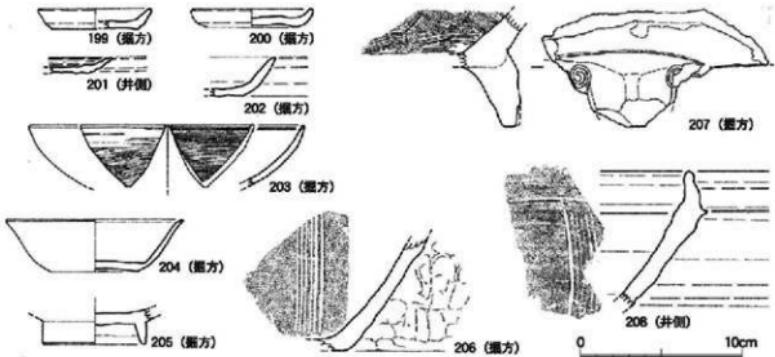


Fig.28 SE316実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

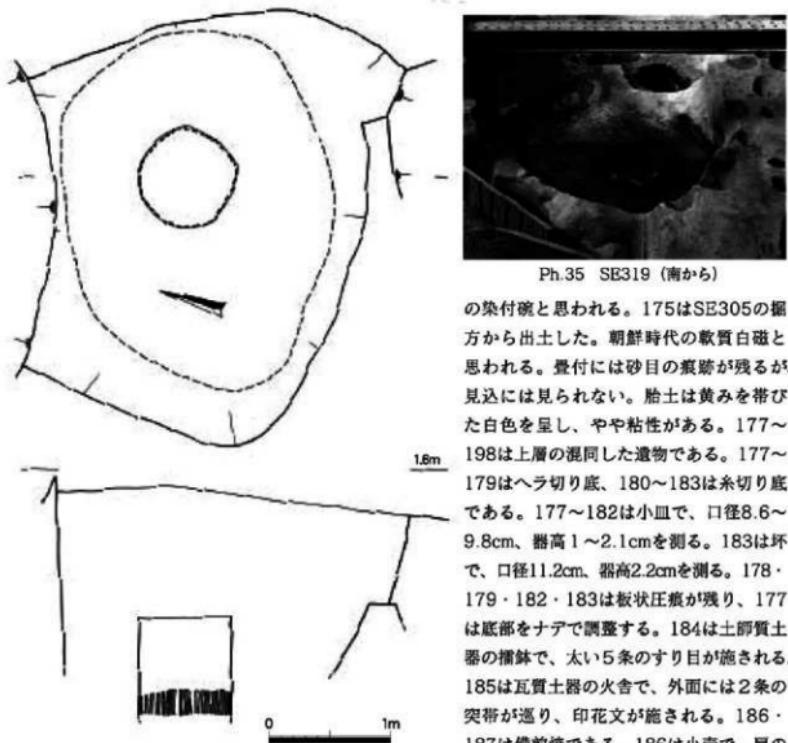


Fig.29 SE319実測図 (1/40)

擂鉢である。色調は明褐色、灰褐色を呈する。188は陶質土器の火舎の脚部片である。下位に突帯を巡らせ、外面はヘラミガキ、内面は刷毛で調整する。189は環状で細身の円筒状を呈する土鍾である。長さ5.2cm、重量は6.23gである。190は明代の白磁である。外面上位に沈線が巡り、下に縱方向、上に波状文がヘラにより刻まれる。191は明代の龍泉窯系青磁の舞紋盤である。192・193は明代の染付である。192は碗の底部片で、方形を呈した高台で、疊付から高台外底面は基本的に露胎である。193は皿C群Ⅲ類である。194・195は輸入陶器である。194は無釉の盤で、口縁部外面は褐色、他は明褐色を呈する。195は無釉の鉢で、体部内面はオリーブ灰色、口縁部から外面は明褐色を呈する。196～198は朝鮮時代の陶器である。196は灰青陶器で見込には5ヶ所、疊付には2ヶ所砂目が付く。197は粉青沙器の瓶の胴部片である。198は鉢で、口縁上端には貝目が付く。他に銅錢が1枚出土する。以上の出土遺物および切り合いからSE304は17世紀後半、SE305は16世紀後半と考えられる。

SE316 (Fig.28 Ph.34) 第3画B区で検出した井戸で、SE301に切られる。掘方は約2.4mの円形を呈する。直径70cmの井側には木質が縦方向に遺存しており、井側には桶が使用されたと考え



Ph.35 SE319 (南から)

の染付碗と思われる。175はSE305の掘方から出土した。朝鮮時代の軟質白磁と思われる。疊付には砂目の痕跡が残るが、見込には見られない。胎土は黄みを帯びた白色を呈し、やや粘性がある。177～198は上層の混同した遺物である。177～179はヘラ切り底、180～183は糸切り底である。177～182は小皿で、口径8.6～9.8cm、器高1～2.1cmを測る。183は壊で、口径11.2cm、器高2.2cmを測る。178・179・182・183は板状圧痕が残り、177は底部をナメで調整する。184は土師質土器の擂鉢で、太い5条のすり目が施される。185は瓦質土器の火舎で、外面には2条の突帯が巡り、印花文が施される。186・187は備前焼である。186は小壺で、肩の部分には波状文が巡る。187は中世5期の

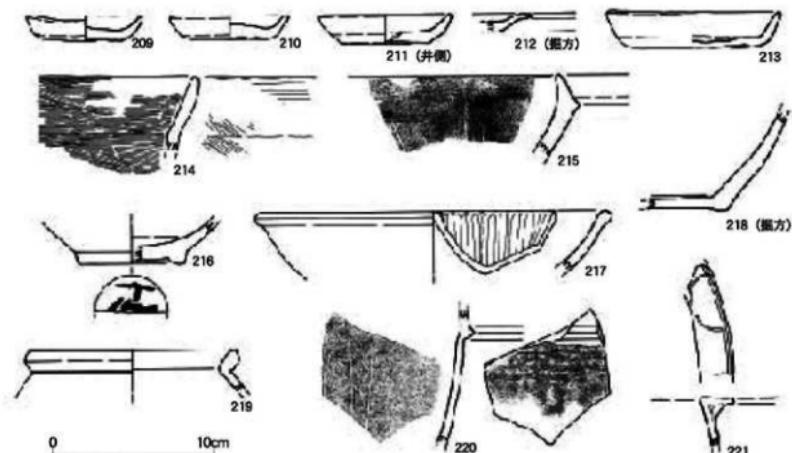


Fig.30 SE319出土遺物実測図 (1/3)

られる。木質は標高0.8~0.4m付近に残る。

出土遺物 (Fig.28) 199~202は土師器で、199~201は小皿、202は壊である。199・201はヘラ切り底で、板状圧痕が残り、200・202は回転糸切り底である。203は楠葉型瓦器楕の口縁部片である。204・205は白磁で、204は皿IX類、205は碗の底部片で、高台内面中位から疊付部分は施釉される。206は土師質土器の擂鉢である。6条のすり目があり、外面は指押さえ、内面は刷毛で調整される。207は瓦質土器火舎の底部片である。208は備前焼の中世5期の擂鉢で、6条のすり目が施される。内面は灰褐色、外面はにぶい褐色を呈する。井側出土の遺物から15世紀後半と考えられる。

SE319 (Fig.29 Ph.35) 第3面C区で検出し、SE303に切られる。掘方は東西方向が約3.5mとやや長い亞円形を呈する。井側はやや東寄りに取り付けられ、標高1.4m付近から確認できた。直径80cmの井側には標高0.8m付近から木質が縦方向に遺存しており、ほぼ全周する。桶が使用されたと考えられる。

出土遺物 (Fig.30) 209~213は212を除き、回転糸切り底の土師器である。209~211は小皿で、口径7.1~8.0cm、器高1.5~1.8cmを測る。212は京都系土師器皿の模倣品である。213は壊で、口径10.6cm、器高2.3cmを測る。214は土師質土器の鉢で、外面には煤が多量に付着する。215は備前焼の擂鉢である。中世5期のもので、口縁部外面は褐色、内面と体部外面はにぶい灰褐色を呈する。216は白磁碗IV類の底部片で、外底部には墨書きがある。217は明代の龍泉窯の青磁盤である。口縁部はわずかに玉縁状を呈し、内面には線刻の連弁文を施す。218・219は中国陶器である。218は磁窯系の黄釉盤の底部片である。内面は灰色を帯びた黄色を呈し、露胎となる外面はにぶい赤褐色を呈する。219は玉縁状の口縁をもつ小盤である。二次加熱を受けたようで、釉は荒れ、白濁色を呈している。220・221は朝鮮時代の施釉陶器である。220は胴部片で、外面には格子目状のタタキがあり、内面はナデで調整したあと、縦方向に細い沈線が入る。胎土は小豆色と灰色の層状を呈し、釉は茶褐色を呈する。221は鉢で、口縁上端には貝目が付く。胎土は小豆色を呈し、にぶい褐色を呈する。他に銅鏡が1枚出土する。井側からは12世紀代の遺物が出土するが、遺構の切り合いや上

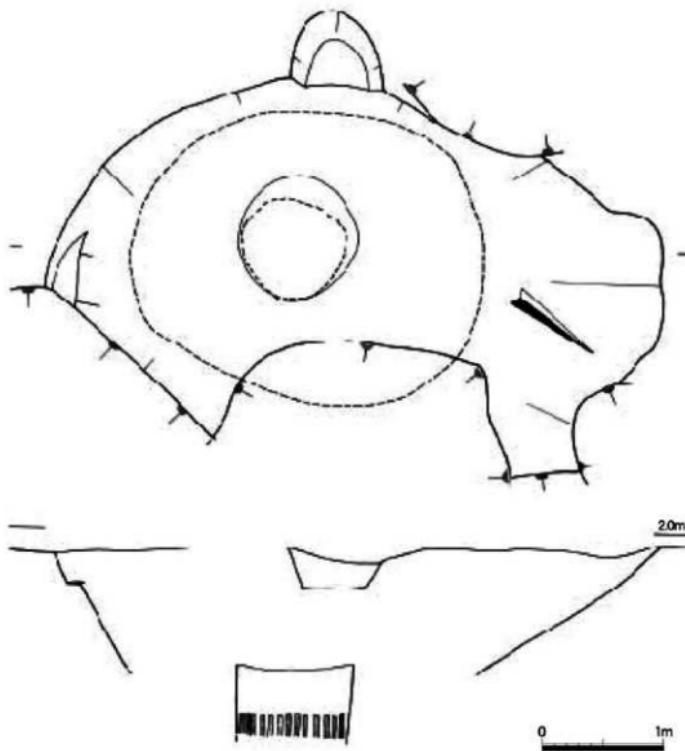
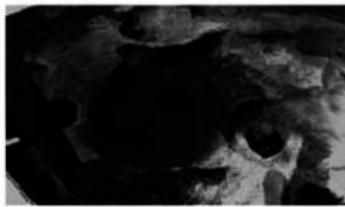


Fig.31 SE350実測図 (1/40)



Ph.36 SE350 (東から)

層の遺物から、井戸の時期は16世紀前後と考えられる。
SE350 (Fig.31 Ph.36) 第3面CE区で検出した井戸で、SE302・SE319に切られる。掘方は北西から南東にかけて約5mを測る。標高0.9m付近で、直径1mの井側が確認でき、標高0.5m付近から木質が縦方向に遺存する。井側には桶が使用されたと考えられる。桶は井側の東側寄りに取り付けられ、直径80~85cmを測る。木質はほぼ全周する。

出土遺物 (Fig.32) 222・223は回転糸切り底の土師器杯である。222は口径12.8cm、器高2.5cmを測る。224は土質質土器の壺鉢で、5本以上の太いすり目が入る。内外面ともに刷毛で調整される。225は瓦質土器の火舎の脚部である。内面には刷毛目が残る。226は土師質土器の片口鉢で、内面と口縁部外面は刷毛目、体部外面は指おさえ、ナデで調整される。227は土師質土器の壺の

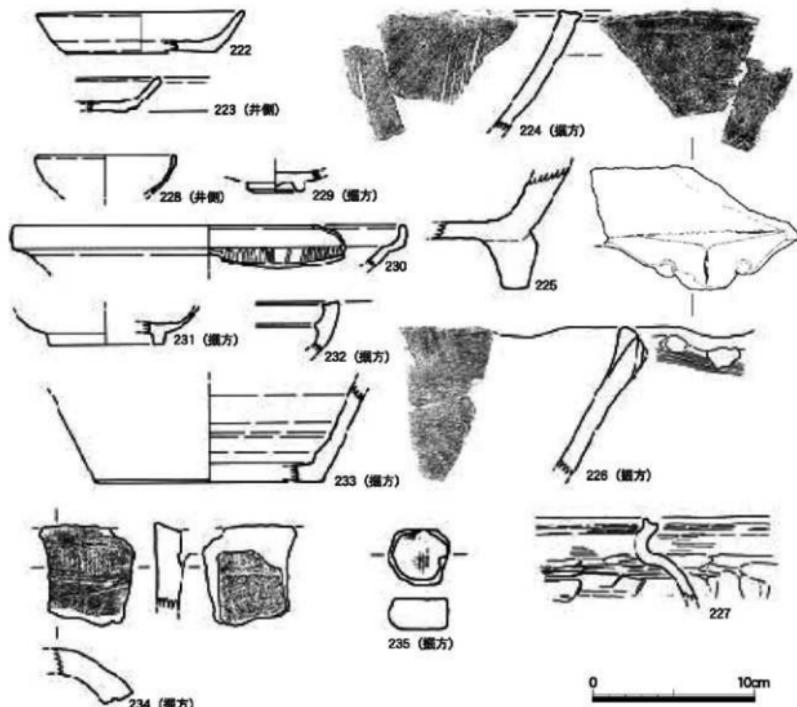


Fig.32 SE350出土遺物実測図 (1/3)

口縁部片である。口縁端部は凹状を呈する。228・229は明代の白磁である。228は小形壺で、口縁は内傾ぎみに立ち上がる。229は底部片で外面は露胎である。230・231は明代の龍泉窯系青磁である。230は鈎縁盤の口縁部片で、内面には線刻の連弁文を施す。231は碗の底部片で、見込の釉薬は削られ、疊付から外底部は露胎である。232・233は中国陶器である。232は捏鉢I-I・b類である。233は底部片で、明褐色の釉薬が施釉される。234は丸瓦片で、凸面には繩目タタキを施し、粗くナデ消している。凹面には布目が認められる。235は瓦玉で、わずかに布目が残る。他に銅鏡が1枚出土する。井側からは12世紀代の遺物が出土するが、遺構の切り合い等から時期は15世紀後半と考えられる。

SE357 (Fig.33 Ph.37・38) 第3面BD区で検出した井戸で、SE301・SE316に切られる。掘方は $3.5 \times 4.2 + \alpha$ mの隅丸方形を呈する。標高1m付近で、直径75cmの井側が確認でき、木質が縦方向に遺存していた。井側には桶が使用されたと考えられる。

出土遺物 (Fig.34) 236～239は回転糸切り底の土師器である。236～238は小皿で、口径8.0～10.0cm、器高1.2～1.4cmを測る。239は壺で底部には板状圧痕が残る。口径12.4cm、器高2.6cmを測る。240・241は東播系須恵器である。240は鉢で、口縁部は黒変している。241は回転

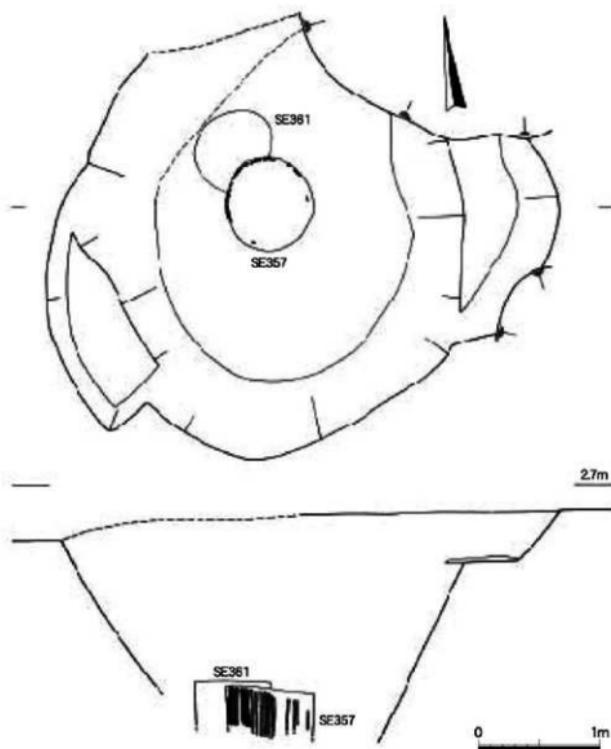
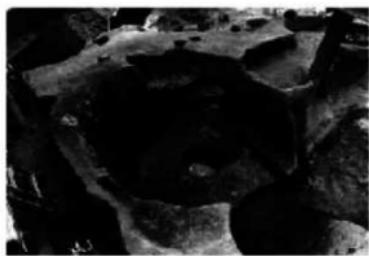
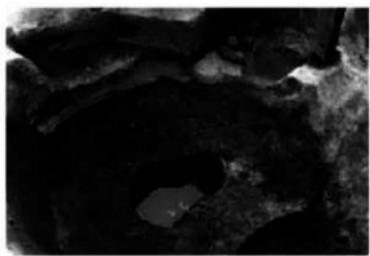


Fig.33 SE357・361実測図 (1/40)



Ph.37 SE357 (南から)



Ph.38 SE357・361 (東から)

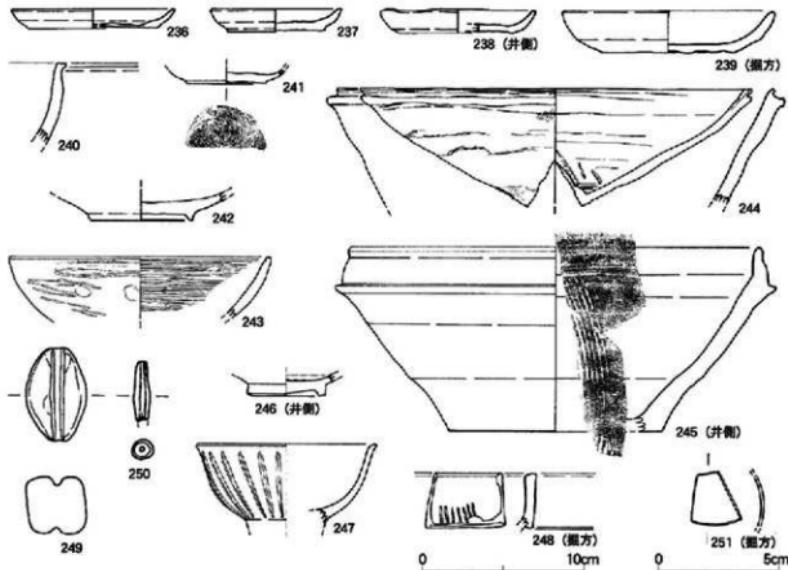


Fig.34 SE357出土遺物実測図 (1/3・1/2)

糸切りの底部片である。242・243は瓦器楕で、242の外底部は糸切りで、低い台形状の高台がつく。内面は研磨調整される。243は楠葉型の口縁部片である。244は土師質土器の鉢で、口縁端部は凹状に大きく窪む。245は備前焼の中世5期の播鉢である。内面には7本のすり目がある。色調は内面はぶい灰褐色、外面は褐色を呈する。246は白磁碗皿類、247は明代の龍泉窯系青磁の小碗で、外面にはやや鏽のある迷弁が入る。248は中国陶器の鉢II-1-a類である。口縁部内外面に茶褐色の釉、口縁上端部は暗褐色の釉を施す。内面には細いすり目が入る。249・250は土師である。249は断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一束巡る。重さは75.12gを量る。250は環状で細身のエンタシス状を呈し、端部を欠損する。重量は現存で3.36gである。251はガラス片である。厚さは1.2mmで、表面の色調は緑青色、やや荒れた部分は褐色を呈する。破断面はやや緑がかかった青色を呈する。「EDX分析」ではガラスの主成分珪素の他、鉛の強いピークが見られる。表面分析ではカルシウムが突出し、破断面の新鮮な部分ではカルシウムは下がり、カリウムが強くなる。このことからカリウム鉛ガラスの表面が著しく風化したものと考えられる。井側からは15世紀前半の遺物が出土しており、この時期と考えられる。

SE361 (Fig.33 Ph.38) 第3面B区で検出した井戸で、SE357に切られ、井側のみを確認した。標高1.05m付近で、直径66cmを測る。木質等は見られなかった。

出土遺物 (Fig.35) 252はヘラ切り底で、板状圧痕が残る土師器の小皿である。口径10.8cm、標高1.3cmを測る。253は龍泉窯系青磁皿I類である。254は土師器の楕で、器壁は波打っており、

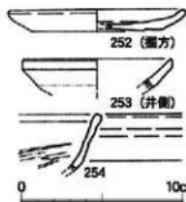


Fig.35 SE361
出土遺物実測図 (1/3)

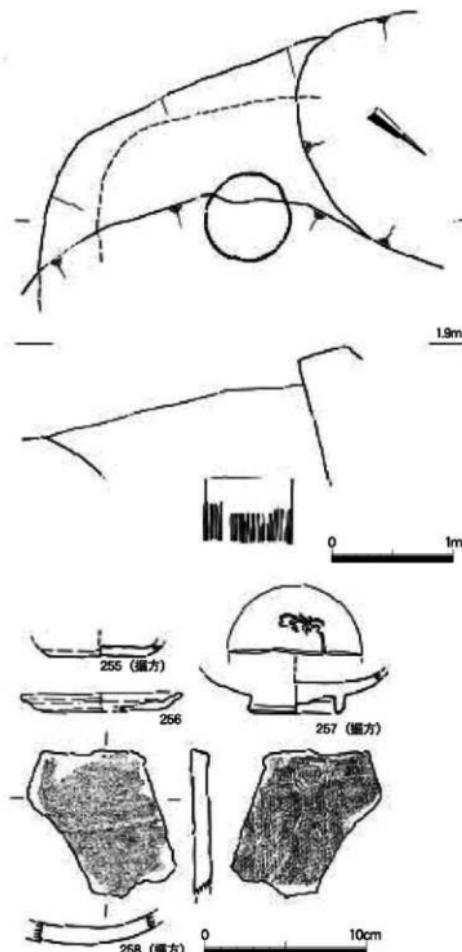


Fig.36 SE367実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

区で検出した井戸で、SE205・SE316に切られる。掘方は他の井戸から大きく削平されており、南東側がわずかに残る。標高0.9m付近で、直径0.73mの井側が確認でき、標高0.7m付近から木質が縦方向に遺存する。井側には桶が使用されたと考えられる。桶は直径68cmを測る。木質は部分的にしか遺存しない。

出土遺物 (Fig.37) 259~262は土師器である。259・260は回転糸切り底の小皿で、口径8.0cm、7.8cm、器高1.5cm、1.4cmを測る。261は回転糸切り底の壺で口径11.6cm、器高2.5cmを測る。

粗い研磨調整を行う。出土遺物から12世紀中頃から後半と考えられる。

SE367 (Fig.36 Ph.39) 第3面E区で検出した井戸で、SE07・SE350・SE399に切られる。掘方は他の井戸から大きく削平されており、南側部分がわずかに残る。標高0.8m付近で、直径0.7mの井側が確認でき、標高0.6m付近から木質が縦方向に遺存しており、井側には桶が使用されたと考えられる。桶は直径68cmを測る。木質はほぼ全周する。

出土遺物 (Fig.36) 255・256は土師器の小皿で、底部は糸切り後、ナデで調整する。256は口径10cm、器高1.1cmを測る。257は龍泉窯系青磁碗IV類である。見込には花文が描かれる。258は平瓦で、凸面には織目タタキを施し、部分的に粗くナデ消している。凹面には布目が認められる。他に網鉄が1枚出土する。井側からは白磁碗IV類の小片が出土するが、時期は14世紀前半と考えられる。

SE376 (Fig.37 Ph.40) 第3面K

方向に遺存する。井側には桶が使用されたと考えられる。桶は直径68cmを測る。木質は部分的にしか遺存しない。

259・261の底部には板状圧痕が残る。262は丸底坏で、口径14.4cmを測る。263は反転陶器の碗の口縁部片である。264は土師質土器の甕で、体部外面はわずかに黒変する。265・266は龍泉窯系青磁である。265は元代の青磁碗で、施釉後、外底面の釉は搔き取る。内外面に鎌連弁が施され、貫入が多く見られる。266は明代の坏皿類で外面には鎌連弁が施される。267は中国陶器の底部片である。胎土は白色砂粒、赤褐色粒を多く含み、色調は褐色を呈する。268は高麗陶器の肩部片である。胎土は小豆色を呈し、内外面の色調は灰色を呈する。269は土鍤で、一部欠損する。断面は「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一条巡る。他の面には竹管状のものを一ヶ所刺突している。重さは現存で57.85gを量る。時期は14世紀

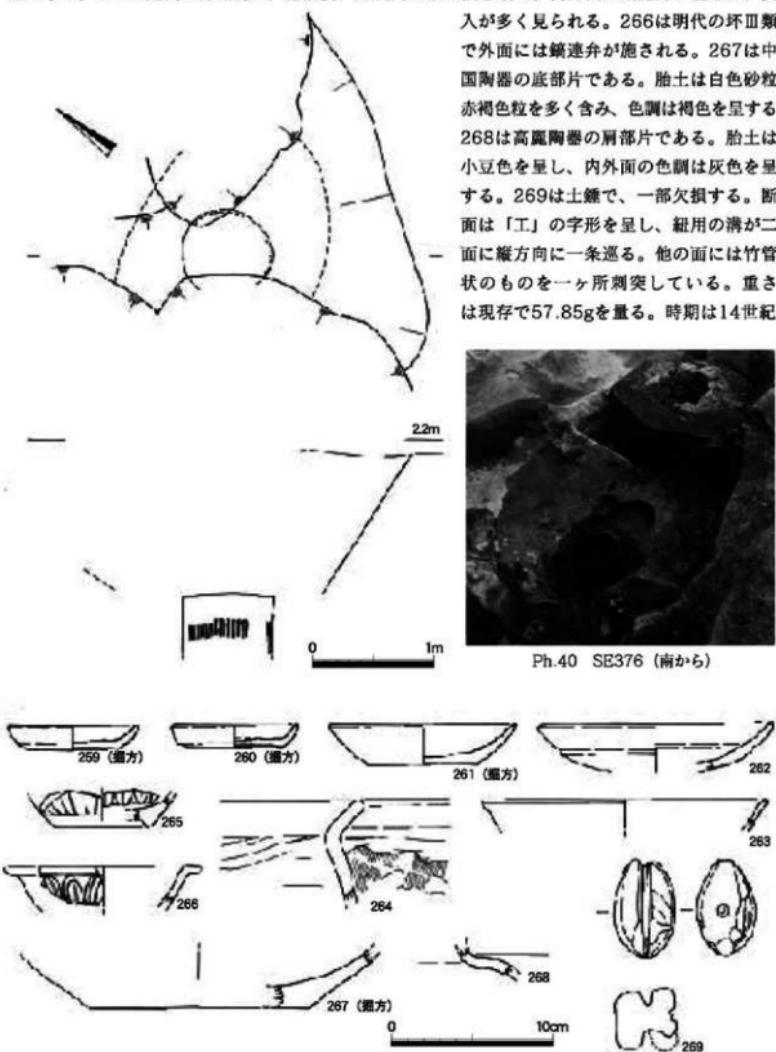


Fig.37 SE376実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

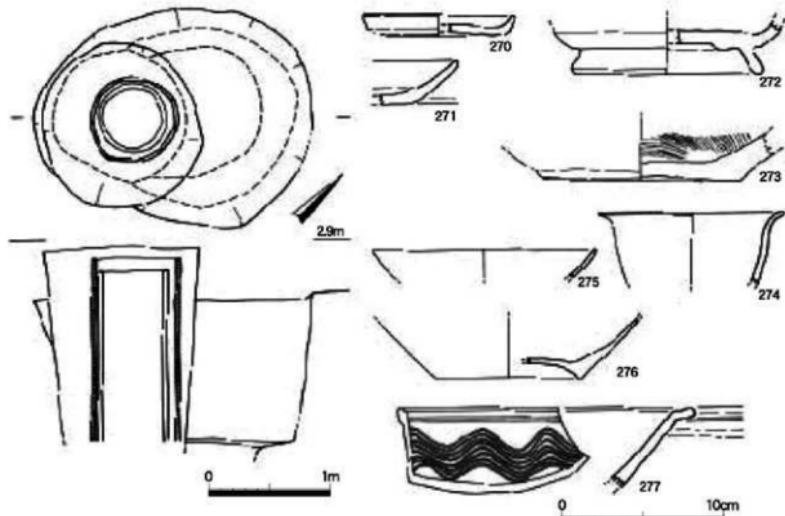


Fig.38 SE380実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

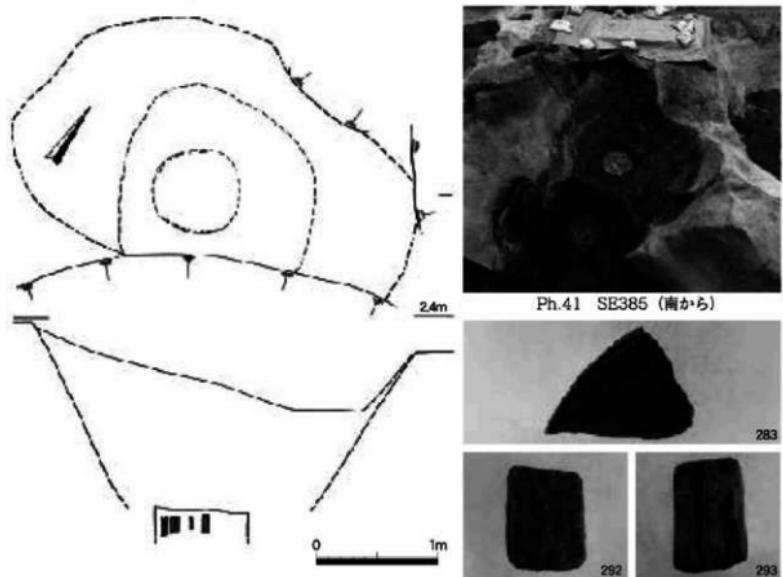


Fig.39 SE385実測図 (1/40)

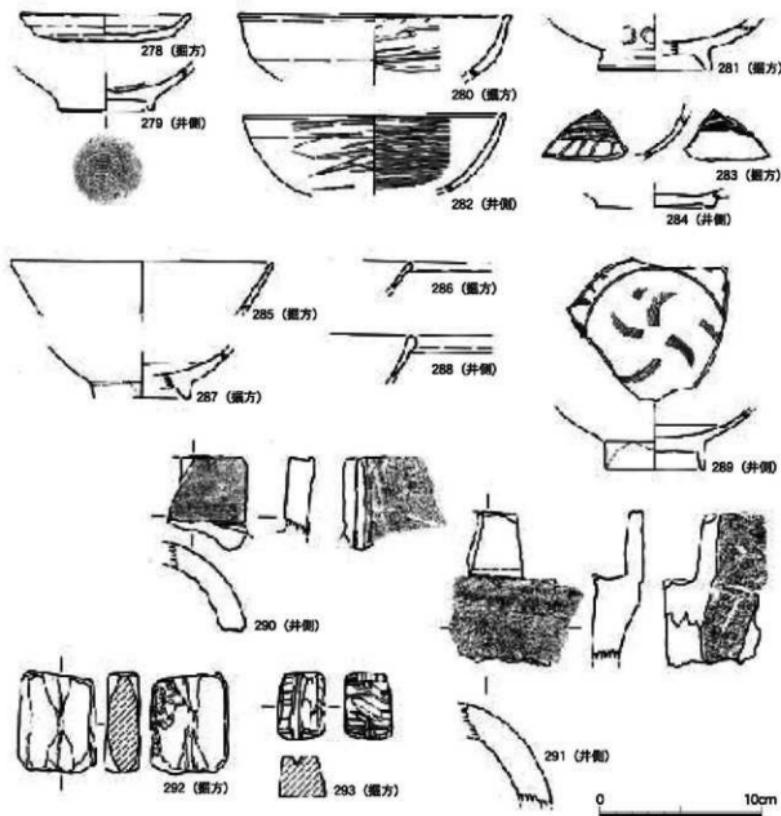
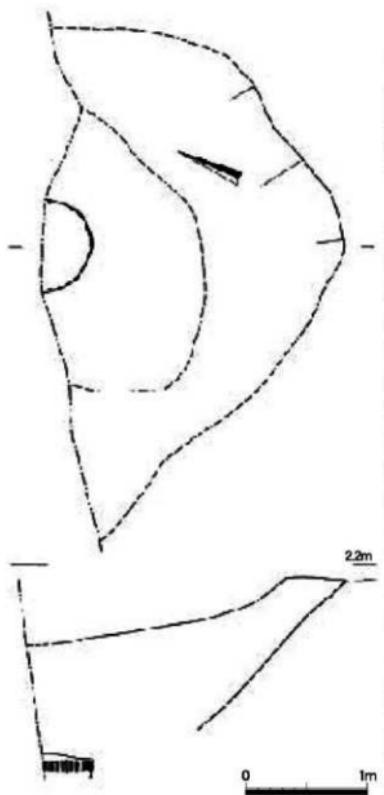


Fig.40 SE385出土遺物実測図 (1/3)

前半と考えられる。

SE380 (Fig.38) 第3面H区で検出した井戸で、現代の井戸SE252、SE241に切られる。掘方は直径約1.8mの円形を呈し、標高1.25m付近で段をもつ。井戸にコンクリートを使用したSE252を掘削しなかったため、SE380は標高1m以下を掘削できなかった。

出土遺物 (Fig.38) 270～272は土師器である。270は回転糸切り底の小皿で、板状圧痕が認められ、口径9.2cm、器高1.3cmを測る。271は壺で底部はヘラ切り、板状圧痕が認められる。272は土師質土器の底部片で、外底部は段状を呈する。高台は高く、外に開く。内面は回転ナデで調整する。273は瓦質土器の鉢である。内面と外底部は刷毛目、外面は指押さえ、ナデで調整する。274～277は肥前陶磁器である。274は白磁碗で、口縁は強く外反する。275は皿の口縁部片で、内面から外面中位まで緑色の釉、外面下位は透明釉がかかる。276は水注の底部片で、無釉である。外面下位には焦げが付着する。色調は橙色で、茶褐色の釉がかかる。出土遺物から17世紀代と考えられる。



SE385 (Fig.39 Ph.41) 第3面E区に位置し、SE304・SE305に切られる。掘方は南側を大きく削平されており、東西方向に約3.4mを測る。標高0.85m付近で、直径70cmの井側が確認できた。標高0.75m付近から木質か縦方向にわずかに遺存しており、井側には桶が使用されたと考えられる。

出土遺物 (Fig. 40 Ph. 42) 278～280は土器である。278はヘラ切り底の小皿で、板状圧痕を有する。279は椀の底部片で、内面はヘラ研磨、外面は回転ナデで調整し、外底面には糸切りが残る。胎土には赤褐色粒、金雲母を含む。外面は橙色、内面は白橙色の色調を呈する。280は椀の口縁部片で、端部は短く外反する。内面は横方向のヘラ研磨、外面は横ナデで調整する。281は黒色土器B類の椀である。282～284は瓦器椀である。282は楕葉型で、内面には密な研磨、外面は横方向・斜方向と鋭な研磨を行う。体部外面には指押さえ



Ph.43 SE394 (南から)

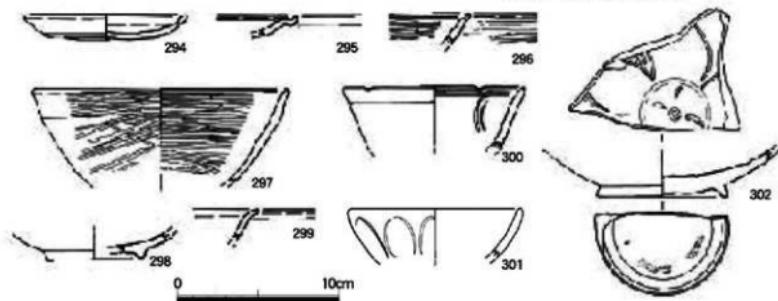


Fig.41 SE394実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

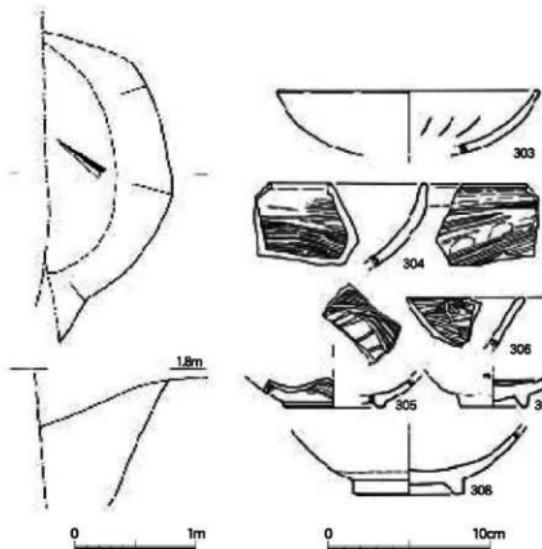
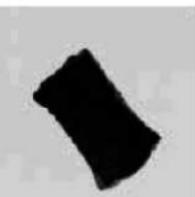


Fig.42 SE395実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph.44 SE395 (南から)



Ph.45 SE395出土遺物
305

分には刻まれていない。重さは現存で55.39gを量る。時期は12世紀中頃と考えられる。

SE394 (Fig.41 Ph.43) 第3面C区で検出した井戸で、北側は調査区外に延びる。掘方は東西方向が約4.2mを測る。標高0.65m付近で、直径75cmの井戸が確認でき、標高0.6m付近から木質が縦方向に遺存しており、井戸には桶が使用されたと考えられる。木質はほぼ全周する。

出土遺物 (Fig.41) 294～296は土師器である。294はヘラ切り底の小皿で、板状压痕を有する。口径9.8cm、器高1.5cmを測る。295は京都系土師器皿で、手捏ねによるもので橙色を呈する。296は椀の口縁部で、口縁内面の端部付近には1条の沈線を巡らす。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。297・298は瓦器椀である。297は楠葉型で、外面は下位付近にまで研磨調整を行う。298は畿内系の底部片で、磨きは不明瞭である。299は白磁碗V-2類である。300・301は龍泉窯系青磁で、300は小碗I-2類、301は小碗IV類である。302

が残る。283は和泉型で、外面に幅1mm以下の柔らかい磨きを施す。内面は見込み付近まで横方向の研磨、見込には暗文風の平行線が描かれる。284は底部片で、内面は不明瞭な研磨を施す。285～289は白磁である。285・286は碗II類、287は底部片で、見込には段が付く。壺付は狭く、高台外面は直に内面は斜めに削る。288は碗IV類、289はV類である。290・291は丸瓦で、凸面には繩目タタキを施し、部分的に粗くナデ消している。凹面には布目が認められる。292・293は滑石製の石錠である。292は紐用の溝が二面に縱方向に一条巡るものであるが、端部が深く、中央部はほとんど刻んでいない。重さは現存で120.91gを量る。293は二面の上端と下端に横方向の溝を入れ、それにクロスするように縦方向の溝を巡らす。ただし、縦方向の溝は一面は深く全面に施されるが、もう一面は上端と下端のみで中央部

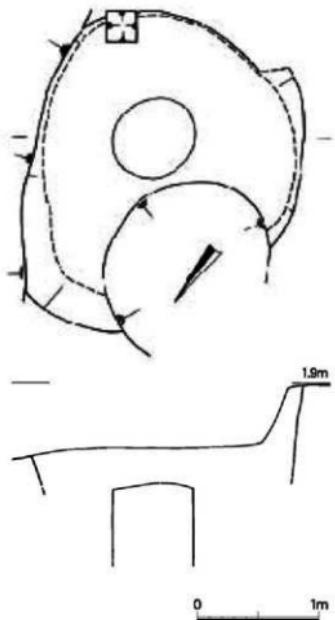


Fig. 43 SE396実測図(1/40)および
出土遺物実測図(1/3)

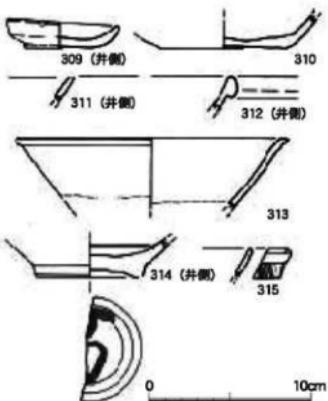
は越州窯系青磁碗で、内面には花文が描かれる。全面施釉され、外底面に胎目を有する。上層に連弁文の龍泉窯青磁碗が混入するが、井側から出土する土器等から井戸の時期は12世紀中頃と考えられる。他に銅錢が1点出土する。

SE395 (Fig. 42 Ph. 44) 第3面C区で検出した井戸で、北側は調査区外に延び、東側はSE394に切られる。井側は調査区内では確認できなかった。

出土遺物 (Fig. 42 Ph. 45) 303は土師器の丸底杯である。口径16cm、器高3.9cmを測る。内面にはコテあてが残る。304～306は黒色土器B類の碗である。304・305は楕葉型で、304は口縁内面の端部付近に1条の沈線を巡らせない。305は底部片で見込には暗文風の研磨が施され、低い方形の高台がつく。306は内面にのみ研磨調整を施す。307は同安窯系の青磁小碗I類である。308は白磁碗IV-2・c類である。出土遺物から11世紀後半から12世紀前半の井戸と考えられる。

SE396 (Fig. 43 Ph. 46) 第3面A区で検出した井戸で、SE301、SK108に切られる。掘方は南北方向が約2.7mとやや長い直角円形を呈する。標高1.05m付近で、直径70cmの井側を確認した。微量に木質を検出した。

出土遺物 (Fig. 43) 309・310は土師器である。309は回転糸切り底の小皿で、口縁部に1ヶ所瘤がつく。口径6.6cm、器高1.5～1.8cmを測る。310は回転糸切り底の碗である。311～314は白磁である。311は碗II類、312・314は碗IV類、313は碗V-1類である。314の底部には墨書きが残る。



Ph. 46 SE396(東から)

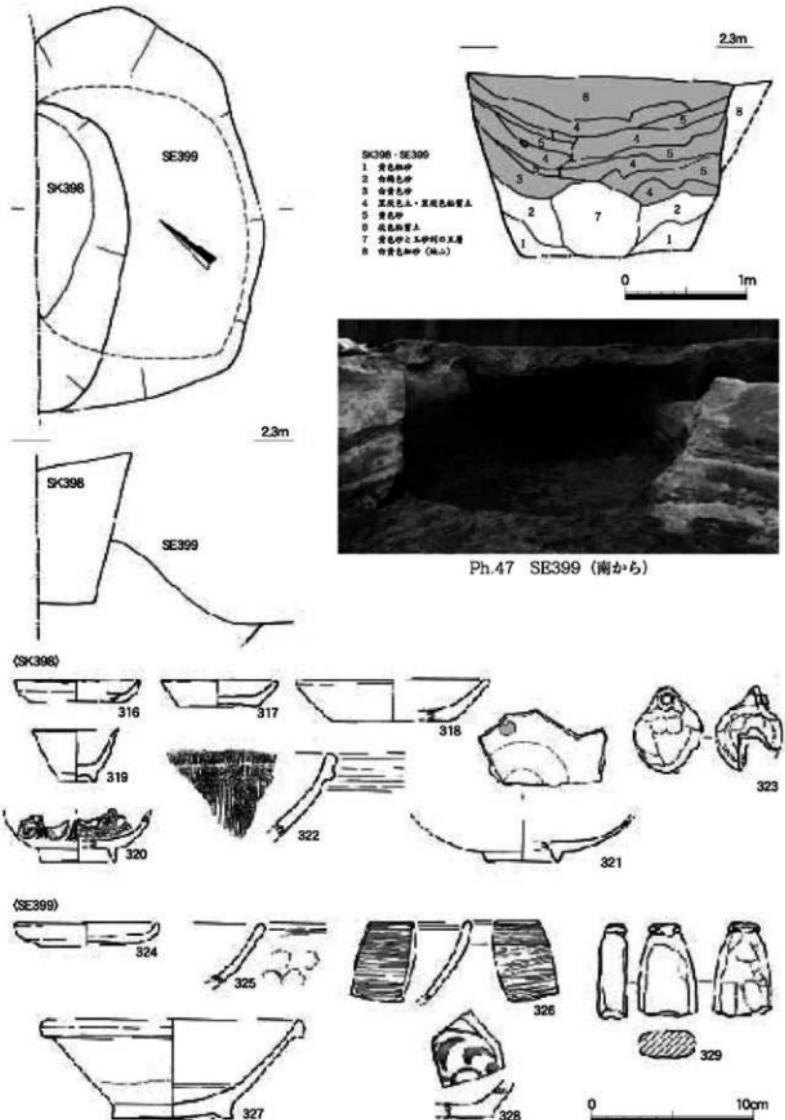


Fig.44 SK398・SE399実測図・土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

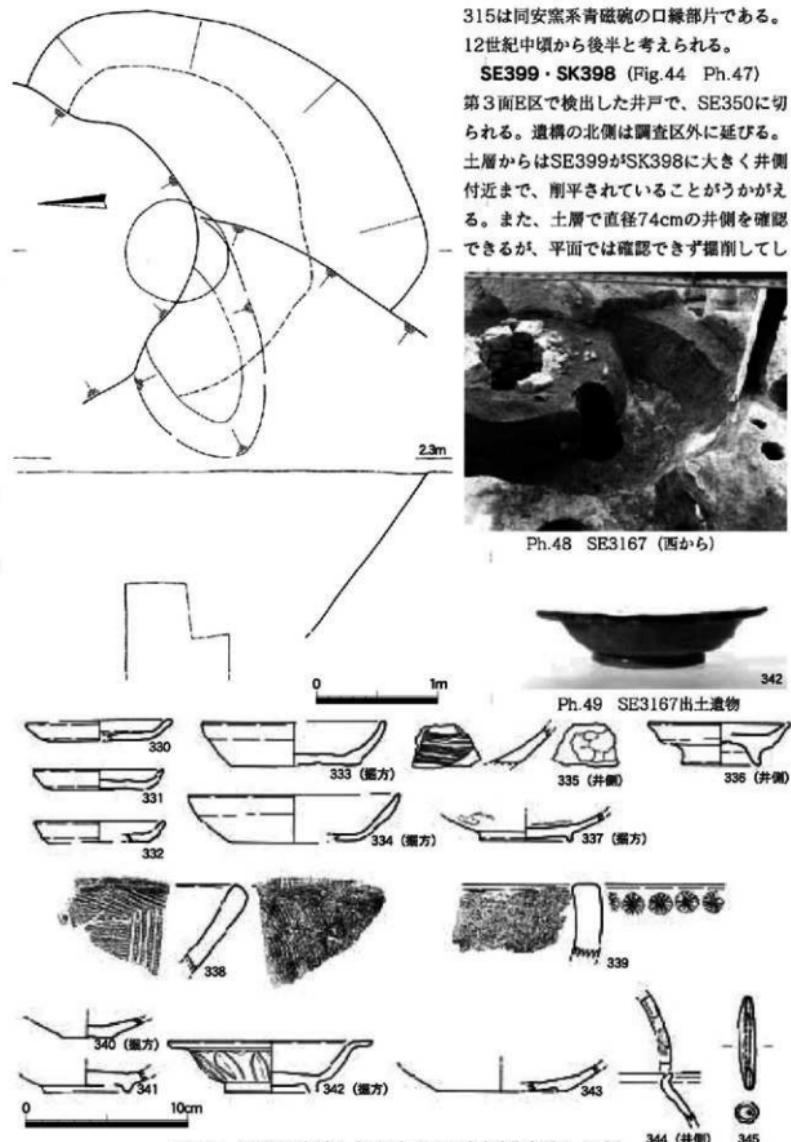


Fig.45 SE3167実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (1/3)

315は同安窯系青磁碗の口縁部片である。
12世紀中頃から後半と考えられる。

SE399・SK398 (Fig.44 Ph.47)

第3面E区で検出した井戸で、SE350に切られる。遺構の北側は調査区外に延びる。土層からはSE399がSK398に大きく井側付近まで、削平されていることがうかがえる。また、土層で直径74cmの井側を確認できるが、平面では確認できず掘削してし

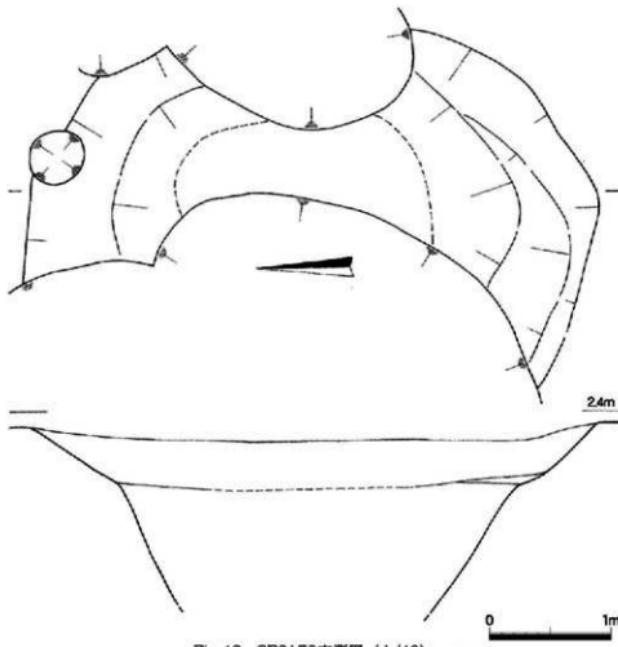


Fig.46 SE3173実測図 (1/40)



Ph.50 SE3173 (東から)

で、見込は輪状に釉を搔き取る。内面には円状に黄褐色が垂れている。322は無釉陶器の擂鉢である。6条のすり目が施される。323は土鉢である。頂部には扁平な鉢を有し、径0.8cmの円形の孔をもつ。鉢と平行する方向に切目を有する。324は回転糸切り底の土師器の小皿で、板状圧痕を有する。口径8.6cm、器高1.4cmを測る。325・326は瓦器楕である。326は楕葉型で内外面ともに密な研磨が施される。327は白磁碗IV類である。328は磁窯系の陶器の盤で、内面に淡黄色の釉を施し、鉄絵を描く。胎土には赤褐色粒、黒色粒を多く含み、外面の露胎部分は淡赤褐色を呈する。329は滑石製の石錘である。下端は欠損する。基部は摘み状に削りだす。断面は梢円状を呈し、長辺の一面はやや

また。木質等は見られない。

出土遺物 (Fig.44) 316～323はSK398、324～329はSE399の出土遺物である。316～318は回転糸切り底の土師器である。316・317は小皿で、口径6.9～7.6cm、器高1.3～1.7cmを測る。316は灯明皿と思われる。318は回転糸切り底の杯で、口径11.7cm、器高2.5cmを測る。319～322は肥前系陶磁器である。319は白磁のぐい呑みである。疊付には砂目が付着する。320は打ち刷毛目文碗の底部片である。321は底部片

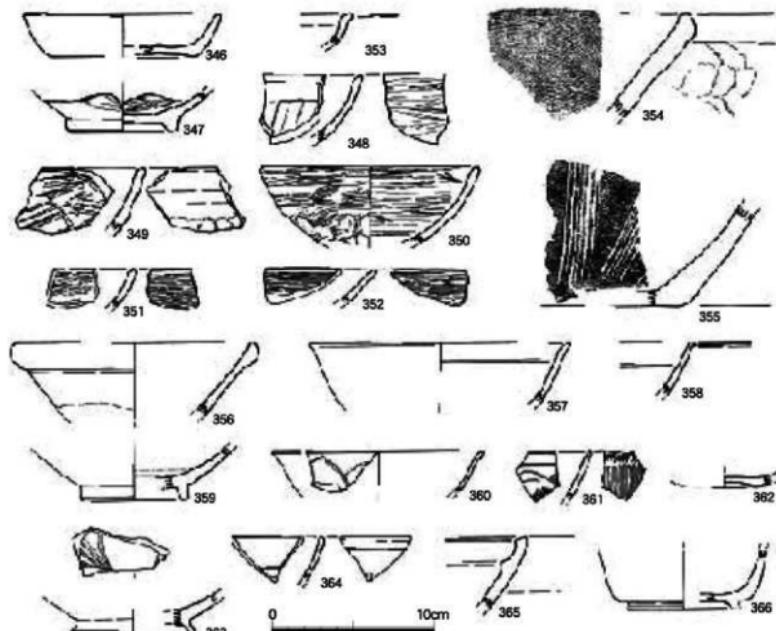


Fig.47 SE3173出土遺物実測図(1/3)

凹状に、もう一面は段状を呈し、鍋の調整に類似するため、転用品とも考えられる。井側があつたと考えられるSK398からは17世紀後半の肥前系陶磁器が出土する。SE399の掘方からは12世紀を示す遺物が出土する。

SE3167 (Fig.45 Ph.48) 第3面H区で検出した井戸で、SE216、SE376に切られる。掘方は北西側の大半を井戸に削平され、南東側に一部残っている。井側は標高1.3m付近から確認できだが、南側を一部土坑に削平されていた。標高0.8m付近で、直径85cmと確認した。木質は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.45 Ph.49) 330～336は土師器である。330は板状圧痕を有するヘラ切り底、331・332は回転糸切り底の小皿である。口径8.0～9.0cm、器高1.2～1.3cmを測る。333・334は回転糸切り底の坏で、333は板状圧痕を有する。口径は11cm、13cm、器高2.7cm、2.9cmを測る。335は椀の体部片で、内面は白橙色を呈し、研磨が施される。外面は二次焼成を受けたためかひび割れ、黒変する。336は高台付きの小皿である。口径8.8cm、高台径4.8cm、器高2.6cmを測る。高台は中央よりに貼付けられる。337は瓦器椀の底部片である。内面は粗いナナを施し、部分的に研磨が施される。外面には煤が付着する。338は瓦質土器の擂鉢である。内面は横、斜方向の粗い刷毛目調整が施され、外面には指押さえが残る。5本以上のすり目を有する。339は土師質土器の火舟で、外面には菊花文が印花される。340は白磁皿VI類の底部片である。341・342は明代の龍泉窯系青磁である。341は底部片で、全面施釉後、高台内の釉は搔き取られ、見込には沈線が巡る。342は坏IV類

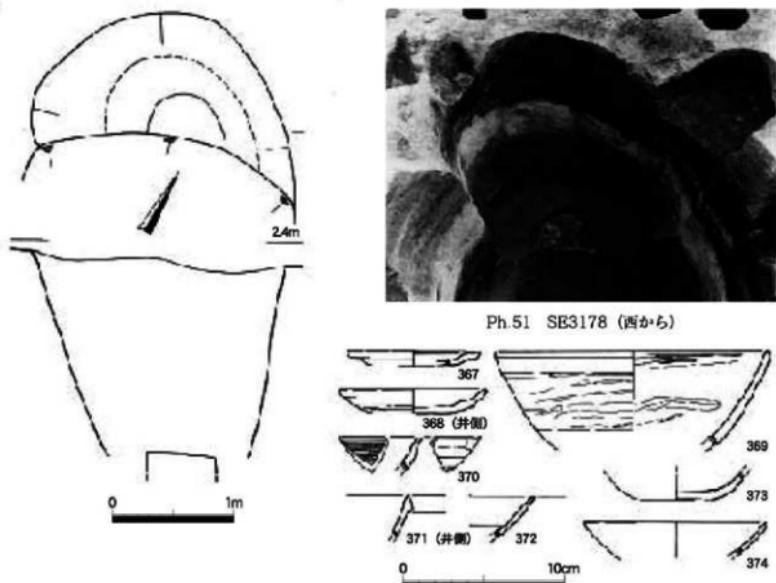


Fig.48 SE3178実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

で外面には線連弁が施される。343・344は中国陶器である。343は底部片で、幕筒底を呈する。黒色粒を含んだ褐色の胎土に緑を帯びた釉薬がかかる。344は壺の口縁部片で、口縁部上端には砂目を有し、にぶい橙色の胎土に黄色釉がかかる。345は土鏡である。環状で細身のエンタシス状を呈する。長さ5.6cm、重量4.23gである。他に銅鏡が1枚出土する。井側からは中国陶器の壺の破片が出土する。掘方からは13世紀末から14世紀前半の遺物が出土する。14世紀前半頃と考えられる。

SE3173 (Fig.46 Ph.50) 第3面H区で検出した井戸で、SE216、SE3167、SE3188、SE380に切られる。掘方は南北方向で4.7mを測る。標高1.8m付近で傾斜を急にして壁は落ちていく。井側は検出できなかった。

出土遺物 (Fig.47) 346～348は土器である。346は回転糸切り底の杯で、口径12cm、器高2.6cmを測る。347・348は椀である。347は底部片で、外底部には糸切りが残る。内外面ともに研磨調整される。348は口縁部片で、内面にはコテあてが残る。349は黒色土器A類の椀である。350・351は黒色土器B類の椀である。351は楠葉型で、口縁内面の端部付近の沈線を逃らせない。352は楠葉型瓦器椀である。353は灰釉陶器の椀の口縁部片である。354は土師質土器の鉢で、内面は刷毛目調整、外面は指押さえで調整する。355は備前焼の中世2期の播鉢で、6本のすり目を有する。356～360は白磁の碗である。356はIV類、357はV-2類、358はV-4-a類、359はV類、360はVI類である。361は青白磁で、外面は壓押し、内面は線刻による文様を施し、口縁端部は輪花を有する。362は白磁VII類である。363は越州窯系青磁碗の底部片で、全面施釉され、高台内に胎土目が付く。364は同安窯系青磁碗の口縁部片である。365は捏鉢I-1-b類である。366は須恵器の

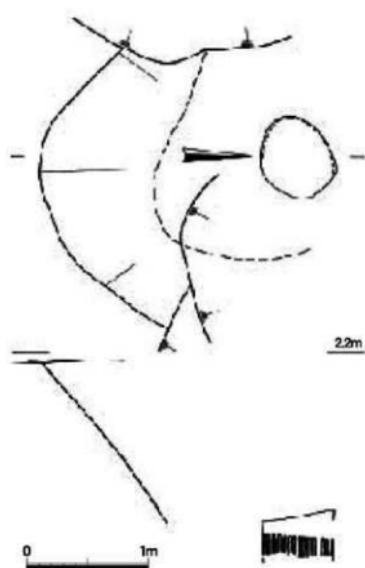


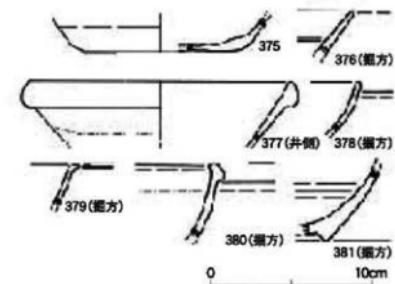
Fig.49 SE3181実測図 (1/40)
および出土遺物実測図 (1/3)

高台付杯である。他に銅鏡が3枚、同安窯系青磁片が出土する。時期は12世紀後半と考えられる。

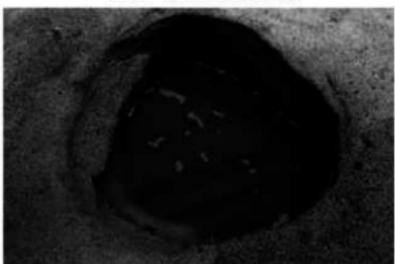
SE3178 (Fig.48 Ph.51) 第3面I区で検出した井戸で、SE241に切られる。掘方は大きく削平され、東側に一部遺存する。井側は標高0.65m付近で検出したが、掘方同様、SE241に削平されていた。東西の直径は約65cmを測る。木質は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.48) 367は京都系土器盤で、手捏ねによるものである。色調は淡橙色を呈する。口径8.0cm、器高0.9cmを測る。368はヘラ切り底の小皿で、板状圧痕を有する。口径9.0cm、器高1.5cmを測る。369は黒色土器B類の碗である。粗い磨きが施される。370は楠葉型瓦器碗である。371～374は白磁である。371は碗II類、372は皿II類、373は皿V類、374は皿VI類である。他に中国陶器、中国の天目、灰釉陶器が出土する。時期は11世紀末と考えられる。

SE3181 (Fig.49 Ph.52・53) 第3面K区で検出した井戸で、SE376、SE3167に切られる。掘方の北側は大きく削平される。標高0.9m付近で、直径58～68cmの歪な井側を検出した。標高0.7m付近から木質が縦方向に遺存しており、井側には桶が使用されたと考えられる。木質は西側部分にだけ遺存していた。



Ph.52 SE3181 (北から)



Ph.53 SE3181井側検出状況 (東から)

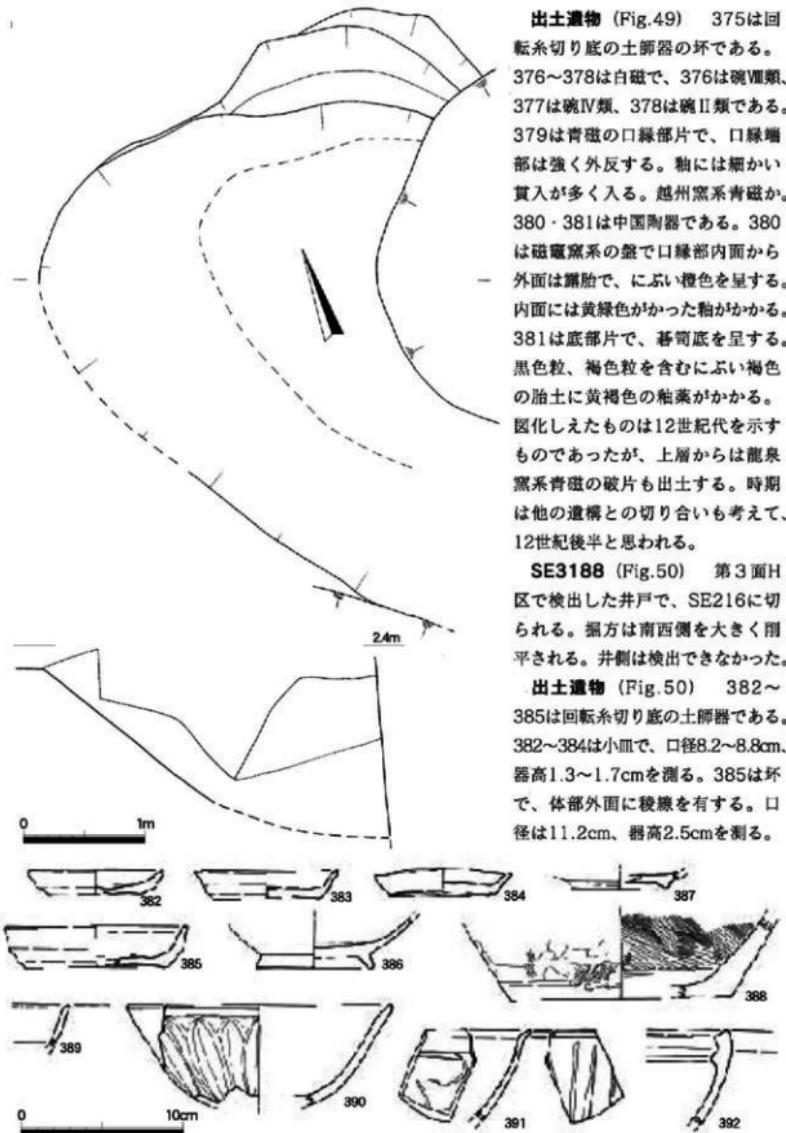


Fig.50 SE3188実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.49) 375は回転系切り底の土師器の坏である。376～378は白磁で、376は碗Ⅴ類、377は碗Ⅳ類、378は碗Ⅱ類である。379は青磁の口縁部片で、口縁端部は強く外反する。釉には細かい貢入が多く入る。越州窯系青磁か。380・381は中国陶器である。380は磁窯系の盤で口縁部内面から外面には露胎で、ぶい褐色を呈する。内面には黄緑色がかった釉がかかる。381は底部片で、基底を呈する。黒色粒、褐色粒を含むぶい褐色の胎土に黄褐色の釉薬がかかる。固化したものは12世紀代を示すものであったが、上層からは龍泉窯系青磁の破片も出土する。時期は他の遺構との切り合いも考えて、12世紀後半と思われる。

SE3188 (Fig.50) 第3面H区で検出した井戸で、SE216に切られる。掘方は南西側を大きく削平される。井戸は検出できなかった。

出土遺物 (Fig.50) 382～385は回転系切り底の土師器である。382～384は小皿で、口径8.2～8.8cm、器高1.3～1.7cmを測る。385は坏で、体部外面に稜線を有する。口径は11.2cm、器高2.5cmを測る。

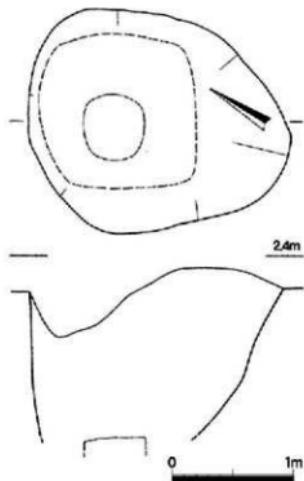


Fig. 51 SE3189実測図 (1/40)

386は灰釉陶器の椀か。底部片で、見込部分は回転ナデで釉を搔きとる。内面は見込付近まで自然釉がかかる。387は楠葉型瓦器椀の底部片である。388は瓦質土器の鉢である。底部と内面は刷毛目調整、外面は刷毛目調整の後、指ナデをおこなう。389は白磁碗Ⅳ類、390は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、391は同安窯系青磁碗である。392は捏鉢I-1-b類である。他に銅錢が1枚出土する。出土遺物より時期は13世紀中頃から14世紀初頭と考えられる。

SE3189 (Fig. 51 Ph. 54) 第3面Ⅰ区で検出した井戸で、SE3173、SE3181に切られる。掘方は南北方向が2.2m、東西方向が1.8mと歪な楕円形を呈する。標高0.95m付近では、掘方は一辺が1.25mの方形となる。標高0.9m付近で、直径55cmの井側を確認した。井側はやや北寄りに取り付けられる。木質は確認できなかった。

出土遺物 (Fig. 52) 393～397は土師器である。393～396は小皿で、口径9.6～9.8cm、器高1.1～1.5cmを測る。393・394はヘラ切り底、他は回転糸切り底で、393・396は板状压痕を有する。397は回転糸切り底の环で、口径は16cm、器高2.5cmを測る。398は須恵器の底部片である。内面はよく研磨されており、硯等に使用したとも考えられるが、墨痕は見られない。399は灰釉陶器の底部片である。黒色砂粒を多く含み、胎土は灰色を呈する。内外面にオリーブ灰色釉が施され、高台脇から外底部は露胎である。露胎部分は明橙色を呈する。疊付には胎土目、見込には砂が付着する。400は黒色土器A類の底部片である。内面は幅広の研磨が施される。401・402は黒色土器B類である。402は楠葉型の底部片である。見込は格子目状に研磨を施す。403～406は瓦器碗である。403は体部で屈曲し、内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。404～406は楠葉型で、口縁内面の端部付近に沈線をもつ。405・406の内面は横方向に密な研磨調整が施され、外面の研磨調整は404が405と較べ、幾分異なる。406は404・405と較べ、器壁は薄く、内面口縁部付近は研磨調整が疎となり、外面も口縁部付近に行われるのみである。407～410は白磁である。407は碗Ⅳ類、408・409は碗Ⅳ類、410は皿Ⅲ類である。408は見込上部に胎土目が付着する。411・412は同安窯系青磁である。413は中国天目である。白色砂粒、赤褐色砂粒を含む胎土に、黒褐色釉がかかる。口縁端部は暗褐色を呈する。また、口縁部には胎土目が残る。414・415は中国陶器である。414は捏鉢I-1-b類である。415は底部片で、胎土は赤褐色粒を多く含んだ褐色を呈し、内外面に暗茶褐色の釉がかかる。416・417は高麗青磁である。416は口縁部片で、端部はわずかに外反する。417は底部片で、大きく外に開く背の高い高台をもつ。疊付は露胎で、灰褐色を呈し、見込には目勝が残る。418～422は土鍤である。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一条巡る。重さは418が46.41g、419が51.71g。



Ph. 54 SE3189(北東から) SE3189出土遺物 磨調整が施され、外面の研磨調整は404が405と較べ、幾分異なる。406は404・405と較べ、器壁は薄く、内面口縁部付近は研磨調整が疎となり、外面も口縁部付近に行われるのみである。407～410は白磁である。407は碗Ⅳ類、408・409は碗Ⅳ類、410は皿Ⅲ類である。408は見込上部に胎土目が付着する。411・412は同安窯系青磁である。413は中国天目である。白色砂粒、赤褐色砂粒を含む胎土に、黒褐色釉がかかる。口縁端部は暗褐色を呈する。また、口縁部には胎土目が残る。414・415は中国陶器である。414は捏鉢I-1-b類である。415は底部片で、胎土は赤褐色粒を多く含んだ褐色を呈し、内外面に暗茶褐色の釉がかかる。416・417は高麗青磁である。416は口縁部片で、端部はわずかに外反する。417は底部片で、大きく外に開く背の高い高台をもつ。疊付は露胎で、灰褐色を呈し、見込には目勝が残る。418～422は土鍤である。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縱方向に一条巡る。重さは418が46.41g、419が51.71g。

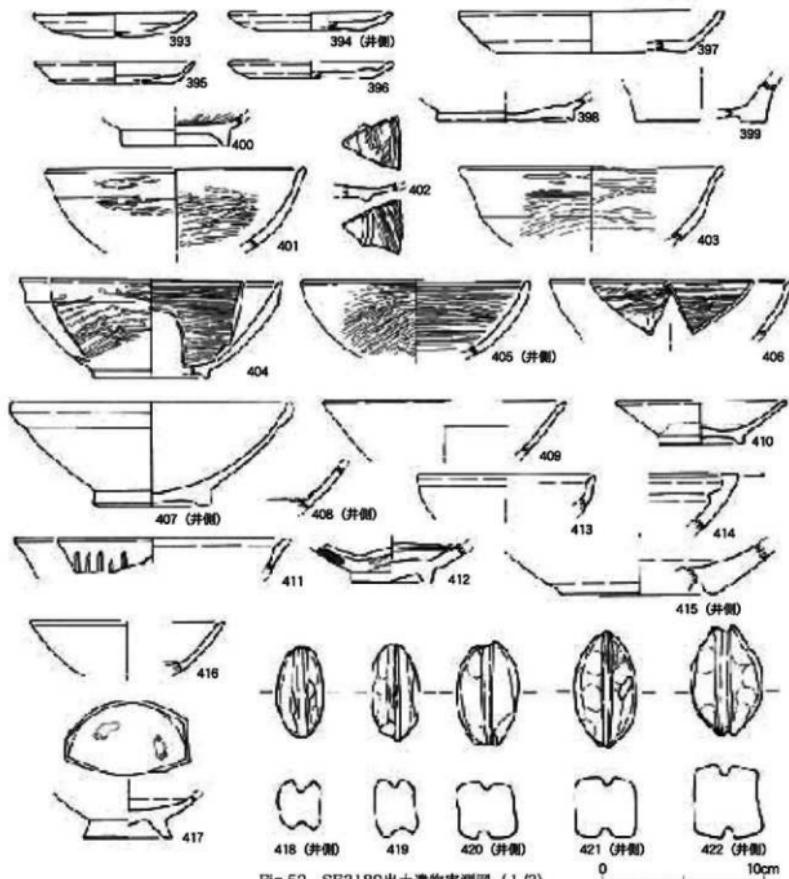
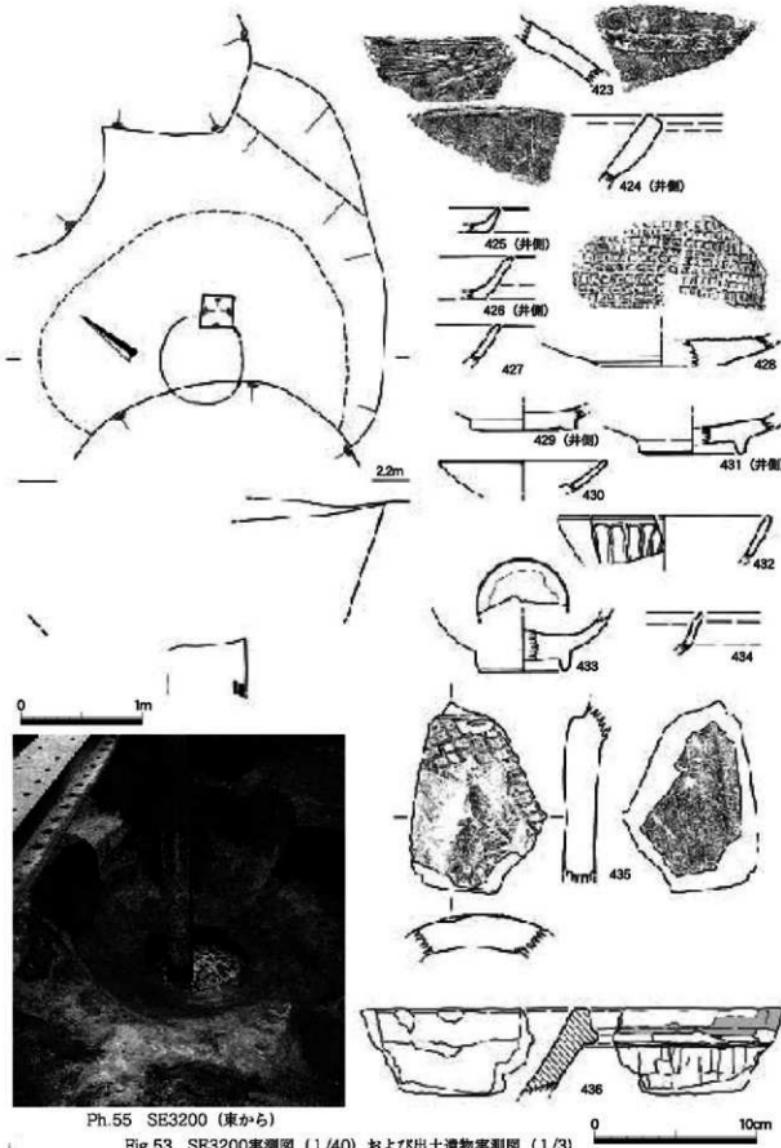


Fig. 52 SE3189出土遺物実測図 (1/3)

420が[†]71.45g、421が[†]91.76g、422が[†]128.76gを量る。井戸の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

SE3200 (Fig. 53 Ph.55) 第3面G区で検出した井戸で、SE202、SK3193に切られる。掘方は大半が削平されており、南東側に一部残る。標高0.9m付近で、直径65cmの井側を確認した。井側は一部地中梁によって壊されている。木質は標高0.55m付近から確認できたが、南東側に遺存するだけである。

出土遺物 (Fig. 53) 423は瓦質土器の火合である。外面には菱形文を印花し、内面は刷毛目とへラ削りで調整する。424は土師質土器の鉢である。内面は刷毛目調整、外面はヘラナデ、指押さえで調整される。425・426は回転糸切り底の土器の小皿である。427は東播系須恵器の楕で、口縁部



Ph.55 SE3200 (東から)

Fig.53 SE3200実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

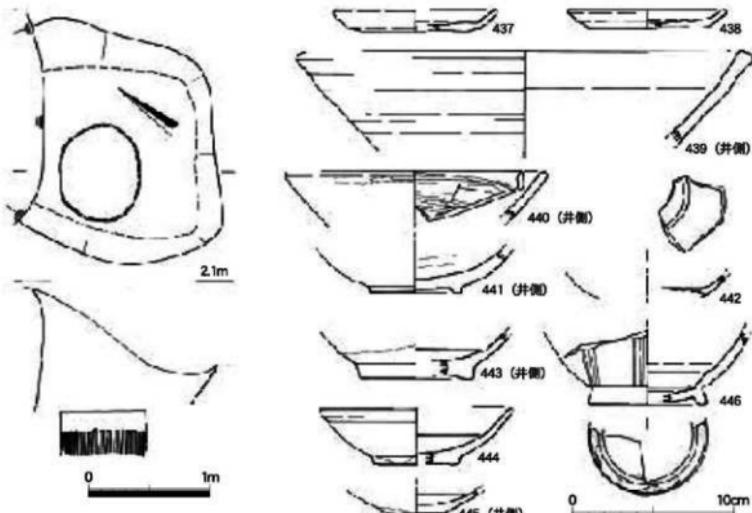


Fig. 54 SE3203実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 56 SE3203 (東から)



Ph. 57 SE3203 (東から)

は内傾気味に立ち上がり、外反する。胎土には黒色粒、白色砂粒が多く含まれる。428は瀬戸・美濃系陶器のおろし皿である。外底部には糸切り痕が残る。429・430は白磁である。429は碗IV類、430は明代の皿である。431は青白磁の碗の底部片で、外底部は露胎で、豊付の釉は搔き取る。432・433は龍泉窯系青磁である。432は小碗II-b類、433は碗IV類で、釉は豊付部分までかかり、外底部は露胎である。見込部分の釉を搔きとっている。434は中国の天目茶碗である。灰色の胎土に口縁部は明茶褐色、体部には茶色の釉が施釉される。435は丸瓦で、凹面には布目が認められ、凸面には小さな斜格子目のタタキの後、部分的にナアを加えている。436は滑石製の石鍋である。内外面に煤、焦げが付着する。他に常滑産の口縁部片が出土する。井戸の時期は13世紀前半と考えられる。

SE3203 (Fig. 54 Ph. 56・57) 第3面HK区で検出した井戸で、SE3199に切られる。掘方は一辺が約1.9mの隅丸方形を呈する。標高0.95m付近では、掘方は一辺が1.25mの方形となる。標高1.05m付近で、直径66~80cmの椭円形を呈した井側を検出した。井側はやや南西寄りに取り付けら

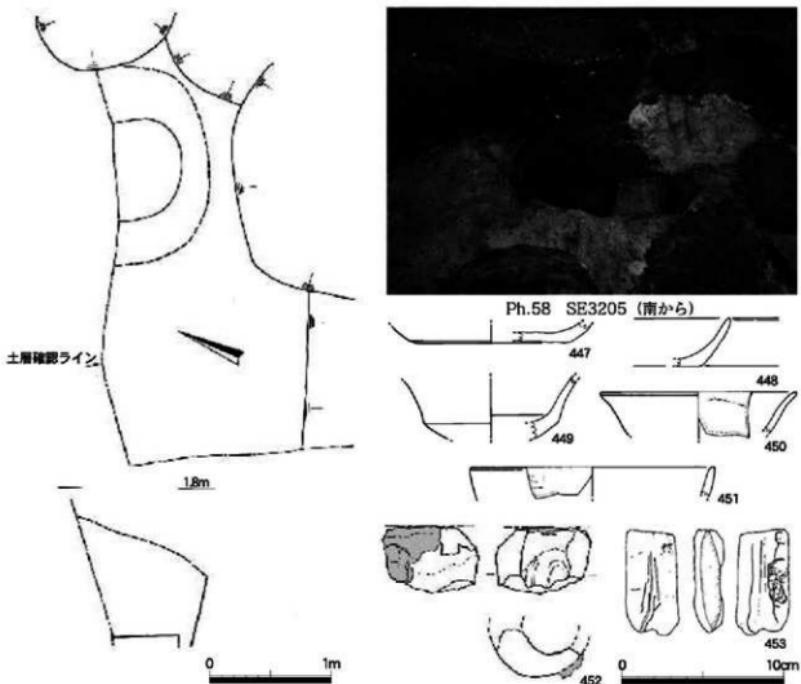


Fig.55 SE3205実測図・土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

れる。木質は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.54) 437・438はヘラ切り底の土師器の小皿で、438は底部に板状圧痕をもつ。口径10cm、9.8cm、器高1.3cm、1.1cmを測る。439は東播系須恵器の片口鉢である。片口部はわずかに遺存する。胎土には黒色粒、白色砂粒を多く含む。440・441は瓦器焼である。440は内面にコテあてが残り、粗い研磨調整を施す。442は縁釉陶器の底部片である。胎土には細かい金雲母を多く含み、橙色を呈する。外面に濃緑色の釉がかかる。443～445は白磁である。443は碗IV-a類、444は皿II-1-a類、445は皿IV-1-b類である。446は越州窯系青磁碗である。全面施釉され、疊付には胎土目がある。見込は不明である。井側等の出土遺物から12世紀前半と考えられる。

SE3205 (Fig.55 Ph.58) 第3面J区で検出した井戸で、北側は調査区外に延びる。掘方はSE202、SE3199、SK3193に削平されている。北壁の標高1.80m付近で、SE3205の掘方の上場を確認できた。井側中央で折り返すと、直径約3.2mの掘方となる。標高0.6m付近で、直径約85cmの井側痕跡を検出したが、木質は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.55) 447・448は回転糸切り底の土師器の坏である。449は明代の白磁坏である。450・451は明代の龍泉窯系青磁である。450は小碗で、内面にはヘラによる文様が描かれる。451は不明瞭であるが、口縁部外面に雷文が描かれる。452は櫛羽口片である。先端部は強い被熱により

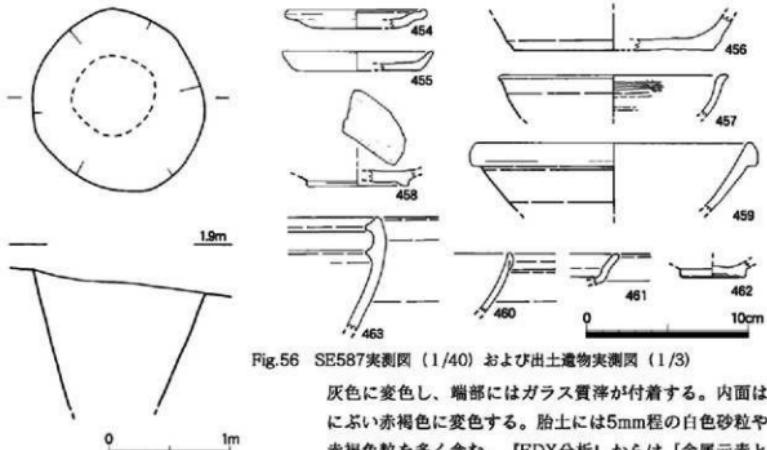


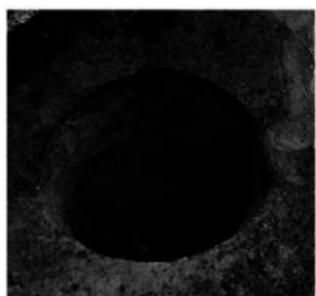
Fig.56 SE587 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

灰色に変色し、端部にはガラス質滓が付着する。内面はにぶい赤褐色に変色する。胎土には5mm程の白色砂粒や赤褐色粒を多く含む。「EDX分析」からは「金属元素としての鉄が見られるだけで、非鉄金属は見られなかった」。453は滑石製の石鍤で、石鍤の軸用品である。長めの抉りを入れて紐かけ用の溝を一本配している。長さ6.4cm、幅3.2cm、厚さ1.8cm、重さ62.91gである。他に銅鏡が一枚出土する。時期は15世紀前後である。

SE587 (Fig.56 Ph.59) 第5面KL区で検出した井戸である。掘方は直径約1.5mの円形を呈する。標高0.6m付近まで壁はわずかな傾斜をもって落ちていく。井側、木質等は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.56) 454～456は土師器である。454は手捏ねによる京都系土師器皿で、白橙色を呈する。口径8.6cm、器高1.1cmを測る。455は回転糸切り底の小皿である。

口径9.2cm、器高1.2cmを測る。456は回転糸切り底の杯である。456は回転糸切り底の杯である。457は黒色土器A類で口縁端部は強く外反する。内面は横方向の細かい研磨が施される。458は楠葉型の黒色土器B類の底部片である。見込には暗文風に研磨が施される。459・460は白磁である。459は碗IV類、460は碗II類である。461は龍泉窯系青磁皿である。462は中国天日の底部片である。胎土は白色砂粒を含み、黒褐色釉が施釉される。463は中国陶器の捏鉢I-1-b類である。時期は12世紀中頃から後半である。



Ph.59 SE587 (南東から)

SE588 (Fig.57 Ph.60) 第3面L区で検出した井戸で、SE3173に切られる。掘方は北西から南東にかけて1.8m、北東から南西にかけて1.5mを測る。平面プランは隅丸方形に近い梢円形を呈する。壁は標高1.0～1.3mの間で傾斜を変えて落ちていく。井側は標高0.7m付近で確認でき、一辺が約88cmを測る方形を呈する。木質は検出面から遺存状況が良好な部分でも5cm程しか残っていない。木質は横方向に走り、板材を方形に組んで、井側を構築したと考えられる。

出土遺物 (Fig.57) 464～466は土師器である。464・465は回転糸切り底の土師器の小皿であ

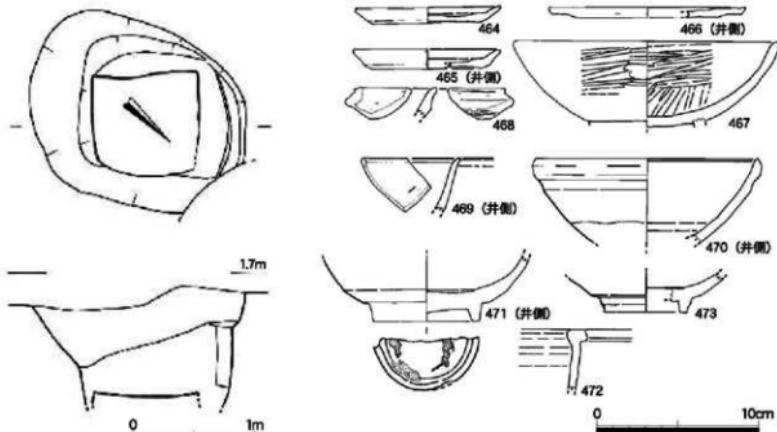


Fig. 57 SE588実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

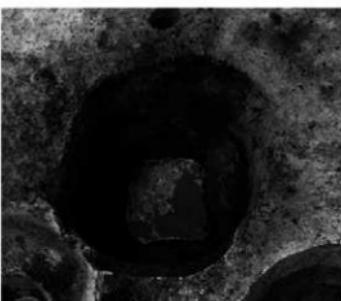
る。口径8.9cm、9.0cm、器高1.0cm、1.2cmを測る。466の底部はナデで調整し、口縁端部をわずかに掘み上げた形状を呈する。口径12cm、器高約0.6cmを測る。467は黒色土器B類の碗で、見込みは縱方向の研磨、体部から口縁部にかけては横方向の研磨を施す。底部外面の器面は荒れている。468は楠葉型の瓦器碗で、口縁内面の端部付近に浅い沈線をもつ。口縁外面は強い横ナデにより窪んでいる。469・470は白磁である。469は碗V類、470は碗IV類である。

471は越州窯系青磁の碗である。全面施釉され、高台内には胎土目が付く。472は中国(磁窯系)陶器の盤の口縁部片である。胎土は黒色粒、白色粒を含み、粘性を帯びる。外面口縁部下位は露胎で、淡褐色を呈する。口縁部から内面にかけては灰緑色の釉がかかる。473は青磁の底部片で、高台脇まで施釉され、疊付から外底部にかけては露胎である。露胎部分は灰色から淡赤色を呈する。高台脇と見込には胎土目が付く。高麗青磁か。12世紀前半と思われる。

2) 土坑

SK101 (Fig. 58) 第1面A区で検出した土坑である。覆土は灰褐色土で、炭化物が層状に堆積し、焼土も多く含まれていた。陶磁器、瓦を主として大量の遺物が廃棄されていた。小片が大半であったが、土製の人形、人形の焼型も出土する。

出土遺物 (Ph.61) 474~506は肥前系の陶磁器である。474~487は白磁皿、色絵付碗、染付碗、水差、紅皿である。染付碗の中には、口縁部内面に四方櫛文を巡らせ、外面と見込みに凸と「満福」の銘を記す。488~491・493~495は蓋、492は鉄絵の変形皿である。496~498は灯明皿、499は紅皿、500~502は水注である。503は瓶、504は片口の擂鉢で、すり目は先端をきれいに揃



Ph.60 SE588 (北から)

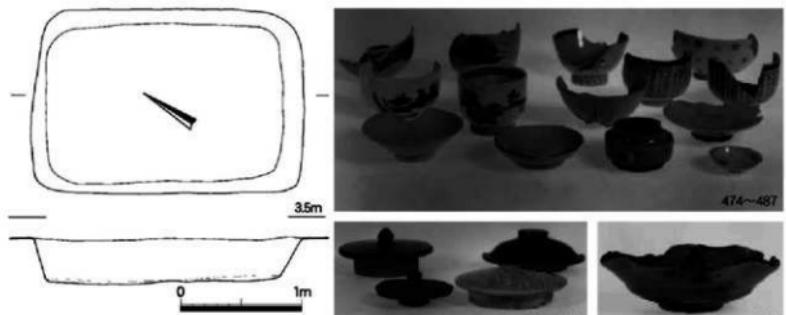
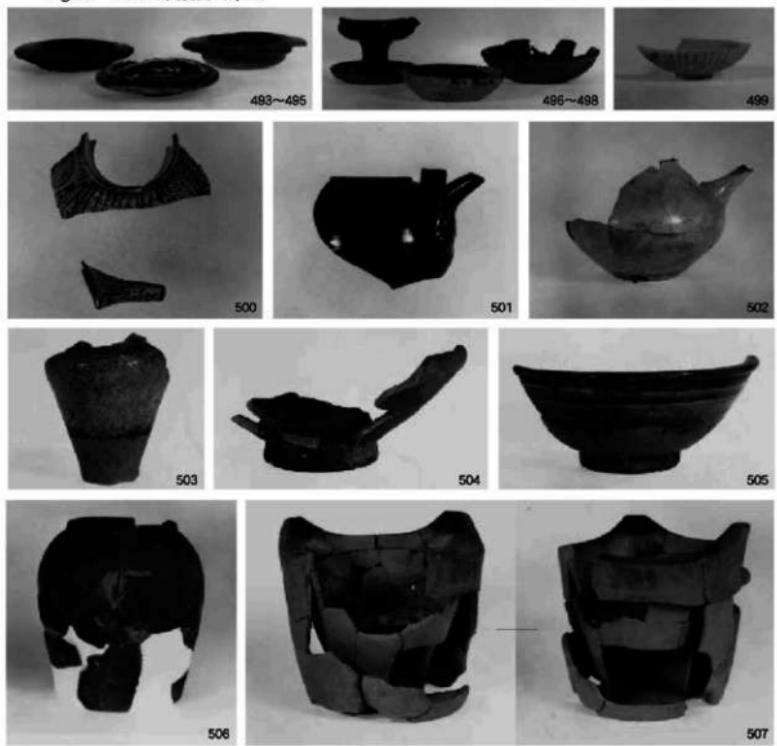


Fig. 58 SK101実測図 (1/40)

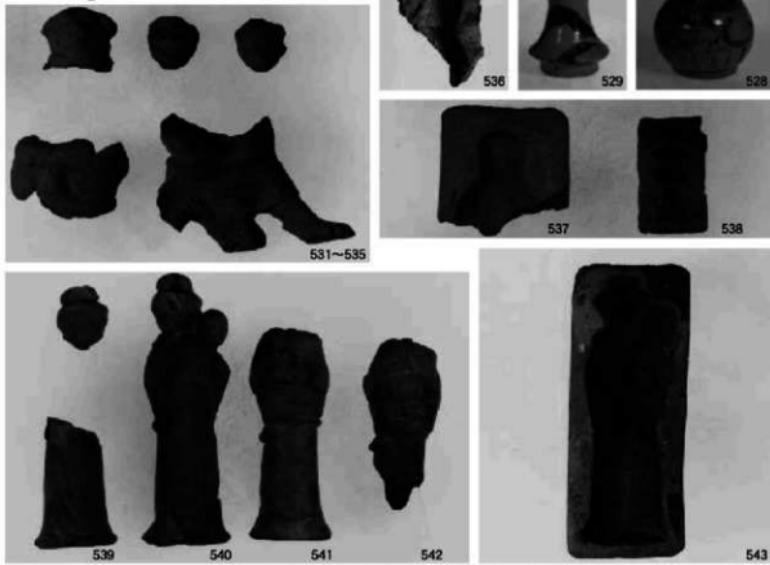


Ph.61 SK101出土遺物

える。505は鉢、506は甕、507は七輪である。543は長さ17.5cm、幅7cm、厚さ3.8cmを測る土製の人形鋳型である。下面、側面の角は面取りされ、丁寧な研磨で仕上げられる。上面には童を背負



Fig.59 SK108実測図 (1/40)



Ph.62 SK108出土遺物 (543のみSK101出土遺物)

う女性の後姿が彫られている。これはSK108で出土した人形 (541・542) の鉄型である。鉄型では女性の身長は16cmを測る。土坑の時期は18世紀と考えられる。

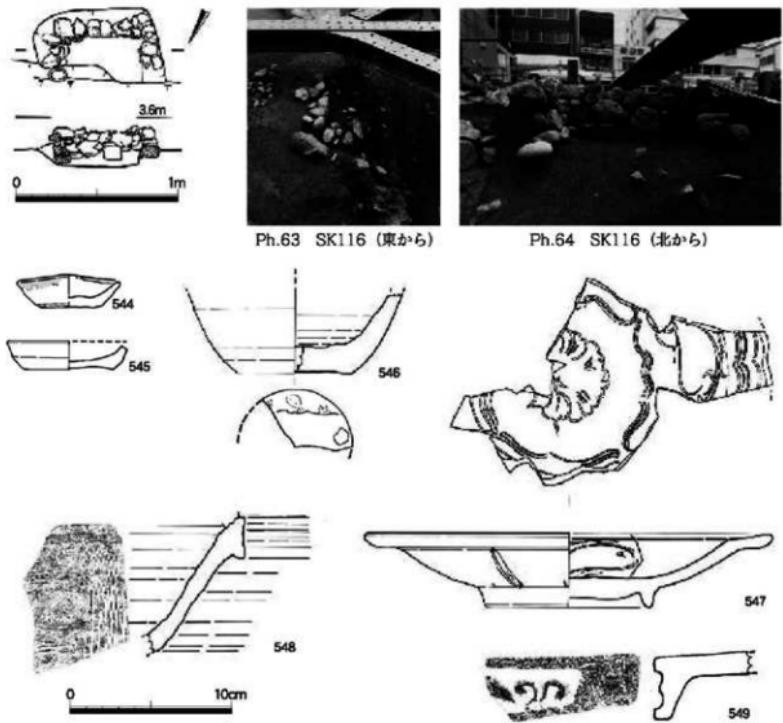


Fig.60 SK116実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)

SK108 (Fig.59) 第1面AB区で検出した土坑である。長辺200cm、短辺160cm、深さ160cmを測り、長方形を呈する。底面には直径約1m、深さ20cmを測るピットがある。SK101同様、覆土には灰褐色土、炭化物や焼土が多量に混入し、大量の遺物が出土した。

出土遺物 (Ph.62) 508~525は土師器の灯明皿で、底部は全て糸切り底である。口縁部や内面に焼が付着する。大きく4種類に分類できる。上段中央は受部をもつもので口径5.4cm、高さ5.4cmを測る。上段右側は壺で、口径11.7cm、器高1.7cmを測る。他は小皿であるが、器壁が3mm前後の高さが低いものと器壁が2mm程で底部が小さく、器高が高いものの2種類がある。前者は直径6.9~7.5cm、高さ0.9~1.4cmを測る。後者は直径7~7.5cm、高さ1.1~1.7cmを測る。526~530は肥前系の陶磁器である。526は染付碗で、見込みには蠍蠍文が描かれる。527~529は瓶、花生、530は灯火具である。531~535は犬、猿顔の素焼きの人形、536~538は鉢型である。539・540は女性の前姿、541・542は女性の後姿の素焼きの人形である。2個体分が出土する。540は頸部分が折れているため正確ではないが、約15.3cmである。土坑の時期は18世紀と考えられる。

SK116 (Fig.60 Ph.63・64) 第1面A区で検出した。南側は2段残り、北側は破壊されている。内側の面を揃えているが、石の大きさは不揃いで、基底面の高さも揃っていない。裏込め等に石

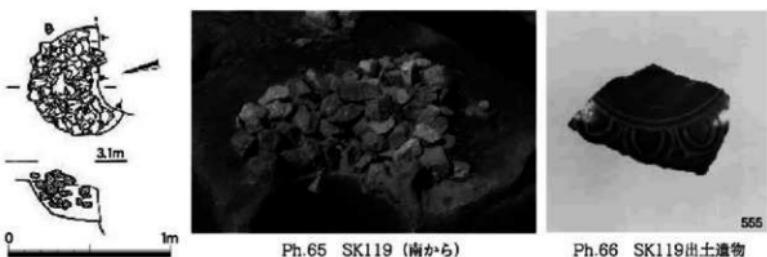


Fig.61 SK119実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

は用いておらず、土を充填しながら、石を積んでいったものと思われる。

出土遺物 (Fig.60) 544・545は回転糸切り底の土解器の小皿である。546は外底面に砂が多く付着する白磁の壺で、547は龍泉窯系青磁盤である。548は備前焼の擂鉢、549は橙褐色を呈した陶器の軒平瓦である。他に明代の染付が出土し、時期は16世紀後半と考えられる。

SK119 (Fig.61 Ph.65) 第1面E区で検出した。南側は他の造構によって削平される。直径130cm、深さ40cmの土坑に石を詰めたものである。規則性は確認できなかった。石は焼けていない。

出土遺物 (Fig.61 Ph.66) 550・551は回転糸切り底の土師器の小皿と壺である。552は土師質の片口の擂鉢で、細い沈線状のすり目が3本を単位に中位に短く刻まれる。553は備前焼の擂鉢で、底部は低い高台状を呈し、見込みにも一部すり目がある。554・555は高麗・朝鮮時代のもので、554は灰青陶器の壺、見込みには砂目が付く。555は青磁象嵌の壺の肩部片で、白土と黒土で象嵌される。時期は16世紀後半と考えられる。

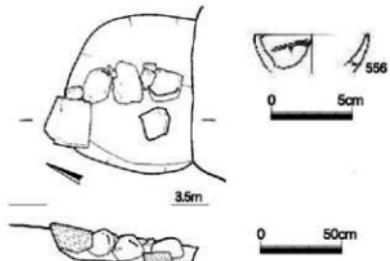


Fig.62 SK123実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph.67 SK123 (南から)

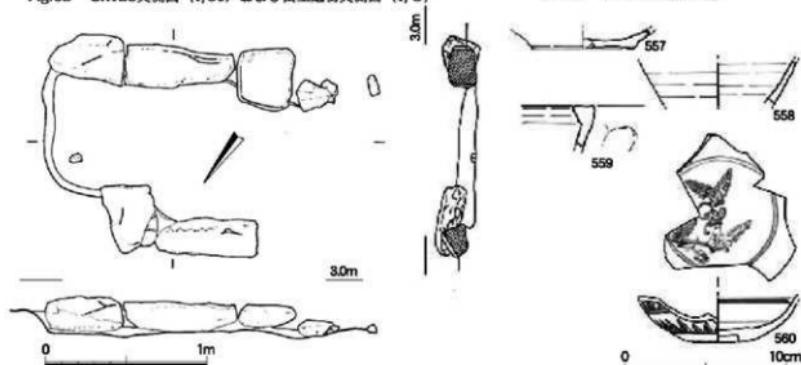


Fig.63 SK124実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph.68 SK124 (西から)

SK123 (Fig.62 Ph.67) 第1面A区で検出した。

大きく削平され、一部しか遺存しない。石の基底面は揃う。北側には大振りの扁平な石を使い、東側は小振りな石を置く。

出土遺物 (Fig.62) 556は肥前系の染付の碗である。他に回転糸切り底の土師器小片、備前焼の小片が出土する。時期は近世である。

SK124 (Fig.63 Ph.68) 第1面C区で検出した。大振りの石を使用し、北西側の石には、のみの痕跡がある。

出土遺物 (Fig.62) 557・558は土師器で、557は回転糸切り底の小皿、558は大内系の土師皿か。559は瓦質の鉢、560は明代の染付皿C群Ⅰ類である。時期は16世紀後半である。

SK125 (Fig.64 Ph.69) 第1面E区で検出した。深さ35cmの土坑に石を投げ込んでいた。西側の石は基底面も揃い、並んでいるようにも見えたが、他には規則性はうかがえなかった。

出土遺物 (Fig.64) 561～564は回転糸切り底の土師器の小皿と杯である。563は底部に板目压痕がある。565は土師質土器の火合、566は瓦質土器の火舎である。他に朝鮮時代の軟質白磁が出土し、16

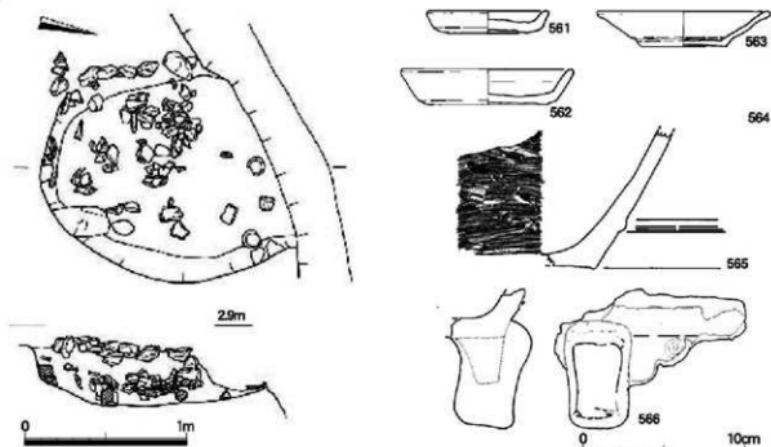
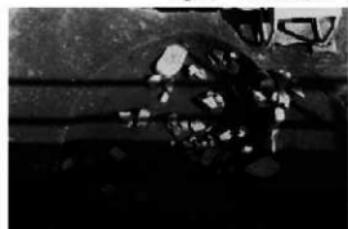


Fig.64 SK125実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)



Ph.69 SK125 (北から)

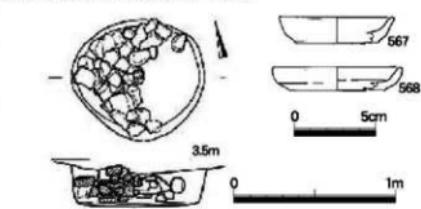


Fig.65 SK131実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)

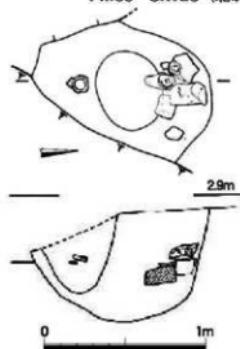
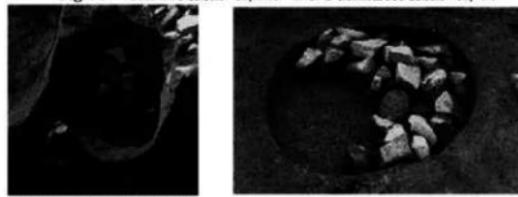


Fig.66 SK136実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)



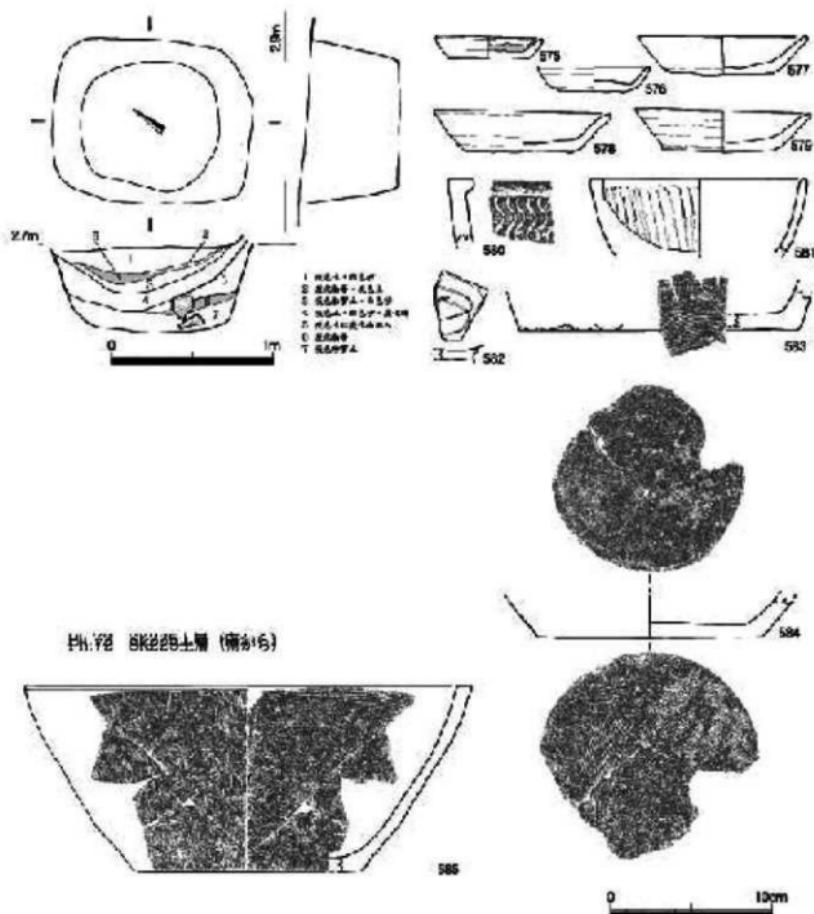


Fig.67 SK22E実観図 (1/30)：出土物実観図 (1/3)

世紀末と考えられる。

SK131 (Fig.65 Ph.7.1) 第1面AC区で検出した。直径90cm、深さ20cmの墓石土坑である。東側は掘り込みプランは残るが、右は全くみられなかつた。

出土遺物 (Fig.65) 567・588は回転糸切り底の土器器の小皿である。他に遺物は出土せず、他の遺構ともよりあっておらず、時期は不明である。

SK136 (Fig.66 Ph.7.0) 第1面E区で検出し、SK119に切られている土坑である。

出土遺物 (Fig.68) 585～572は回転糸切り底の土器器の小皿と环で、589は板口环瓶を有する。

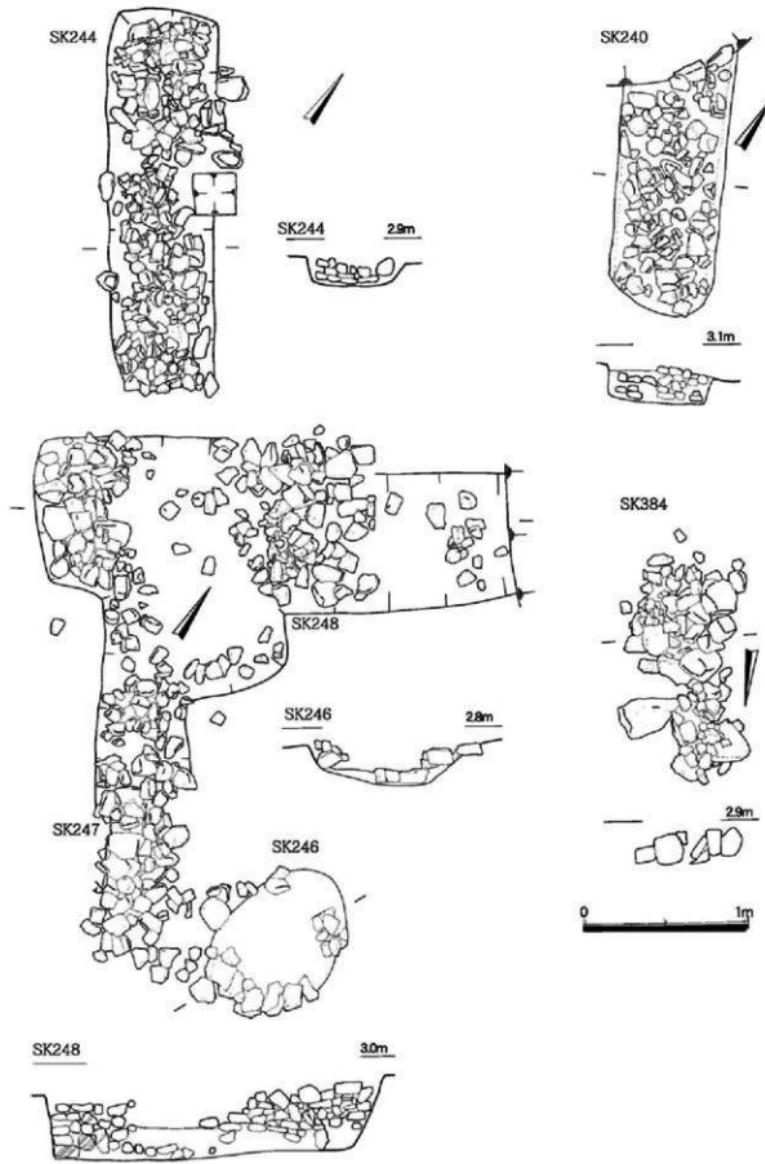


Fig.68 SK240・244・246・247・248・384実測図 (1/30)

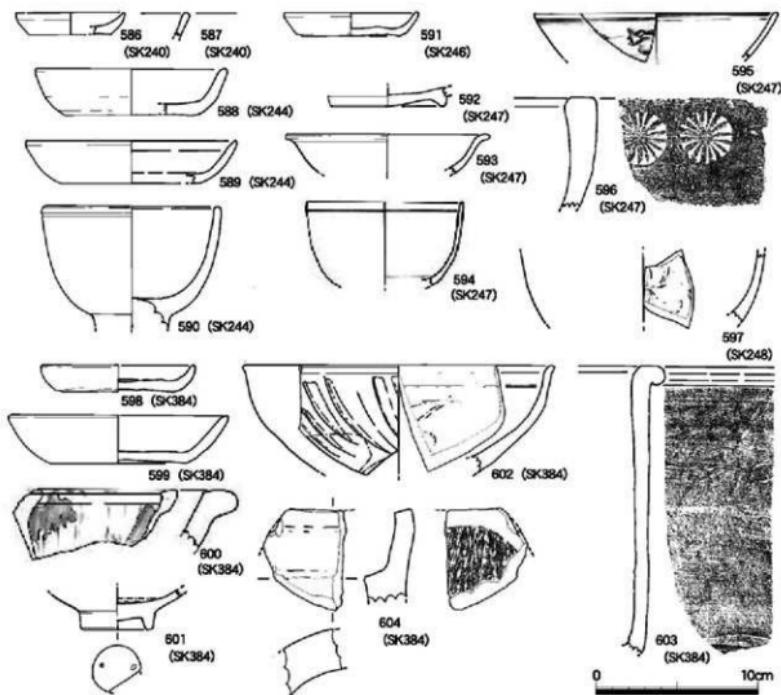
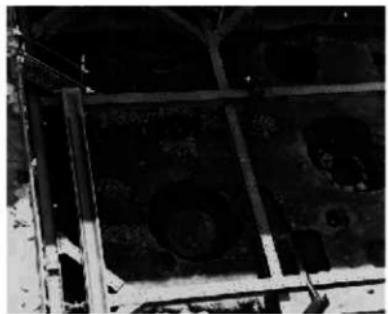
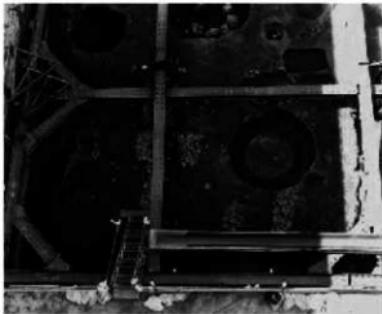


Fig.69 SK240・244・246・247・248・384出土遺物実測図 (1/3)



Ph.73 SK240・244・247・248 (東から)



Ph.74 SK240・244・247・248 (南から)

573は朝鮮時代の瓶の口縁部片、574は瓦質の火舎である。時期は16世紀である。

SK225 (Fig.67 Ph.72) 第2面H区に位置する。上層には炭化物が層状に堆積する。

出土遺物 (Fig.67) 575～579は回転糸切り底の土師器の小皿と壺である。580・583は土師質

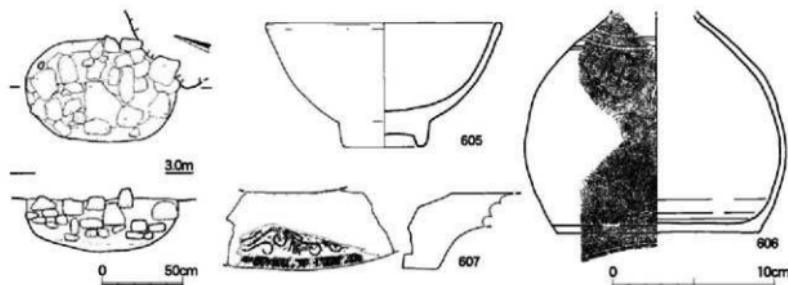


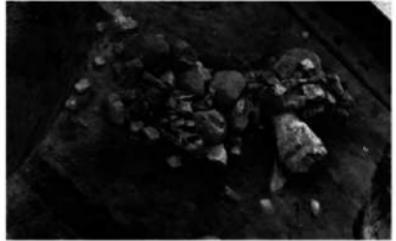
Fig. 70 SK250実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 75 SK246 (北から)



Ph. 76 SK250 (南から)



Ph. 77 SK384 (北から)



Ph. 78 SK240完掘状況 (西から)

の火舎、581は龍泉窯青磁碗、582は楠葉型の瓦器、584・585は瓦質の擂鉢である。16世紀である。

SK240・244・246・247・248・384 (Fig. 68 Ph. 73~75・77・78) 第2面HILL区で検出した集石列である。SK244とSK247はSK248の部分で抜がるが、同一のもので、N-35°-Wに並ぶ。南側は削平されるが、長さ6m以上、幅は60cmである。浅い掘り込みに小振りの石を充填する。この石群の中では礎石になりそうな石は確認できなかった。SK248との関係は、切り合いか分からず、同一のものであるかは不明である。SK240も同じ方位で、東側に3.2mの幅を開けて、平行に走る。北側を井戸で削平されるが、その延長線上にSK384を検出した。しかしSK384はN-14°-Wに方位をとる。SK246は土坑の周囲だけ石が巡る。中心には石は確認できなかった。

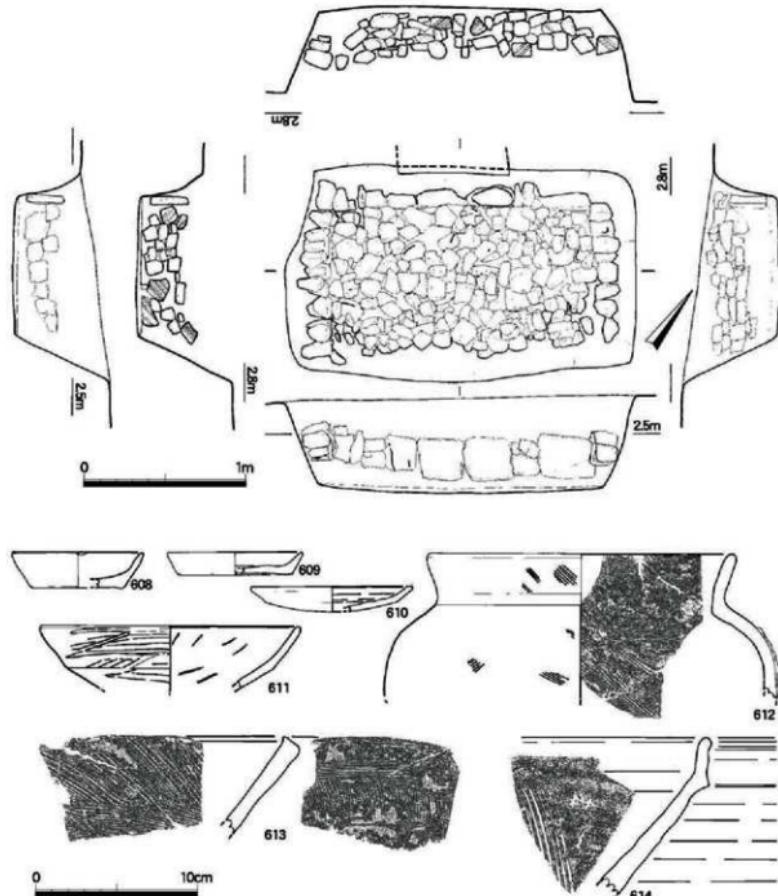
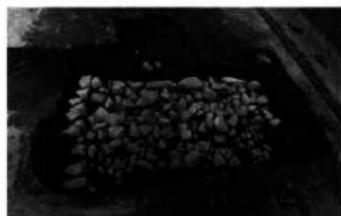


Fig.71 SK251実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (Fig.69) 586・591・598は小皿、588・589・599は壺で回転糸切り底の土師器である。592は瓦器梶の底部片、587・594・600は肥前系の陶器である。596は土師質の火薬、603は瓦質の鉢である。593は明代の白磁、601は白磁碗唇類で、高台内には墨痕がある。602は同安窯系青磁碗、590は明代の龍泉窯系青磁碗、597は龍泉窯系青磁碗I-II類である。604は丸瓦である。他に朝鮮時代の雜釉陶器破片も出土する。時期は16世紀末から17世紀前半か。

SK250 (Fig.70 Ph.76) 第2面Ⅰ区で検出した集石土坑で、礎石になりそうな石は見られない。

出土遺物 (Fig.70) 605は明代の龍泉窯系青磁碗、606は朝鮮陶器の体部片で、平底を呈し、外



Ph.79 SK251 (北から)



Ph.80 SK251 (北から)



Ph.81 SK251 (西から)



Ph.82 SK251出土遺物

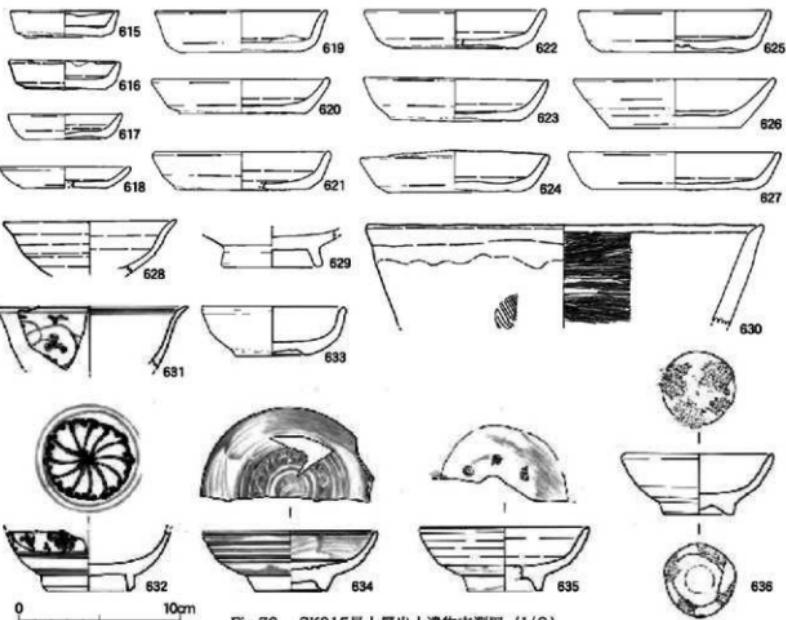


Fig.72 SK315最上層出土遺物実測図 (1/3)

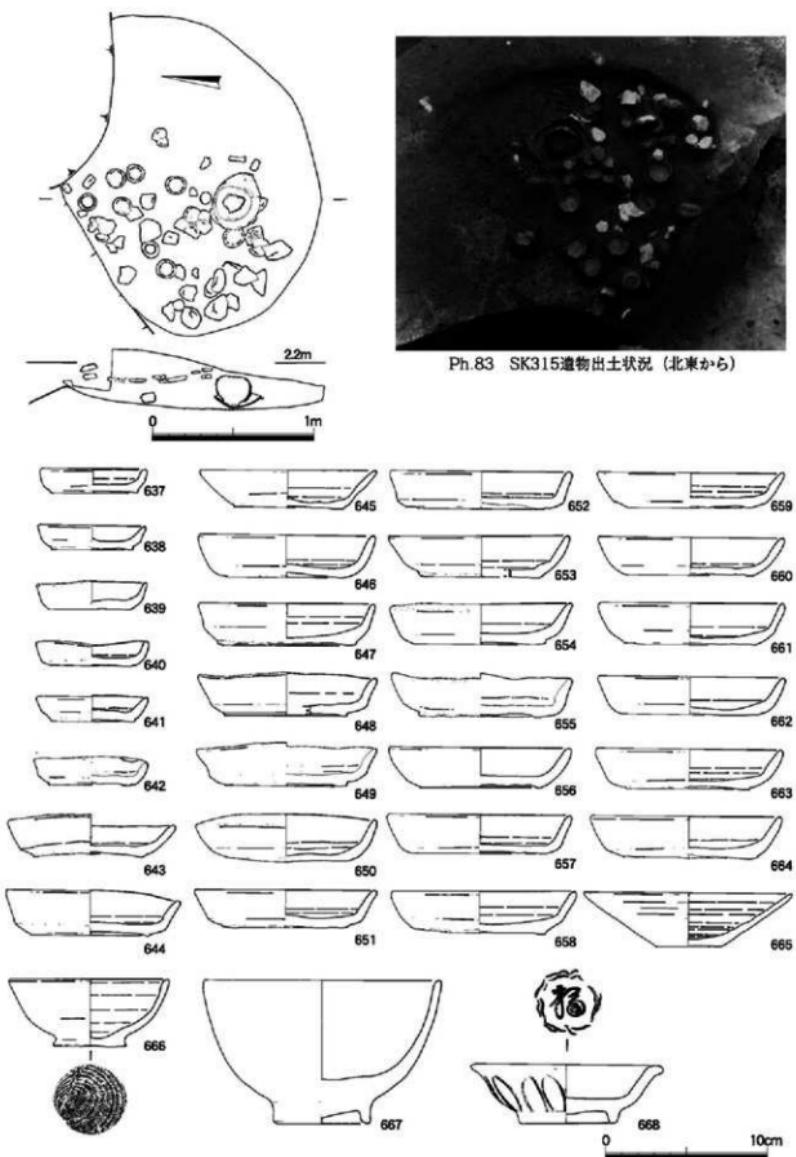


Fig.73 SK315上層遺物出土状況実測図 (1/30) および上層出土遺物実測図 ① (1/3)

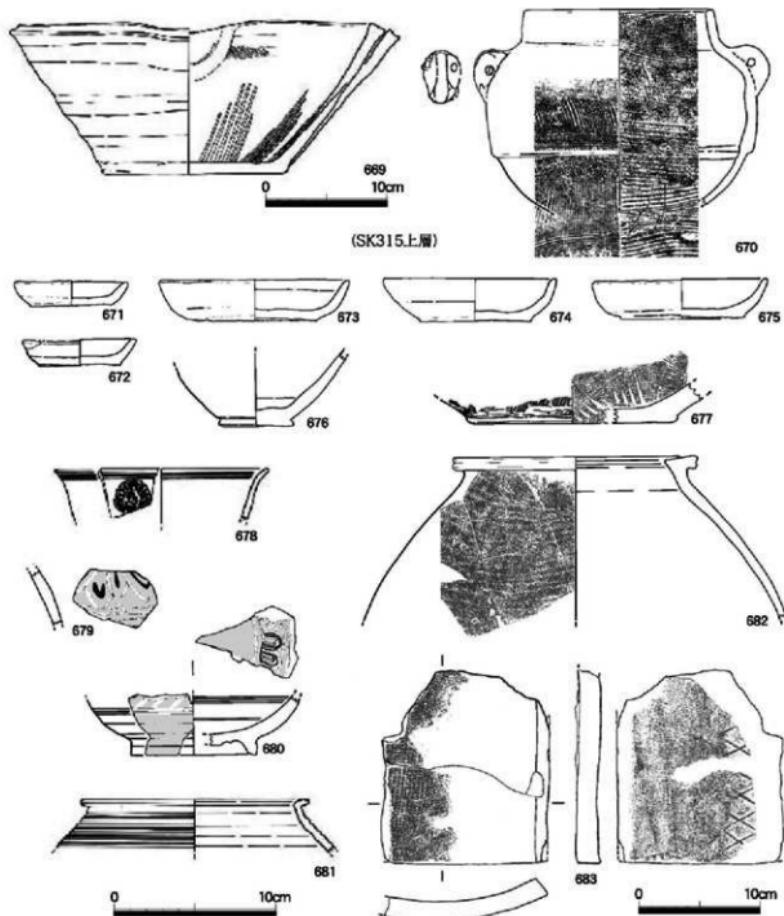


Fig. 74 SK315上層 ②・中層出土実測図 (1/3・1/4)

面にはタタキの痕跡がある。607は軒平瓦である。時期は16世紀後半から17世紀である。

SK251 (Fig. 71 Ph. 79~81) 第2面 I L 区で検出した。長辺210cm、短辺130cm、深さ54cmの掘り込みの中に、長辺160cm、短辺80cmの石積みを作る。内側に面を描えて南側以外の3面に壁面を作る。北側には大きな石を使用し、東側には小振りの石を3段積んで、高さを描える。中は小振りの石と灰色粘土質で充填する。硬く締まった状況ではない。この上面のSK248とは石が接し、土質も同じため、関係は分からなかった。しかし、遺物は古く、15世紀の備前播鉢以外は、北宋の頃の陶磁器が出土する。

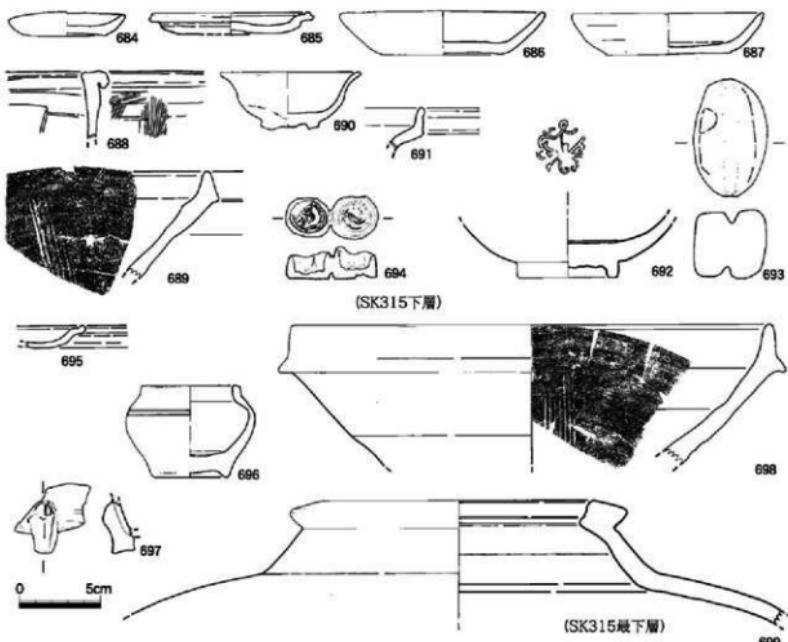
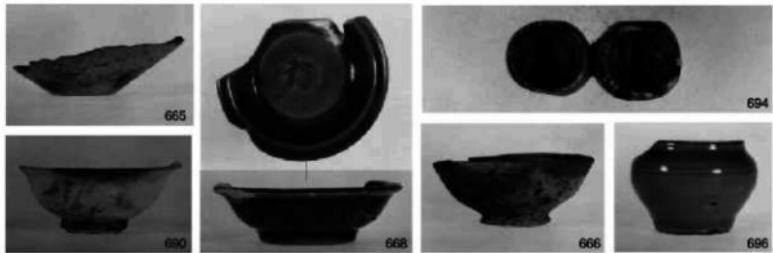


Fig. 75 SK315下層・最下層出土遺物実測図 (1/3)



Ph.84 SK315出土遺物

出土遺物 (Fig.71) 608・609は回転糸切り底の土師器の小皿である。610は土師器の小皿で、胎土は精良、白橙色を呈する。ヘラ切り底で板目圧痕を有する。611は瓦器椀、612は瓦質土器の湯釜である。把手の痕跡がある。613は土師質土器の鉢、614は備前焼の擂鉢で、中世5期のものである。

SK315 (Fig.73 Ph83.) 第3面E区に位置し、北側は削平される。大量の遺物が出土するが、上層と下層では時期差があり、別遺構の可能性も考えられる。

出土遺物 (Fig.72~75 Ph82・84) 615~636は最上層出土で、615~627は回転糸切り底の土師器の小皿、坏である。628は土師器の小椀、629は瓦器椀、630は土師質土器の鉢である。631・



Ph.85 SK323 (北から)

632は中国の染付碗B類である。633～636は朝鮮時代の陶器である。633は軟質白磁の皿、634は粉青沙器で見込に印花文を施し、内外面に刷毛目が残る。635・636は灰青陶器で、内外面に砂目が残る。637～670は上層出土で、大半が完形品である。637～665は回転糸切り底の土師器の小皿、壺である。665は大内系である。666は瓦器の小塊で、底部には回転糸切りが残る。

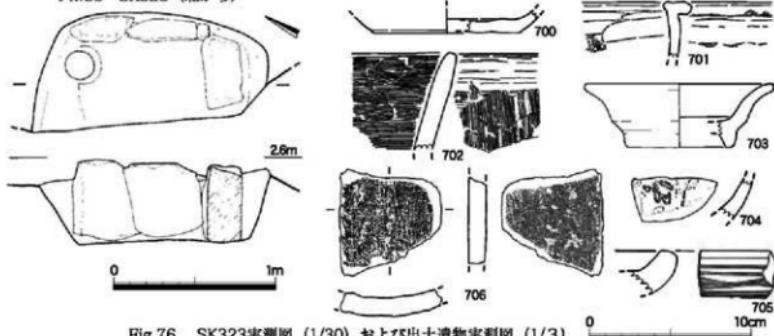
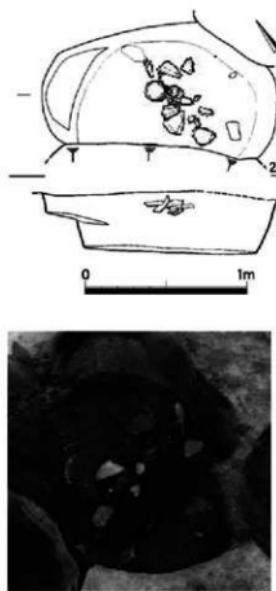


Fig. 76 SK323実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph.86 SK379 (西から)

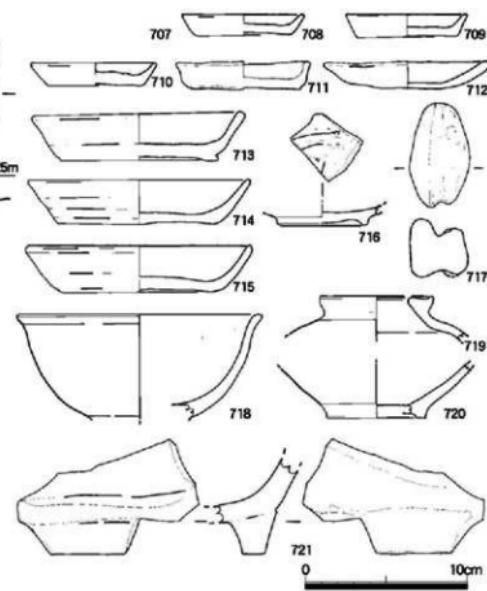


Fig. 77 SK379実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

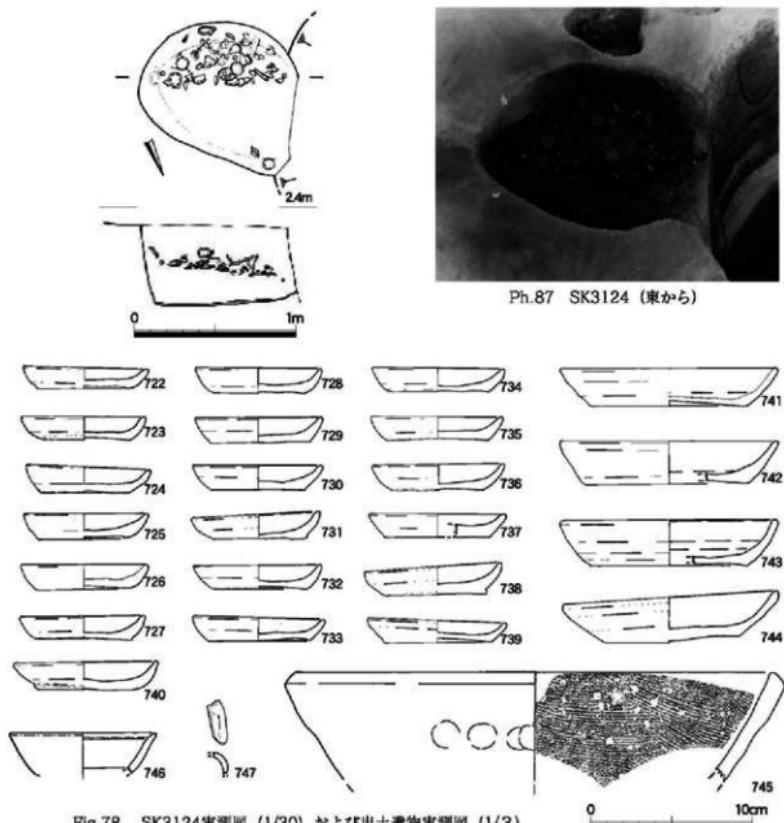


Fig. 78 SK3124実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

667は明代の龍泉窯系青磁碗で、外面は二次焼成を受け、釉が膨れる。668は明代の龍泉窯系青磁杯である。669は土師質土器で、片口の壺である。670は瓦質土器の湯釜で、外面には煤が付着する。671～683は中層出土で、671～675は回転糸切り底の土師器の小皿、壺である。676は瀬戸・美濃系陶器の天日茶碗、677は土師質土器の擂鉢、678は中国の染付碗B類である。679～682は高麗・朝鮮時代の陶器で、679は黒土と白土の象嵌青磁の壺、680は白土で象嵌された碗、681は無釉陶器で、肩部に多くの沈線が巡る。682は施釉陶器で、外面にはタタキが残る。683は平瓦である。684～693は下層出土で、684・686・687は回転糸切り底の土師器の小皿、壺、685は京都系土師皿、688は土師質土器の鉢、689は備前焼の擂鉢である。690は明代の白磁壺、692は明代の龍泉窯系青磁碗、691は高麗陶器である。693は土鉢で、重さ148.65gを量る。694は滑石製品である。695～699は最下層出土で、695は京都系土師皿、696・697は明代の龍泉窯系青磁、698は中世後期の備前焼の擂鉢、699は施釉陶器である。最下層からは15世紀後半、最上層からは17世紀初頭にかかる。

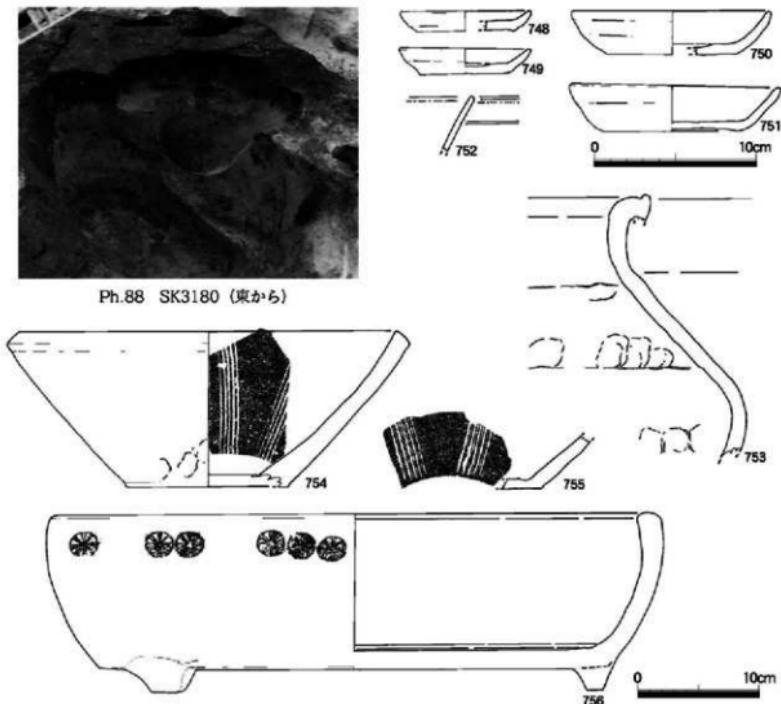


Fig.79 SK3180出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

遺物が出土する。

SK323 (Fig.76 Ph.85) 第3面C区で検出した。大振りの石を用いた石積み遺構である。

出土遺物 (Fig.76) 700は回転糸切り底の土師器の杯、701・702は土師質土器の鉢である。703は明代の龍泉窯系青磁碗である。704は元末の龍泉窯系青磁碗、705は磁州窯系の盤の口縁部片である。元未か。706は平瓦である。遺物の時期は古すぎる感もあるが、14世紀後半か。

SK379 (Fig.77 Ph.86) 第3面I区で検出し、SE241に切られる。西側に段をもつ。

出土遺物 (Fig.77) 712を除く707～715は回転糸切り底の土師器の小皿、杯である。712は押さえで調整する。716は楠葉型の黒色土器B類である。717は土錐で66.58gを量る。718は明代の龍泉窯系青磁碗、719は中国の施釉陶器である。720は低い輪状高台で、全面施釉され、高台には胎土目がつく。高麗青磁または越州窯系青磁の可能性もある。721は瓦質土器の火舍である。

SK3124 (Fig.78 Ph.87) 第3面I区で検出し、SE241に切られる。土器は全面に出土した。

出土遺物 (Fig.78) 722～744は回転糸切り底の土師器の小皿、杯である。745は瓦質土器の鉢である。746は白磁碗IX類、747は青白磁の合子である。13世紀後半と思われる。

SK3180 (Fig.79 Ph.88) 第3面H区で検出し、SE3188に切られ、覆土に炭化物を多量に含む。

出土遺物 (Fig.79) 748～751は回転糸切り底の土師器の小皿、杯である。752は白磁碗IX類、

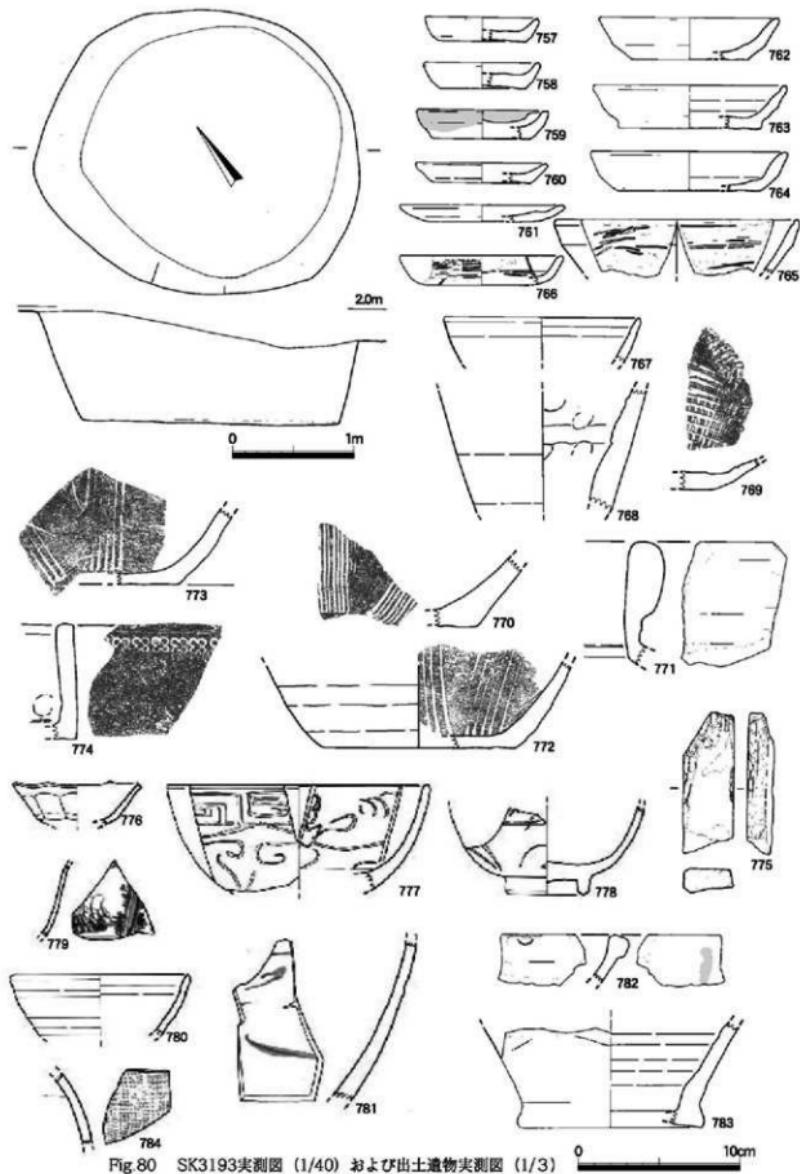


Fig. 80 SK3193実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

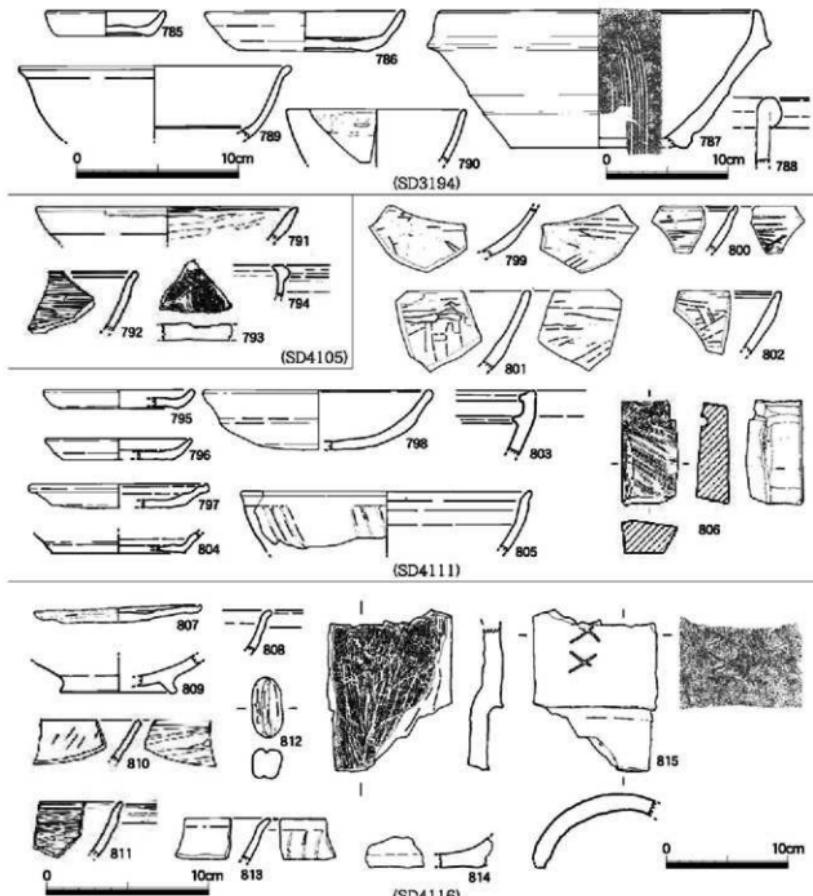


Fig.81 SD3194・4105・4111・4116出土遺物実測図 (1/3・1/4)

753は常滑焼の壺である。胎土には白色砂粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。754は備前焼で、中世2期の擂鉢、755は土師質土器の擂鉢、756は土師質土器の火舎である。13世紀後半と考えられる。

SK3193 (Fig.80) 第3面JK区で検出した。円形プランを呈し、深さは60cmを測る。

出土遺物 (Fig.79) 761を除く、757～764は回転糸切り底の土師器の小皿、壺である。761はナデで調整する。765・766は楕葉型瓦器の椀と皿である。767～769は瀬戸・美濃焼で、767は天目茶碗、768は瓶、769はおろし皿である。770・771は備前焼の擂鉢と壺である。772・773は土師質土器の擂鉢、774は土師質土器の火舎である。775は粗粒砂岩の砥石である。776は明代の白磁壺、777・778は明代の龍泉窯系青磁壺、779は染付碗B類、780は中国の天目茶碗、781・782は磁州窯

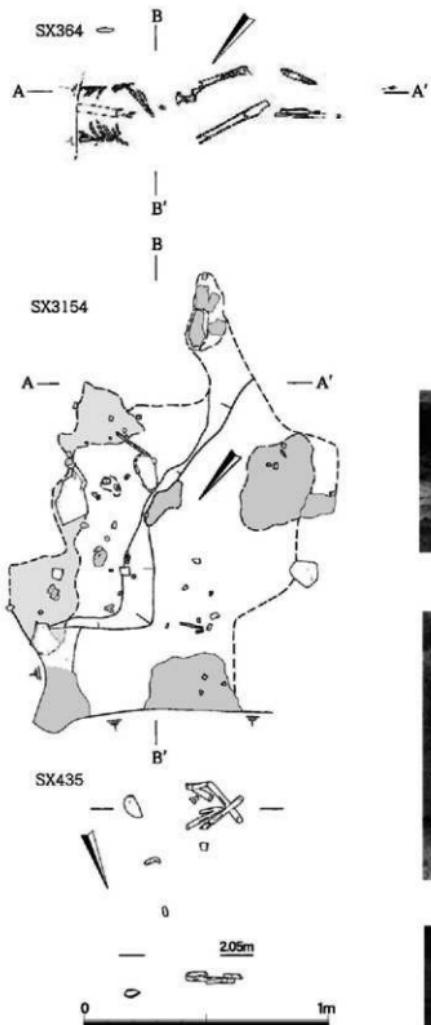
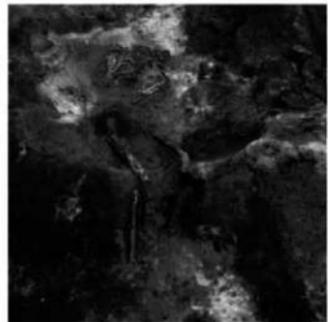
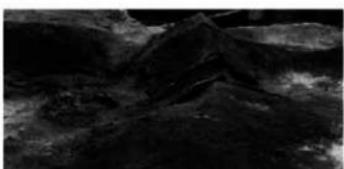


Fig.82 SX364・3154・435実測図 (1/20)

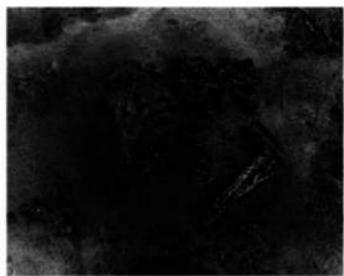
系の盤、783は中国の施釉陶器である。784は朝鮮時代の粉青沙器、時期は15世紀前半と考えられる。



Ph.89 SX364 (西から)



Ph.90 SX364 (北から)



Ph.91 SX364肋骨検出状況 (西から)



Ph.92 SX435 (東から)

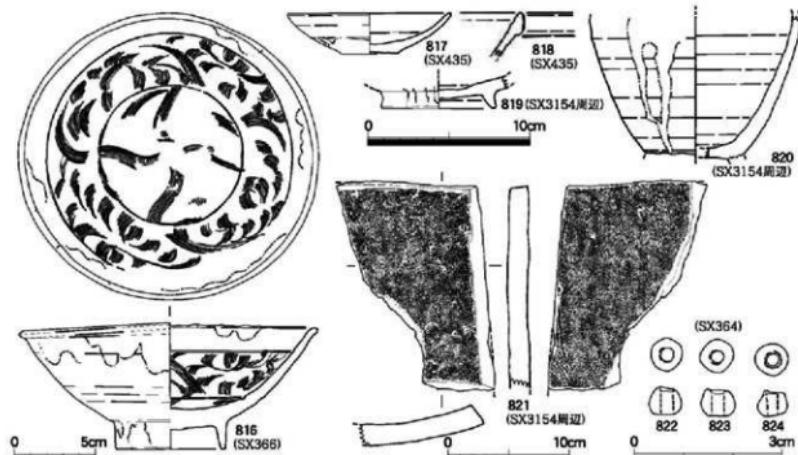
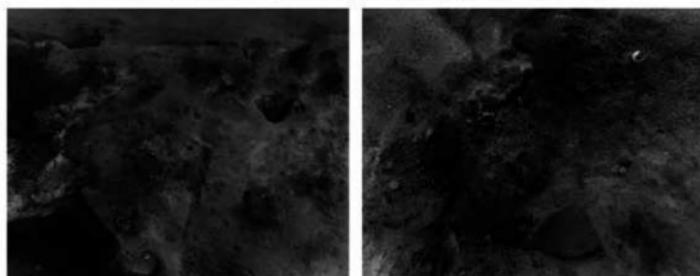


Fig. 83 SX364・366・3154・435出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/4)



Ph.93 SX3154 (南から)

Ph.94 SX3154頭蓋骨検出状況 (東から)



Ph.95 SX366出土遺物

3) 溝

SD3194・SD4105・SD4111・SD4116 (Fig. 81) SD3194は第3面JK区で検出した。N-68°-Eに方位をとる。幅230cm、深さ60cmを測る。SD4105・SD4111・SD4116は第4面IL区で検出した。ほぼN-37°-Wに方位をとり、並行に走る。SD4111は北側で緩やかに東側に弧を描く。

出土遺物 (Fig. 81) 785・786は回転糸切り底の土師器の小皿、壺である。787・788は備前焼で、787は中世5期の擂鉢、788は中世4期の壺である。789・790は明代の龍泉窯系青磁碗である。SD3194は15世紀前半である。791・792は瓦器楕で、792は楠葉型である。793・794は中国陶器の鉢である。他に龍泉窯系青磁も出土しており、SD4105は12世紀中頃から後半と考える。795は回転糸

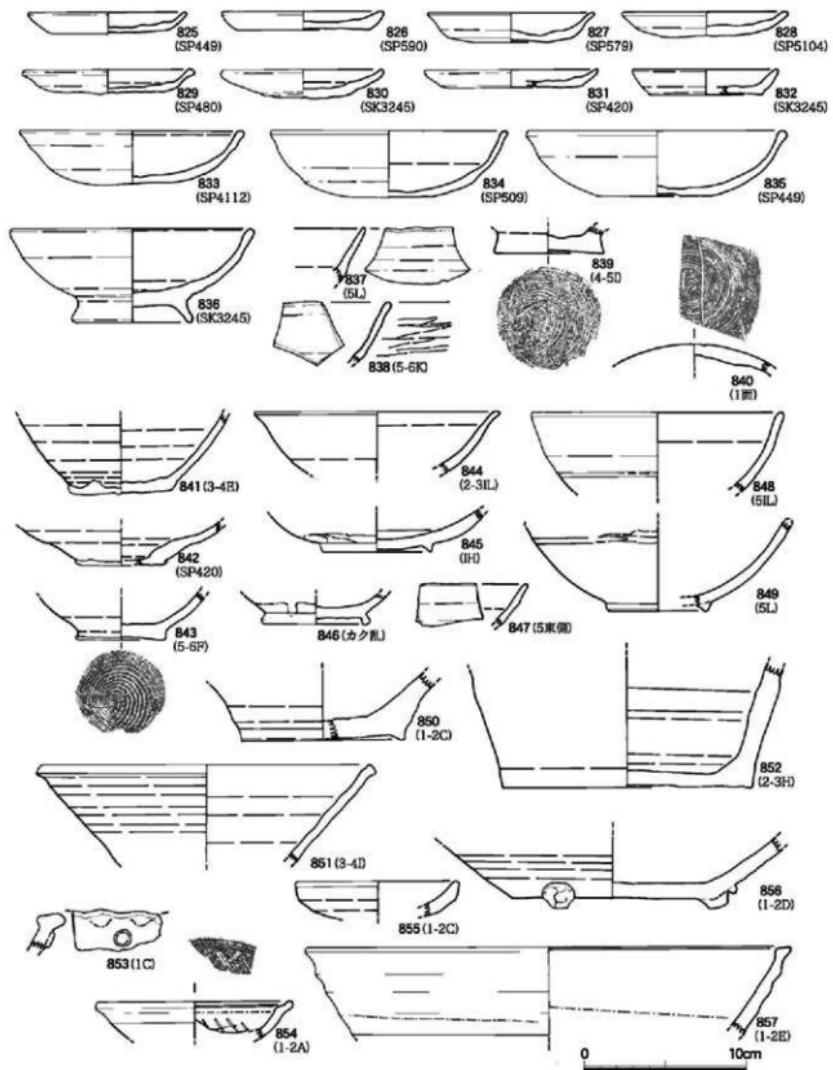


Fig.84 その他の出土遺物実測図 ①(土師器・須恵器・国産陶器) (1/3)

切り底、796・797はヘラ切り底の土師器の小皿である。798は丸底窓、799・800は黒色土器B類、801・802は瓦器続で800・802は楠葉型である。803・804は中国陶器、805は同安窯系青磁碗であ

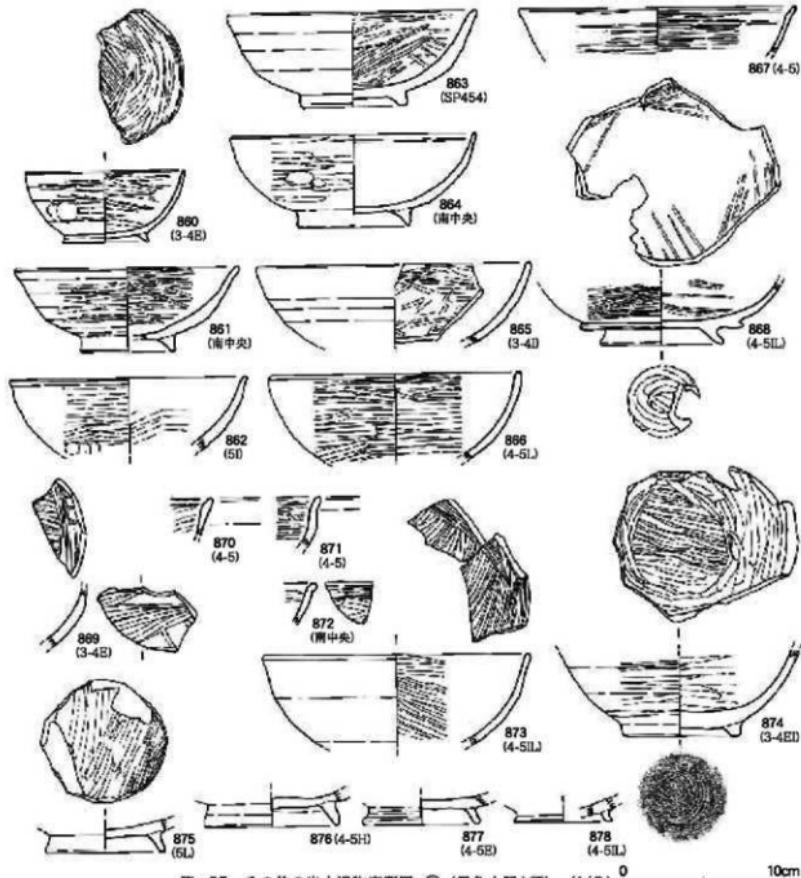


Fig. 85 その他の出土遺物実測図 ② (黒色土器A類) (1/3)



Ph. 96 包含層出土黒色土器A類・二彩大鉢

る。806は磁石で、滑石製石鍋の転用品である。SD4111は12世紀中頃から後半である。807は京都系土師器皿の模倣品で、回転ヨコナナで調整を施す。808は黒色土器A類、809・811は黒色土器B類、810は瓦器模で、811は楠葉型である。812は土麿で、重さは11.17gを量る。813は白磁碗V-2・b類、814は磁窯系の陶器である。815は丸瓦である。SD4116は11世紀後半～12世紀前半である。

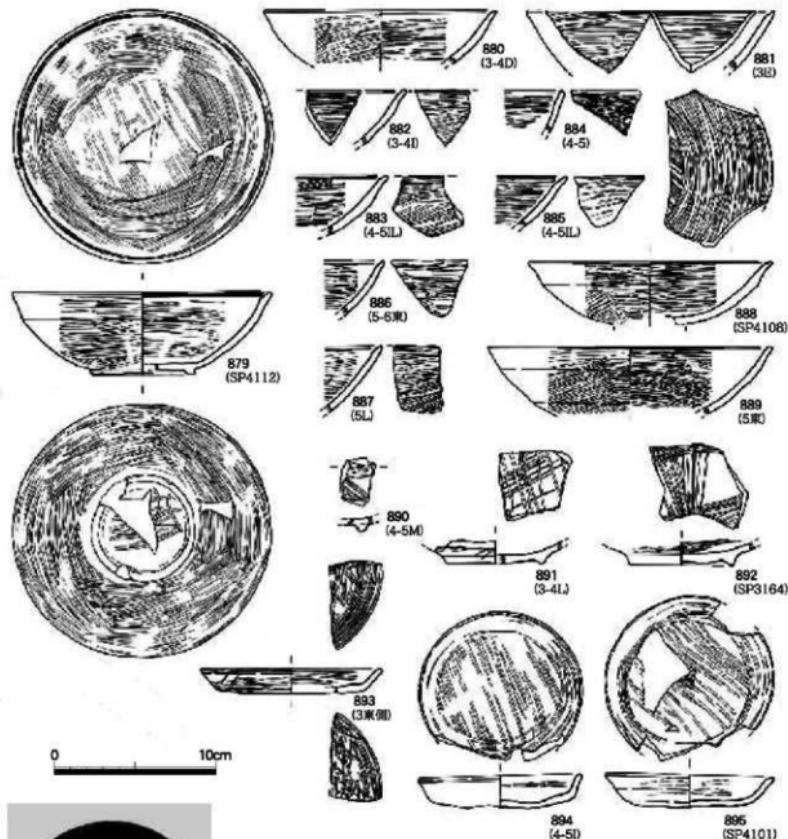
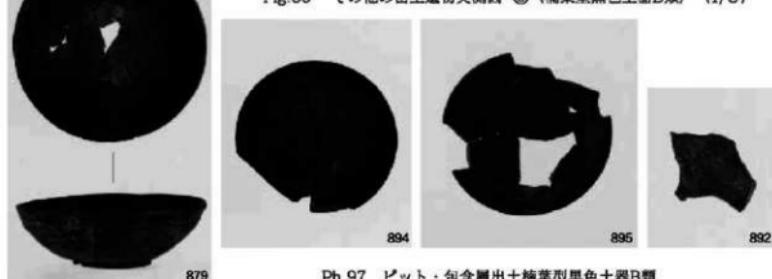


Fig. 86 その他の出土遺物実測図 ③ (桶葉型黒色土器B類) (1/3)



Ph. 97 ピット・包含層出土桶葉型黒色土器B類

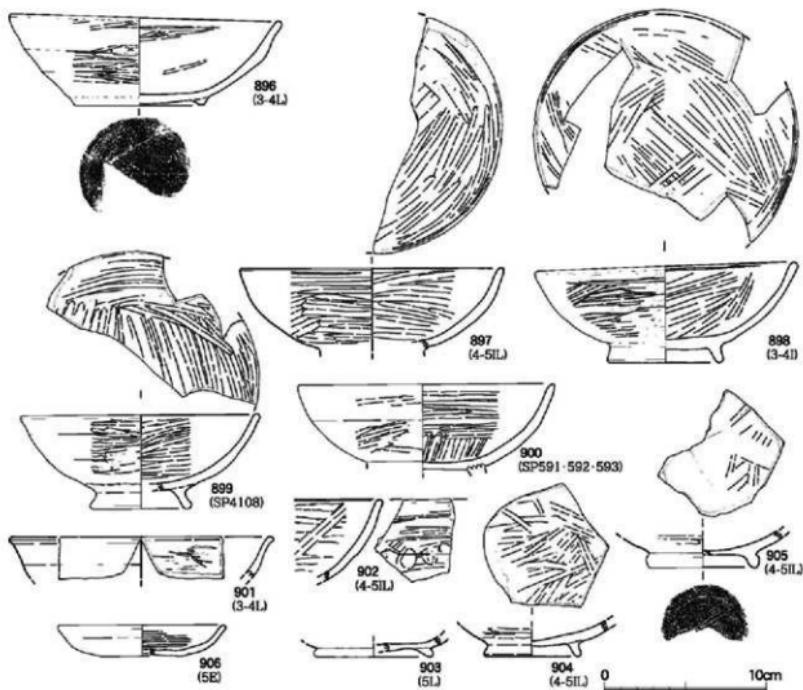


Fig. 87 その他の出土遺物実測図 ④ (黒色土器B類) (1/3)

4) その他の遺構

第3・4面から出土した人骨について説明する。人骨の考察については付論2を参照されたい。

SX364 (Fig.82 Ph.89~91) 第3面E区で検出した。標高は2.1~2.26mを測る。SX364と一緒に重なるようにSX3154が直下にあったため同時掘削してしまった。頭骨部分は後後に削平される。頭位は北東側で、方位はN-51°-Eをとる。右肋骨付近ではガラス小玉(822~824)が出土する。小玉はカリウム鉛ガラスで風化が著しい。SX3154との関係から12世紀後半か。

SX366 (Fig.5 Ph.816) 第2面から第3面の包含層掘削時にE区で、人骨2点と白磁碗V-4・b類(816)が出土した。標高は約2.2mを測る。12世紀中頃から後半である。

SX3154 (Fig.82 Ph.93・94) 第3面E区、SX364の直下で検出した。標高は2.0~2.12mを測る。炭化物と灰、人骨が散逸した状況で検出した。中央部分に頭骨の断面が確認できた。周辺からは灰釉陶器の破片(819・820)、瓦(821)が出土する。他に土師器小皿、壺の小片が出土するが、ヘラ切り底が大半のため時期は12世紀前半から中頃と考える。

SX435 (Fig.82 Ph.92) 第4面I区で検出した。集骨された状況で、掘り込み等は確認できなかった。白磁皿V-1・a類(817)、白磁碗IV類(818)が出土し、11世紀後半から12世紀前半である。

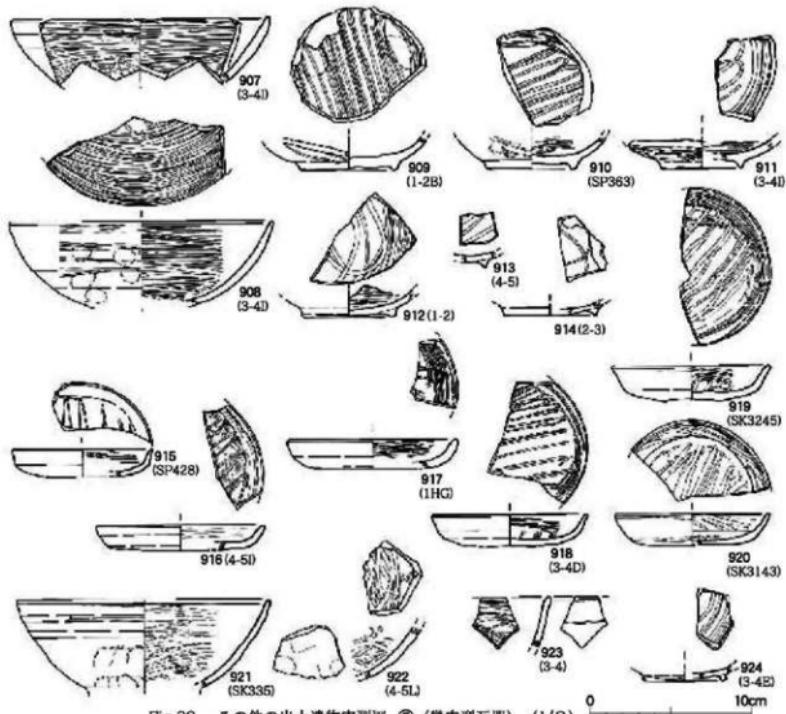


Fig. 88 その他の出土遺物実測図 ⑤ (鐵内型瓦器) (1/3)

5) その他の遺物

掲載できなかった遺構の遺物、包含層中の遺物を掲載した。

土師器・須恵器・國產陶器 (Fig. 84)

825~831はヘラ切り底の土師器の小皿である。832は回転糸切り底の土師器の小皿である。833~835は土師器丸底壺、

836~838は土師器の椀で、内面には部分的に研磨が残る。

839は土解器の底部片で、底部は回転糸切り底である。840は古墳時代の須恵器の壊蓋で、天井部にヘラ記号を記す。

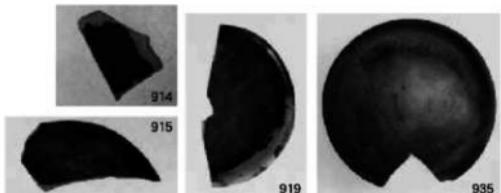
841~843・851は東播系の須恵器である。841の底部は雑なナテ、842・843は回転糸切り底、851は鉢である。

844・846は灰釉陶器、845・847~849は瓦器椀、850・852は國產陶器の底部片である。

853~857は美濃・瀬戸焼で、854はおろし皿、855は小皿、他は大皿の小片である。

858・859は唐津二彩大鉢である。

黒色土器A類 (Fig. 85 Ph. 96) 860は小型のもので、器壁は薄く、外面下半は回転ナテと研磨、上半は指押さえで調整される。胎土は金雲母を多く含み精良で、焼成は良好である。内面は黒色、外



Ph. 98 ピット・包含層出土楠葉型瓦器柄・皿

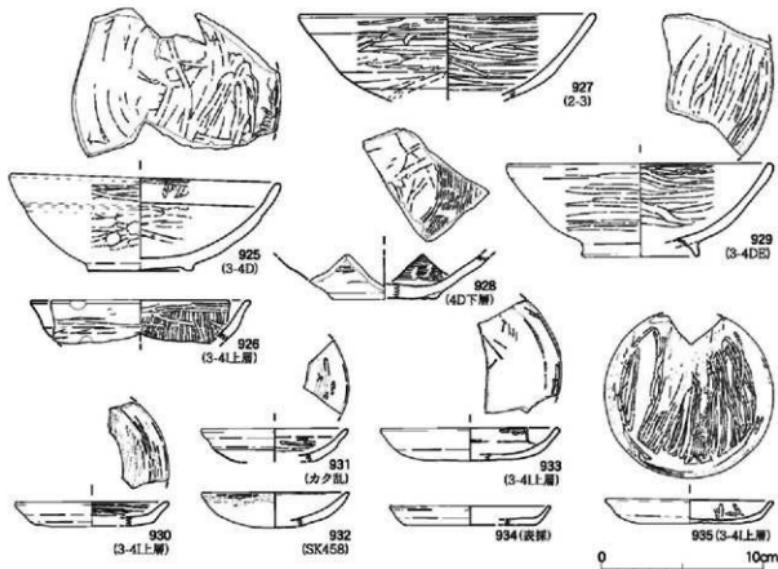


Fig. 89 その他の出土遺物実測図 ⑥(瓦器) (1/3)

面は明褐色を呈する。868は托上椀で、867と同一固体と思われる。ともに胎土は精良で、内外面とともに細かく研磨調整され、外面は明褐色を呈する。高台内も研磨調整が施され、口縁部内面には沈線が巡る。874は底部にヘラ記号が記される。

楠葉型黒色土器B類 (Fig. 86 Ph. 96) 879～892は椀、893～895は皿である。口縁部に平行した画線状の細いヘラ磨きを行う。見込や皿の内面にはジグザグ状や分割して暗文風にヘラ磨きを施す。高台は低く、断面三角形、逆台形を呈する。879はほぼ完形品である。口径15.8cm、高さ5.0cm、高台径6.4cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近でわずかな段をもって上方に延び、端部で外反する。断面台形の低い高台が付く。口縁部内面には沈線が巡るが、部分的に2本となる。内面は5分割して見込から口縁部へと研磨を施す。外面は4分割して口縁部から底部へと研磨を行う。高台内にも研磨を施す。胎土には金雲母を多く含み、色調は黒色を呈する。

黒色土器B類 (Fig. 87) 体部は内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと端部で強く外反するものがある。高台にも低いものと高いものが挙げられる。研磨調整の単位は幅広く、研磨の方向も平行と斜方向が同時に行われる。896・905は高台内にヘラ記号が記される。906は皿である。

楠葉型・和泉型瓦器 (Fig. 88 Ph. 98) 907～914は楠葉型の瓦器椀、915～920は楠葉型の瓦器皿である。907は器壁が厚く、外面の研磨調整も下半まで施される。908は器壁は薄く、外面の研磨調整は省略化になり、隙間も大きくなる。見込や皿の内面には平行線文やジグザグ状文、連結輪状文が研磨で描かれる。高台は低い。916は内面に黒色のものが付く。墨痕か。921～924は和泉型の瓦器椀である。楠葉型と較べると磨きの幅は広く、柔らかい。ヘラ磨きも口縁部に平行ではなく、斜方向に行われているものもある。高台は低く、外面には指押さえの痕跡が多く残る。

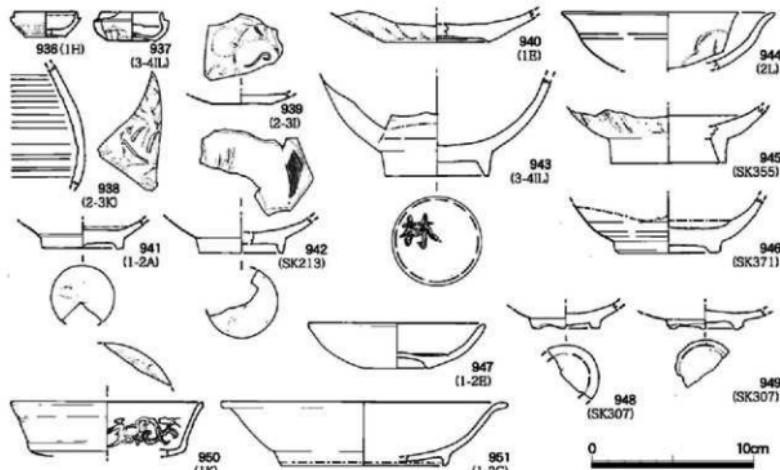


Fig.90 その他の出土遺物実測図 ⑦ (中国白磁) (1/3)

瓦器 (Fig.89 Ph.98) 黒色土器B類と同じく、高台は低いものと高いものがある。研磨は幅広で、規則性は見られない。また、不明瞭である。930～935は皿で、研磨は不明瞭である。

青白磁・白磁 (Fig.90 Ph.98) 936は白磁、937は青白磁の合子である。938は青白磁の瓶の小片である。939は皿VI類、940は皿XI類、941は碗皿類、944・945は碗皿類である。946は見込を輪状に釉剥ぎしたものである。胎土は柔らかく、疎である。947～951は明代の白磁である。947は甚筒底の皿、948・949は八角杯、950は枢府磁、951は皿である。

青磁 (Fig.91 Ph.98) 952～957は越州窯系青磁である。952は高台内に胎土目が付着する。954は疊付以外は全面施釉され、胎土目が残るが、高麗青磁の可能性もある。956は小碗III-1・b類である。958・959は同安窯系青磁である。960～978は龍泉窯系青磁、969・970・975は見込を釉剥ぎして草花が印刻される。

染付・中国陶器 (Fig.92 Ph.99) 979は元染で玉壺春形の瓶である。980は明代の染付碗B群である。981～984は天目茶碗である。985は華南三彩（トラディスクアント）の壺の小片である。橙色の胎土に内面は茶褐色の釉が垂れる。外面は黄と緑で彩色される。986は陶器で、橙色の胎土に黄褐色釉がかかる。外面には草花が線刻される。987は緑色の釉が全面施釉される。988は灰色の胎土に内面は透明釉がかかり、外面には黒褐色の釉がかかるが、層状に削られている。989は磁州窯系の鉢、990は壺で、緑色釉が内外面にかかる。991・992は磁龍窯系の碗と盤である。

ベトナム陶磁 (Fig.92 Ph.99) 993は鉛絵碗で、内外面の園線は赤、他は黒褐色で絵付けされる。

高麗・朝鮮時代の陶磁 (Fig.93 Ph.99) 994～997は高麗青磁で、994は高い高台を有する。998・999は象嵌青磁、1000は印花象嵌、1001・1002は粉青沙器で、1001は印花と刷毛、1002は刷毛目が施される。1003～1006は灰青陶器、1007～1009は軟質白磁碗、1010は硬質白磁碗、

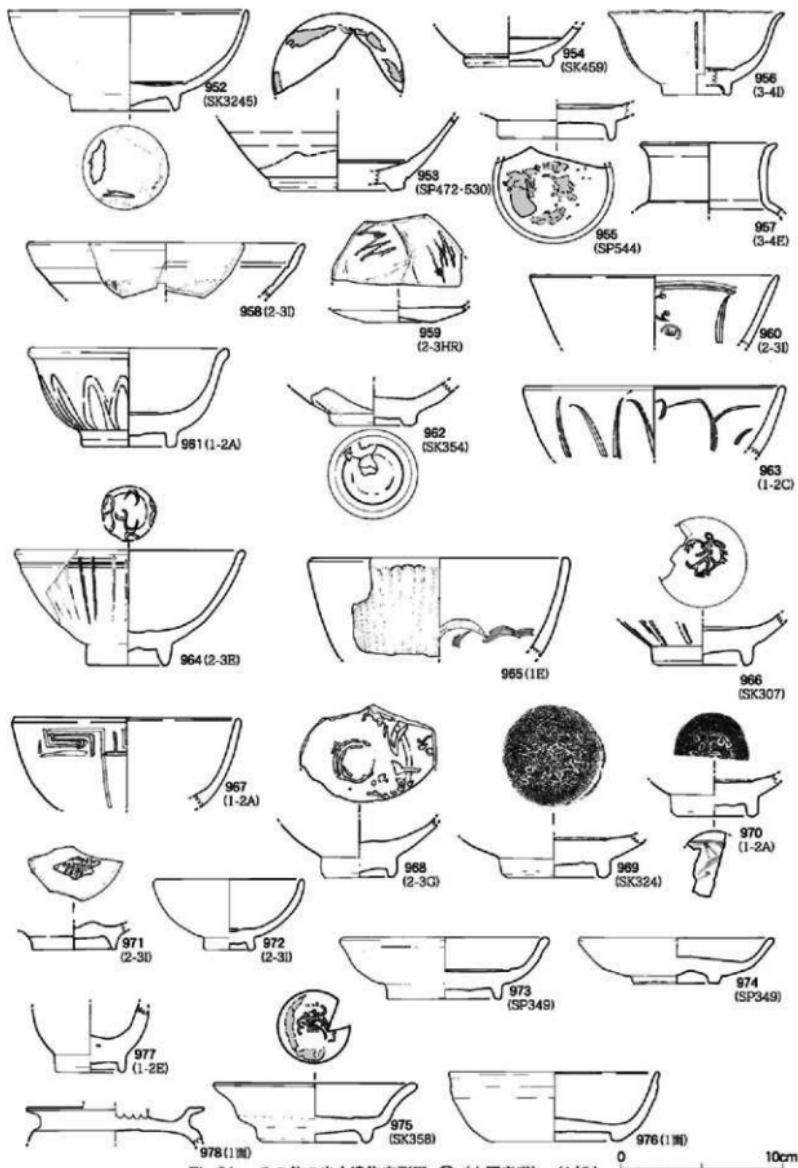


Fig. 91 その他の出土遺物実測図 ⑧ (中国青磁) (1/3)

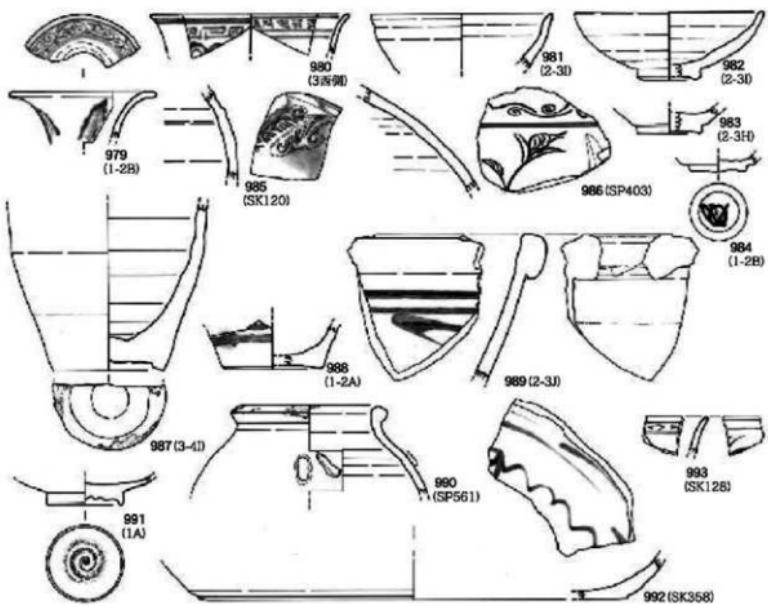
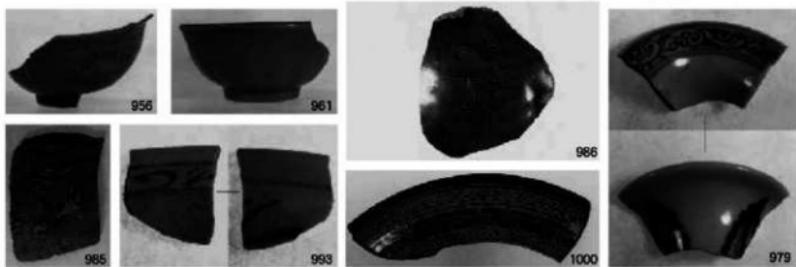


Fig.92 その他の出土遺物実測図 ⑤ (中国・ベトナム陶磁器) (1/3) 0 10cm



Ph.99 ピット・包含層出土輸入陶磁器

1011は軟質白磁皿である。1012~1016は朝鮮陶器である。

土製品 (Fig.94) 1017・1018は鉛、1019~1021は瓦玉、1022~1026は錫である。

鋳造関連遺物・銅製品・鉄製品 (Fig.94 Ph.100) 1027・1028は坩堝である。1027は銅津および溶解した銅が内面から口縁部外面にかけて厚く付着する。「EDX分析」「WDX分析」からは主に銅、他に鉛、錫をわずかに検出した。1033~1037は鋳造関連遺物で、分析の結果、1029・1031は青銅、1030は真鍮、1032は銅、亜鉛、鉛、錫を検出した。1033~1037は鉄製の釣り針で、1033は錆膨れのため詳細は見えないが、X線から連結式と思われる。1038・1039は鉄鎌である。

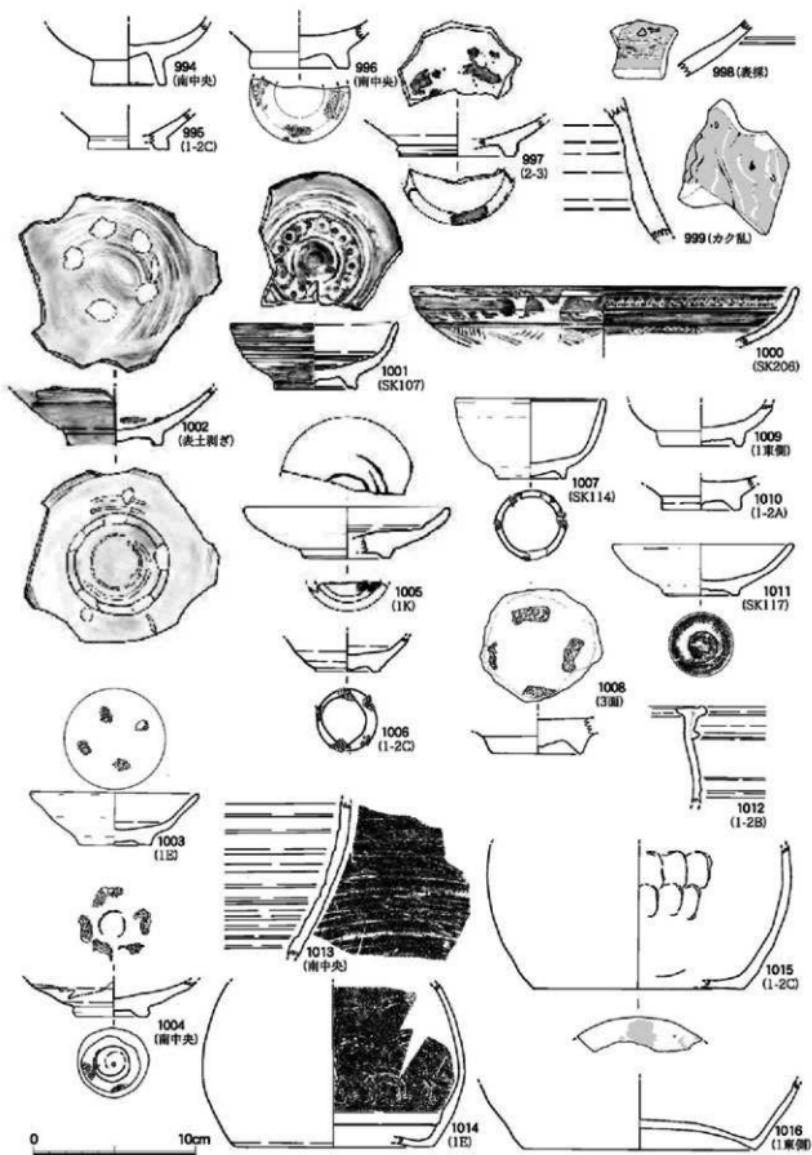


Fig. 93 その他の出土遺物実測図 ⑩ (高麗・朝鮮陶磁器) (1/3)

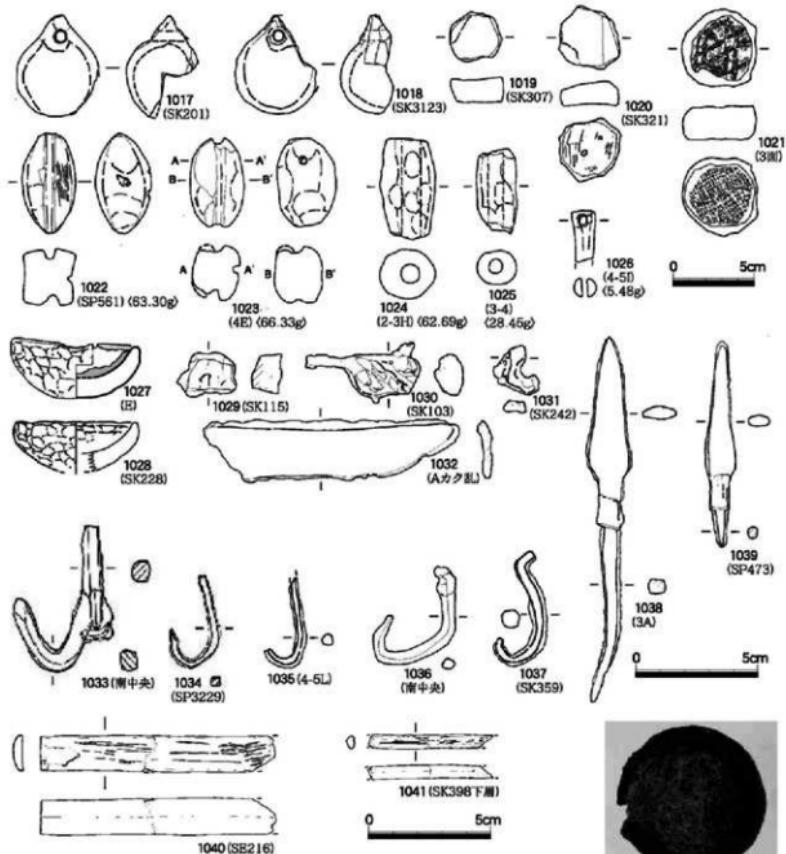
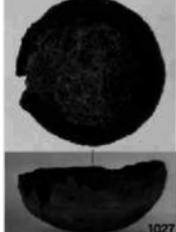


Fig. 94 その他の出土遺物実測図①
(鉄造関連遺物・銅製品・鉄製品・土製品・骨角器) (1/2 · 1/3)

骨角器 (Fig. 94) 骨角器の原料である。ともに表面を取り出したもので、1041の側面には括り切り痕が認められる。凸面は表面にあたり、直線的な面は丁寧に研磨が施される。1040は牛馬骨か。

石製品 (Fig. 95) 1042は黒色の基石か。1043は白色の石で丁寧に円形に仕上げられ、穿孔が3箇所残る。1044は石球、1045~1053は滑石製の錐である。形態として、上層出土のものは溝が一周巡るが、下層にいくにつれ、その溝が斜方向から抉られ、溝は凸凹となり、下層は溝は一周せず、上下端部にだけ抉りを入れる。1054は不明滑石製品、1056是有孔円盤、1057はスタンプ状のもので、ともに滑石である。1055は細粒砂岩の仕上げ砥石、1058・1059は滑石製の石錐である。



Ph.100 包含層出土石器

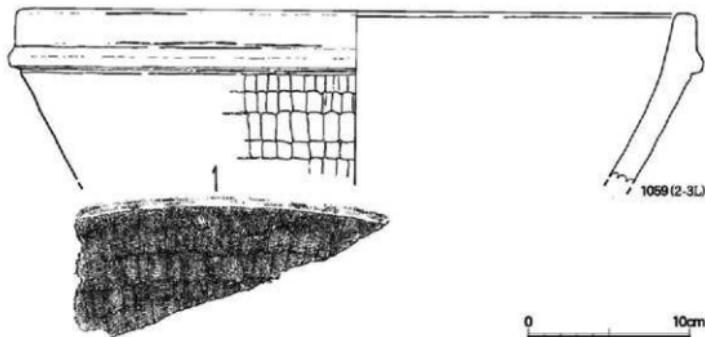
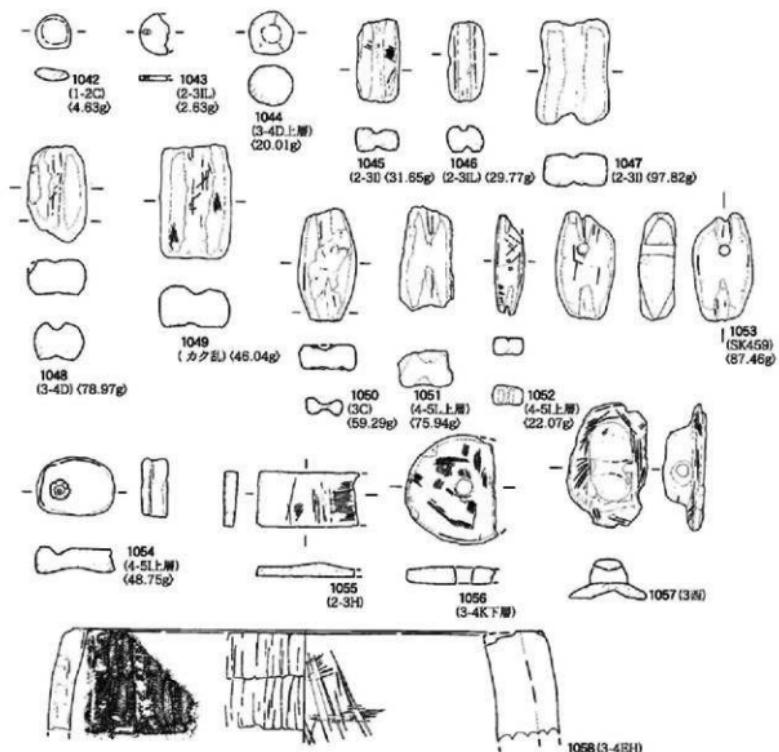


Fig.95 その他の出土遺物実測図 ② (石製品) (1/3)

IV. まとめ

今回の調査区では、11世紀前半から現代に至る遺構を検出した。11世紀前半の遺構は第4・5面の柱穴群である。第5面は地山である砂丘上、第4面は炭化物を多く含んだ黄褐色土で検出し、間層は炭化物を多量に含んだ灰色砂質土が層状になって堆積する。その包含層からは少量の越州窯青磁の他は国産の土師器や黒色土器B類が出土した。「て」の字状口縁の土師器皿とあわせて、かなりの割合で楕円型の黒色土器B類や瓦器が出土し、近畿地方との関連を示唆する。11世紀後半になると調査区内でも井戸が検出され始め、12世紀にかけては井戸、溝、埋葬関連遺構が見られるようになる。しかし、13世紀から14世紀にかけては遺構の広がりは縮小する。遺物は減少するものの、この時期からは朝鮮半島や東南アジアの陶磁器が出土する。元染、華南三彩、ベトナム陶磁などである。再び遺構の隆盛が見られるのは、15世紀後半からで、石積み遺構や井戸が多数検出され、遺物量も激増する。

本調査地点では多数の井戸を検出した。井戸によって、調査区の半分以上は削平されている。大きな傾向として、SE588のように板材を用いて井側を構築したものから、樋や曲げ物等木質を用いたもの、16世紀後半から17世紀になると、石組み(SE216)、瓦組みへの変遷が見られる。また、第2面で検出された石積み遺構はN-35°-Wに方位を取り、周辺の調査で確認されている中世の町割りと合致し、「息瀬」の砂丘の方向と一致するものである。

＜付論1＞

博多遺跡群第144次調査出土動物遺存体について

大規模事業等担当 屋山 洋

調査時に土壤の水洗選別等は行っていない。まだ同定作業の途中で種の割合などは不明である。現在同定できた種は哺乳類がイノシシ、シカ、クジラ・イルカ類、ウシ、ウマ、魚類は骨格標本をほとんど持っていないためマダイのみで後はフグ類、ハタ科の主上顎骨や前上顎骨等を確認しただけである。

食料残滓としての動物遺存体 今回出土した動物遺存体のほとんどは食料の内に伴って遺跡内に持ち込まれた。最も多いのはイルカ・クジラ類の椎骨で博多では中世後半以降かなり食べられる動物である。ほとんどは小型イルカ類の椎骨であるが、1点のみ椎体の長さ12.5cm、径9.3cmと中型のクジラも出土した。イノシシ・シカも多くに解体痕がみられる。シカは四肢骨の他に指骨が出土しているが、この部位は肉が少ないため解体時に最初に切り落とされる部位であるため、解体は博多の町内で行われたことが判る。マダイは主上顎骨の一つが約7cmと大きく全長は1m近い。他に中央で切断した上後頭骨と後半分を切断した主上顎骨が出土している。頭部を梨割りまた、ぶつ切りにしており煮物にして食した可能性が高い。他の魚骨も火を受けた痕跡は少ない。しかし塩焼きにしてもある程度では骨は白色化しないため煮魚と焼魚を区別するのは困難である。

骨角器材料としての動物遺存体 近世の遺構から出土したウシの中手足骨1点と中足骨1点のうち中手足骨は端部を鎌で切断している。同遺構からは同様に鎌の切断痕があるシカの大腿骨近位端が出土、また別遺構のウシ中足骨は近位端を鎌で切断しているが遠位側は2~3の刃痕を残して中断している。これは材料となる幹部の1/2程がはじけて割れており、切断に失敗したためと思われる。これらの遺物から調査区周辺が骨角器材料の加工場所だと考えられる。実際にSE216からウシ・ウマの中手足骨を加工した骨片(遺物番号1039。先端が折れており現状で長さ9.5cm、幅1.5cm、厚さ4.2mm。)が出土した。大きさから簪などの利用が考えられるが、同時にこの場所で製品化までしていたかは不明で、今後周辺調査区での水洗選別などで原料加工、製品製作時のチップ確認が必要である。

<付論2>

博多遺跡群第144次調査出土人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院

中橋 孝博

はじめに

商都・港町として古い歴史を持つ博多は、これまで多くの考古遺物、遺構とともに、かなりの数に上る歴史時代の人骨も出土して、人類学的にも興味深い地域となっている。今回、第144次調査によって新たに中世初期の人骨が出土したので、以下にその分析結果を報告する。

遺跡・資料・方法

第144次調査区域は、かつて「息の濱」と呼ばれた、博多遺跡群の中でも最も海に近い砂丘上に位置する。この区域では11世紀に初めて生活面が確認され、12世紀にはいって本格的に博多街区として機能し始めたことが明らかにされている。多くの輸入陶磁器などが出土する中で、火葬骨を含め計4体分以上の人骨片が出土した(表1)。時代は遺物、層序の考古学的な検証から、いずれも12世紀に所属するものと考えられている。なお、計測はMartin-Saller(1957)に従い、性判定には中橋(1988)を援用した。

表1.博多遺跡群第144次調査出土人骨

番号	性	年齢	時代	埋葬姿勢	遺存部位
SX364	女	成人	12C後半?	仰臥屈肢	軀幹、上肢、下肢
SX3154	?	成人	12C中頃～後半	火葬骨(複数個体を含む)	頭蓋、少量の四肢骨片
SX366	男	成人	12C中頃～後半	?	上肢、下肢
SX435	女	成人	11C後半～12C前半	集骨	上肢、下肢

結果

SX364: 頭位を北東にとり、緩く膝を曲げた仰臥位で検出された。大腿骨など骨体がやや細く、女性の可能性が高い。骨端線が見られないで成人であることは確認できるが、詳しい年齢は不明である。SX3154: 火葬された骨で炭化が著しい。ほとんどが頭蓋片で占められるが、ひび割れやねじれなどは見られず、すでに骨化した骨を焼いた可能性が考えられる。なお、細片化が著しいので確認は困難だが、量的にみて複数個体(2~3体分)が含まれているものと見なされる。

SX366: 包含層掘削時に出土したため、埋葬姿勢などは不明だが、骨の特徴として、きわめて屈強な傾向が認められた。

SX435: 上・下肢骨が集骨された状態で検出された。関節部位はなく、各骨の位置関係も乱れており、二次的な埋葬によるものと考えられる。骨体が細く(大腿骨中央周: 76mm)、成人ならば女性であろうが、骨端線の有無を確認できる部位が遺存しておらず、未成人である可能性も否定できない。

文献

Martin-Saller(1957): Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

中橋孝博(1988)古人骨の性判定法、日本民族・文化的生成(永井昌文教授追憶論文集)、六興出版

<付論3>

博多遺跡群第144次調査出土銭について

福岡市埋蔵文化財センター

片多 雅樹

博多遺跡群第144次調査からは83点の銅銭が出土し、内数点2~4枚接着していたものを剥離したところ、計92枚となった。銘文と枚数をTab.1に、構別別の出土銭文をTab.2に示す。Fig.96.97には主要なものの拓本、又は透過X線写真を、研ぎ出し（後述）により銘文を判読したものに関しては処理後

Tab.1 出土「銅銭」一覧表

銘文	初鑄年	時代	枚数	銘文	初鑄年	時代	枚数	銘文	初鑄年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	7	治平元通寶	1064	北宋	4	嘉泰通寶	1201	南宋	1
乾元重寶	768	唐	1	開寧元通寶	1068	北宋	4	紹定通寶	1228	南宋	1
宋通元寶	968	北宋	1	熙寧重寶	1072	北宋	1	淳祐元通寶	1241	南宋	1
太平通寶	977	北宋	4	元豐通寶	1078	北宋	8	永樂通寶	1368	明	3
淳化元通寶	999	北宋	1	元祐通寶	1093	北宋	4	洪武通寶	1368	明	1
祥符通寶	1002	北宋	1	紹聖元通寶	1094	北宋	3	寛永通寶		江戸	2
祥符元通寶	1006	北宋	2	元祐通寶	1098	北宋	1	無文銭			3
天聖元通寶	1023	北宋	1	熙寧元通寶	1101	北宋	5	欠損			11
景祐通寶	1034	北宋	1	大觀通寶	1107	北宋	2	判読不能			2
皇宋通寶	1039	北宋	11	政和通寶	1111	北宋	3				
至和元通寶	1054	北宋	1	淳熙元通寶	1174	南宋	1				計92枚

Tab.2 構別別「銅銭」一覧表

遺物番号	出土遺物	銘文	遺物番号	出土遺物	銘文	遺物番号	出土遺物	銘文
1060 SK216	板方東側	元豐通寶	1091 SK315 下層	景祐通寶		1122 SP445		紹聖元通寶
1061 SE241	上層	太平通寶	1092 SK315 最下層	元祐通寶		1123 E区	最上層	聖宋元通寶
1062 SE301	上層	聖宋通寶	1093 SK315 最下層	開元通寶		1124 H-G区	最上層	元祐通寶
1063 SE301	上層	□□□□	1094 SK315 最下層	元豐通寶		1125 1面包含層	××通×	
1064 SE301	中層	紹定通寶「背五」	1095 SK315 最下層	開元通寶		1126 BK区	1~2面包含層	皇宋通寶
1065 SE301	中層	聖××	1096 SK315 最下層	元豐通寶		1127 BK区	1~2面包含層	元×通寶
1066 SE301	中層	治平元通寶	1097 SK315 最下層	宋通元寶		1128 CK区	1~2面包含層	無文銭
1067 SE302		元豐通寶	1098 SK315 最下層	太平通寶		1129 DK区	1~2面包含層	××通×
1068 SE302		聖宋元通寶	1099 SK315 最下層	（皇）宋（通）寶		1130 E区	1~2面包含層	元符通寶
1069 SE302		祥符××	1100 SK312 No. 1	紹聖元通寶		1131 G-J区	2~3面包含層	洪武通寶
1070 SE304	板方下層	聖宋元通寶	1101 SK3124 No. 2	元祐通寶		1132 G-J区	2~3面包含層	聖宋元通寶
1071 SE319	上層	元祐通寶	1102 SK3124 下層	聖和元寶		1133 HK区	2~3面包含層	元豐通寶
1072 SE350	板方下層	元豐通寶	1103 SK3193 下層	聖和元寶		1134 HK区	2~3面包含層	耿和通寶
1073 SE367	板方	開元通寶	1104 SK115	熙寧元通寶		1135 I区	2~3面包含層	元祐通寶
1074 SE394		太平通寶	1105 SK115	聖宋元通寶		1136 I区	2~3面包含層	太平通寶
1075 SE3167	上層	咸和通寶	1106 SK115	嘉祐通寶		1137 I区	2~3面包含層	無文銭
1076 SE3173	上層	聖××	1107 SK115	淳祐元寶「背三」		1138 I区	2~3面包含層	淳熙元通寶
1077 SE3173	中層	咸和通寶	1108 SK115	淳化元通寶		1139 L区	2~3面包含層	××通×
1078 SE3173	中層	開元通寶	1109 SK115	皇宋通寶		1140 A区	3面包含層	聖寧重寶
1079 SE3188		聖宋元通寶	1110 SK115	聖宋元通寶		1141 AK区	3面包含層	皇宋通寶
1080 SE3205	上層	治××	1111 SK115	開元通寶		1142 南側中央		永樂通寶
1081 SK101		寛永通寶	1112 SK202	祥符通寶		1143 南側中央		永樂通寶
1082 SK123	板方	□□□□	1113 SK202	寛永通寶		1144 南側中央		皇宋通寶
1083 SK125		治平元通寶	1114 SK226	祥符元通寶		1145 南側中央		永樂通寶
1084 SK125		聖宋通寶	1115 SK242	治平元通寶		1146 南側中央（B~9層）	開元通寶「背月」	
1085 SK125		聖宋通寶	1116 SK245	熙寧元通寶		1147 I区	南矢板隕出層	大觀通寶
1086 SK246		天聖元寶〔背次文〕	1117 SK244	皇宋（通）寶		1148 矢板隕出層	××背×	
1087 SK315	上層	皇宋通寶	1118 SK335 中層	（治）平元通寶		1149 衣張	□×××	
1088 SK315 中層		皇宋通寶	1119 SK335 中層	紹聖元通寶		1150 衣張	無文銭	
1089 SK315 中層		元祐通寶	1120 SK380	開元通寶		1151 衣張	乾元重寶	
1090 SK315 中層		祥符元通寶	1121 SP3131	大觀通寶		1152 判讀不能	○:判讀不能 ×:欠損 () :□又は×が並んである	

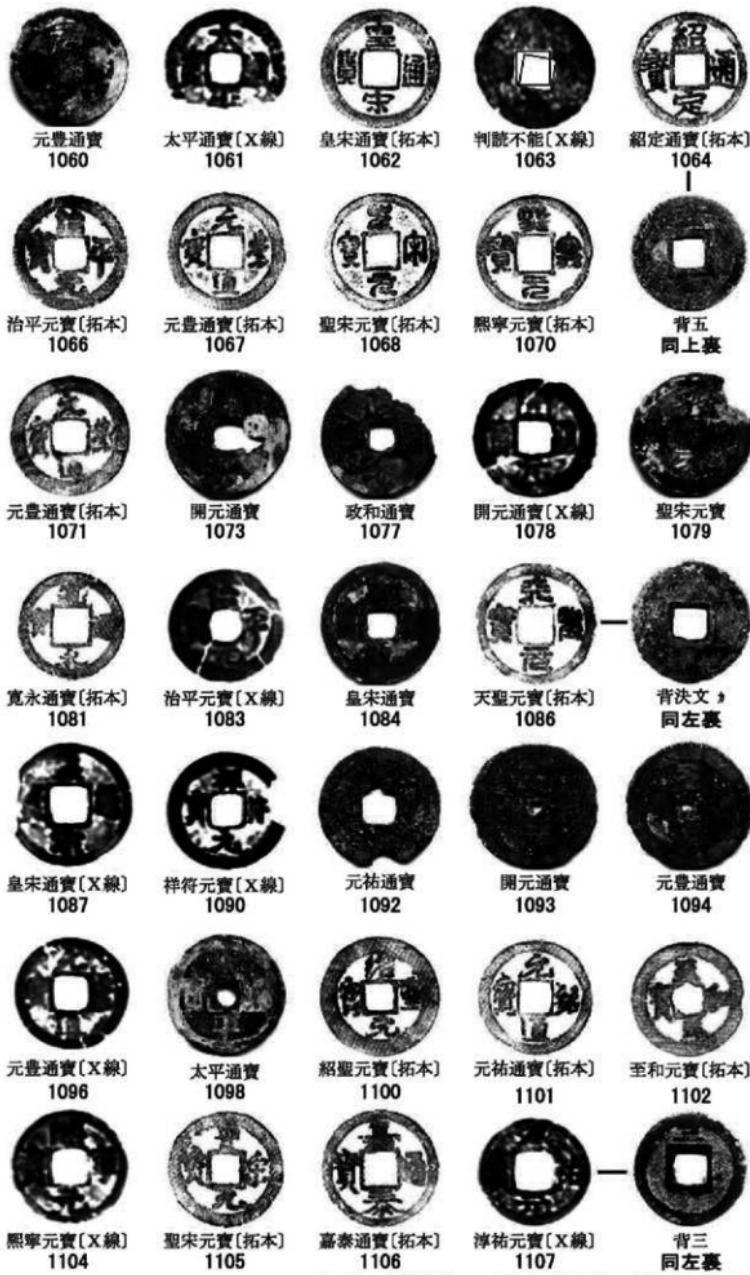


Fig. 96 出土銅錢

(数字は遺物番号、[X線]は透過X線写真)



淳化元寶[X線]
1108



皇宋通寶[X線]
1109



聖宋元寶[X線]
1110



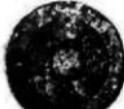
開元通寶[X線]
1111



祥符通寶[X線]
1112



寬永通寶[X線]
1113



祥符元寶
1114



治平元寶
1115



紹聖元寶
1119



開元通寶[X線]
1120



大觀通寶[拓本]
1121



紹聖元寶
1122



聖宋元寶[拓本]
1123



元祐通寶[拓本]
1124



皇宋通寶
1126



無文錢[X線]
1128



元符通寶
1130



洪武通寶[X線]
1131



熙寧元寶
1132



元豐通寶
1133



政和通寶[X線]
1134



元祐通寶
1135



太和通寶[拓本]
1136



無文錢[X線]
1137



熙寧重寶
1140



皇宋通寶
1141



永樂通寶[拓本]
1142



皇宋通寶[拓本]
1143



皇宋通寶[拓本]
1144



永樂通寶[拓本]
1145



開元通寶[X線]
1146



背月・菊輪
同左裏



大觀通寶[拓本]
1147



無文錢[X線]
1150



乾元重寶[X線]
1151

Fig. 97 出土銅錢2

(数字は遺物番号、[X線]は透過X線写真)

写真を示す。

銘文を解読できた（銭文4文字を限定できた）76枚のうち北宋銭が58枚と7割以上を占め、これは博多遺跡群では共通の様相といえる。無文銭と記した3点（遺物番号：1128.1137.1150）は比較的状態が良かったものの銭文が一向に浮かび上がらなかつたものを指し、断定はできない。また、判断不能とした1063も状態は良かったが銭文は判読できず、透過X線写真からも分かるように中央の方穿が約10°傾いた状態で二つ重なり合っており、鋳込みを失敗した不良銭かもしれない。

《研ぎ出しによる銭文の判読》

壺に収められた備蓄銭などを除く出土銭の多くは鋳に覆われ、そのままで銭文を読むことができない状態で出土する。そのため、従来の鋳取り作業による銭文の凹凸を復元し拓本をとる方法では、大量の処理が困難であり、千枚を超える銅銭が出土することもある博多遺跡群では、その半数以上が解読不能となっていることも少なくない^{1) 2)}。福岡市埋蔵文化財センターでは平成11年度より透過X線撮影装置が導入され、銭文の判読にも大きく貢献している³⁾。しかし著しく腐蝕の進んだ資料に対しては、手の施しようが無く導入後も解読不能とせざるを得なかった。そこで磁石や耐水ペーパーを用いて、平滑な面を研ぎ出すことにより浮かび上がる、文字面と鋳もしくはかみこんだ砂など異物との、僅かなコントラストの差から銭文を判読する新しい処理法を試みたところ、良好な結果が得られた。

研ぎ出し工程をFig.98に示す。まず全ての資料の透過X線写真を撮り、そこで状態の善し悪しを振り分け、研ぎ出す資料を選定する。次に選定した資料にアクリル樹脂（ハヤブサ・NAD-10）を減圧含浸し（pct.1）強化する⁴⁾。グラウダーを用い平らな面を削り出す（pct.2.3）。その際文字面まで削り出すのではなく、あくまで平らな面を出すまでに留める。この段階で再度透過X線写真を撮影することにより、銭銘が解読されるものもある。もしくは一字でも判読できると文字面と背面が判明し、作業が短縮できる。磁石を用いて更に平滑な面を研ぎ出す（pct.4）。方穿又は肉郭の輪郭が表れたら、粗さの異なる5種類の耐水ペーパーを用いて仕上げる（pct.5）。腐蝕の進んだものほど文字が浮かび上がる瞬間は短いため、こまめに文字面を確認しながら研いでいく。文字が判読できたらアルコールに浸け脱水した後、乾燥機にて乾燥させる（pct.6）。処理後は速やかに写真を撮り、腐蝕防止剤（ヘンツ・ドリ・アーマー）を含むアクリル樹脂（ハヤブサ・B72）を研磨面に塗布する。

今回は透過X線撮影をした時点で39点の銭文が判読し、残りの47点は研ぎ出しにより判読できたが⁵⁾、オリジナルな面まで研ぎ出すということにより破壊的処理法になることや、金属製品に対して水を使うという問題点はある。しかし、銭文を判読し銘文が解読されてこそ、出土銭の資料としての価値が表れると思えば、有効な手段ではないかと思われる。

[註]

- 1) 大庭康時(編)1989「都市計画道路博多駅周辺線関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)～博多～」福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集 福岡市教育委員会
- 2) 大庭康時(編)1991「博多17-博多遺跡群第42次発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集 福岡市教育委員会
- 3) 片多雅樹・比佐陽一郎2000「博多113次調査出土銅銭の透過X線撮影」「博多73-博多遺跡群第113次調査の概要」福岡市埋蔵文化財調査報告書第631集 福岡市教育委員会
- 4) この時点では従来のメスや針を用いた鋳取り作業は実質不可能となる。

[参考文献] 太田保(編)1981「東洋古銭価格図鑑」万国貨幣洋行



pct. 1 アクリル樹脂を減圧含浸、強化



pct. 2 グラインダーを用い平らな面を削り出す



pct. 3 平らになった文字面



pct. 4 砂石を用い平滑な面を研ぎ出す



pct. 5 研ぎ出しにより銘文が浮かび上がる



pct. 6 恒温乾燥機にて乾燥

〔遺物番号：1089の例〕



鉛汁が砂を咬み込み
鉛玉の状態で出土

透過X線では
銘文の判読が困難

研ぎ出しにより
『元豊通寶』が浮かび上がる

Fig.98 研ぎ出し工程

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 発行機関 発行年月日 作成機関ID 郵便番号 住所	はかた ひやくよん 博多104 博多遺跡群第144次調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書 850 足野惠美 福岡市教育委員会 福岡市教育委員会 20050331 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	コード 追跡番号	北緯 (世界測地系)	東經 (世界測地系)	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかじんしょくおひこ 福岡県福岡市 じゅうたくくつばねちょう 博多区網場町 117-11	40131	0121	33° 35' 52"	130° 24' 28"	20030728 ~ 20031128	400 ビル建設
所収遺跡名	種別 主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項
博多遺跡群	中世/近世 集落 (都市)	井戸 土坑 溝 埋葬関連遺構 ビット	38 24 5 4 多数	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器 高麗・朝鮮陶器・中国陶器・ベトナム陶磁 白磁・越州窯系青磁・龍泉窯系青磁 同安窯系青磁・青白磁・染付 瓦・土製品・石製品・金属製品 铸造関連遺物・骨角器 人骨・獸骨			

はかた
博多104

— 博多遺跡群第144次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集

2005年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 松影堂印刷株式会社

福岡市博多区吉塚5丁目13番40号